人と地域が織りなす文化
—富山県氷見市の調査記録—

地域社会の文化人類学的調査 23

2014

富山大学人文学部文化人類学研究室

目次

はじめに（野澤豊一、藤本武） 1

1.　氷見市の概要 2

2.　比美町商店街の継続性と観光事業との関連（西里紗） 19

3.　氷見市の「ご当地食」とそれに関わる地域の人々（村田葉月） 36

4.　氷見の定置網漁とその漁師（檀野祐作） 50

5.　氷見の八艘張網漁――後継者問題を中心に（中村春貴） 62

6.　山間地帯での農業形態について――一刎地区の事例から（木村綾） 72

7.　氷見祇園祭（趙力鳴） 82

8.　新保の秋祭りにおける獅子舞――今後への「継承」（南谷綾香） 94

9.　一刎地区における獅子舞とその継承問題（上野成穂） 109

10.　祭礼の運営と継承――一刎八幡宮奉拝三十三年式年大祭の事例より（横江彩香）
..... 122

11.　氷見市の伝統的婚礼儀礼の変化と衰退――一刎地区を調査地として（伊藤綾奈）
..... 135

12.　氷見市街地における子どもの遊びの変遷（山口佑介） 145

13.　子どもの遊びの変化――氷見市一刎を調査地として（伊藤愛由美） 157

はじめに

富山大学人文学部文化人類学研究室では、1979 年の研究室創設以来、北陸の一地域で調査実習を行い、得られた知見を報告書『地域社会の文化人類学的調査』にまとめてきました。本報告書はその第 23 巻になります。

学生たちが氷見市で調査すると決めたのは 2012 年 11 月でした。その後数回にわたって日帰り調査に通いながら、学生たちは各々のテーマを絞り込みました。メインとなる調査は、2013 年 9 月 14 日から 20 日にかけて、氷見市中心部からほど近くにある民家を借りて、合宿というかたちで実施しました。その後は必要に応じて各自が補充調査を行いました。

氷見市のなかでも、約半数の学生は市街地を中心に、残りの半数は農村部（その大半は一刎地区）で調査を実施しました。これによって、地域の多様性をある程度は反映した報告書になったと思います。調査テーマも、生業や祭礼、儀礼といった、文化人類学の古典的テーマから、商店街やいわゆる「ご当地グルメ」、地元の子どもたちの遊びといった、現代的なテーマまで、幅広いものになりました。

じつは 2013 年度は、学期途中に担当教員が変わるという異例の、学生たちからすれば大きな逆境下で調査実習が行われました。学生たちに戸惑いはもちろんあったと思いますが、それでもしっかりと調査に取り組み、最終的には例年と比べて何ら遜色のない着実な調査報告書をまとめてくれたように思います。

とはいえ、個々の記述にはまだまだ初歩的な誤りや未熟な議論があるかもしれません。この冊子は「報告書」であると同時に、彼ら一人ひとりの「はじめての調査」の記録でもあります。文化人類学のフィールドワークでは、客観的な事実を記録することと同じくらいに、調査をする者が他者と出会い、それまでの自分の常識が揺さぶられるという経験を大事にします。学生たちが「文化人類学的」と言えるほどの本格的な調査をしたとは言えないかもしれませんが、彼らが調査中に感じたであろう新鮮な驚きは、文化人類学者のそれと本質的には違わないのではないかと思います。本報告書を手に取られる際には、そうした背景をわかっていただけると幸いです。とはいえ、本文中の誤りのすべての責任は私たちにあることも、ここで明らかにしておきます。

調査中にお世話になったすべての方々のお名前をここにあげることはとてもできません。章末の謝辞で述べている学生も多くいますが、ここでは調査中に特にお世話になった、林達也さん、角隆治さん、奥原トヨ子さんに感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。

2014 年 2 月

野澤豊一（金沢大学国際文化資源学研究センター）／藤本武（富山大学人文学部）

1.　氷見市の概要

1-1.　地形と気候

氷見市は富山県の西北部に位置し、東部は富山湾に面している。南部は高岡市に隣接している一方、北部から西部にかけては石川県七尾市、中能都町、羽咋市、宝達志水町と接している。北西部では宝達山、石動山を主峰とする標高 500 メートル前後の宝達丘陵を有し、南部では 200 メートル前後の二上山丘陵が高岡市との境界を形成している。これらの丘陵から多くの谷が形成されており、さらにこれらの谷からは、下田川、宇波川、阿尾川、余川川、上庄川、万尾川、仏生寺川、泉川など多くの河川も派生している。諸河川は市街地を通り富山湾へ東流し、沖積平野など下流域の土地を潤している。

氷見市の気候は、年間の平均気温が約 14℃で、海沿いを暖流である対馬海流が流れるため、比較的温暖な気候である。

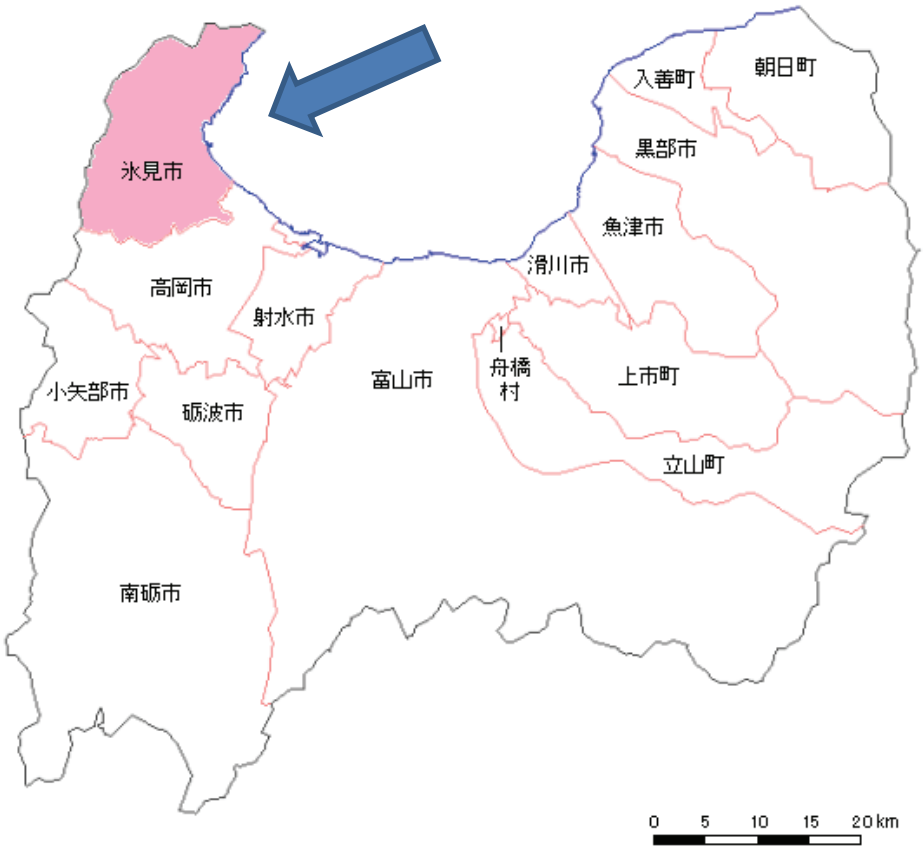


図 1.　富山県内における氷見市の位置

（ウェブサイト「いこまいけ高岡」を参考に作成）

図 2.　氷見市周辺の地図（ウェブサイト「いこまいけ高岡」を参考に作成）

1-2.　歴史

氷見の土地はその昔より肥沃な土地として知られ、古代から人々の生活に適した土地であった。

奈良時代の中頃、大伴家持が越中司として氷見に赴任し、多くの和歌を詠んだ。家持は越中の自然、花鳥風月を好んで歌にしており、当時の様子が「万葉集」に詠まれている。

桃山時代に入ると、氷見は前田氏が治める加賀藩の土地となった。加賀藩は全国最大の雄藩として知られており、約 300 年間、氷見は加賀に属した。この頃（江戸時代）、氷見の町は 16 に分かれ、南十町・北六町と呼ばれた。当時の氷見町民の主な生業は漁業で、網の改良によって漁獲量が増加し、安政 6 年（1859 年）にはサバとアジが大豊漁であったという記録が残っている。

明治 4 年（1871 年）になると、新政府がそれまでの藩を廃止して府と県を置いた（廃藩置県）。氷見は金沢藩（旧加賀藩）から金沢県に属したが、その後七尾県、新川県、石川県と変わり、明治 16 年（1883 年）に石川県から分離して富山県の一部となった。明治 22 年（1889 年）には、氷見町ほか 20 か村が誕生し、明治 29 年（1896 年）には氷見郡となった。昭和 27 年（1952 年）から市制を施行し、その後昭和 29 年（1954 年）までに 3 回の合併の後、一郡一市となった。

明治になると鉄道敷設の波紋が広がっていったが、氷見に鉄道が開通したのは大正元年（1912 年）のことであった。昭和 54 年（1979 年）には氷見バイパスが開通し、さらに交通の便が良くなった。

表 1.　氷見の略年表（参考文献『氷見のあゆみ』を元に作成）

時代	西暦	年号	できごと
江戸	1859	安政 6	氷見浦サバとアジ大豊漁
明治	1882	明治 15	氷見町大火、1600 戸焼失
	1889	明治 22	町村制施行に伴い、合併の後、氷見町が発足
	1896	明治 29	郡の分割により、氷見郡に所属
大正	1912	大正元	中越鉄道氷見高岡線開通
昭和	1928	昭和 3	氷見漁港第 1 期修築工事完成
	1938	昭和 13	氷見町大火、1543 戸焼失
	1940	昭和 15	加納村、稲積（いなづみ）村を編入
	1952	昭和 27	碁石村、八代村、余川村を編入し、氷見市誕生
	1953	昭和 28	窪村、宮田村、上庄（かみしょう）村、熊無村を編入
	1954	昭和 29	大田村以外の氷見郡全てが氷見市に編入
	1979	昭和 54	氷見バイパス開通

1-3.　人口

「人口・面積・人口密度」のホームページの記載によれば、2013 年（平成 25 年）の氷見市の人口は 49，828 人（外国人は含まれない）である。1920 年（大正 9 年）から 2013 年（平成 25 年）までの氷見市の推移を、以下の図 3 に示した。これを見ると、1940 年（昭和 15 年）から 1950 年（昭和 25 年）かけて、第一次ベビーブームの影響で氷見市の人口は増加した。だが、1950 年（昭和 25 年）のピークが過ぎ、それから 20 年のあいだ人口は減少し続けていった。その後、人口は 1970 年（昭和 45 年）から 1985 年（昭和 60 年）までの第二次ベビーブームの際にやや増えたが、それ以降再び減少しつつある。

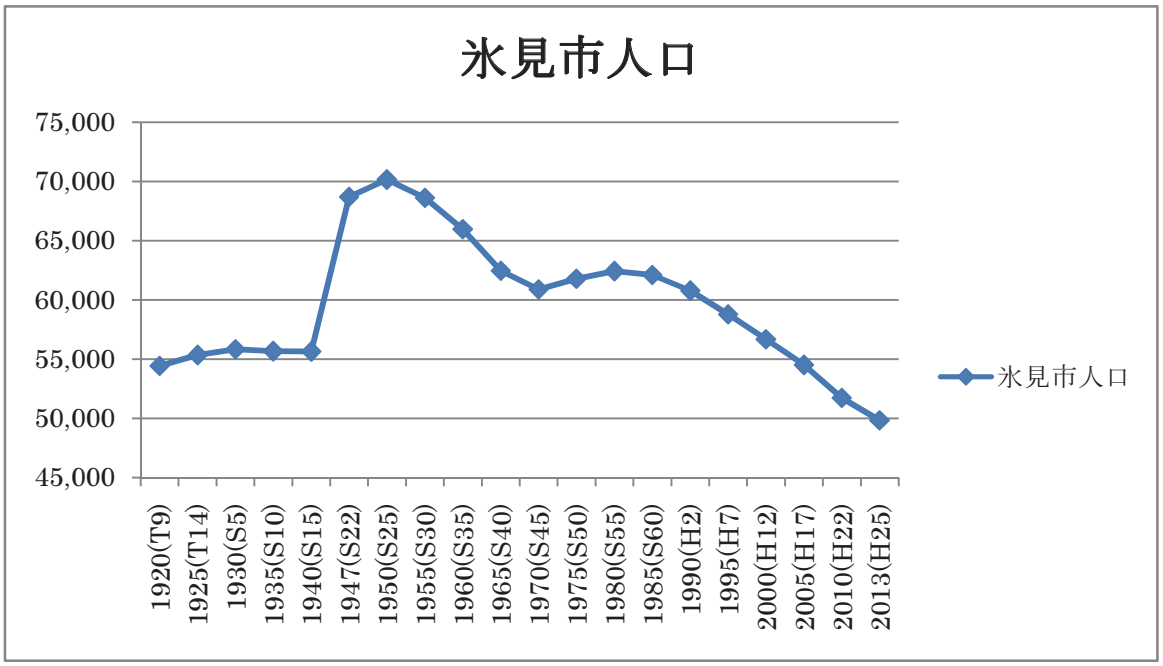


図 3.　氷見市人口の推移（ウェブサイト「人口・面積・人口密度」を参考に作成）

近年、日本のような先進国が抱える少子高齢化問題は氷見市にしても同じく深刻な問題である。図 4 から見ると、20 歳以下の人口の割合が低く、55 歳以上の人口の割合がきわめて高い。このつぼ型の人口ピラミッドが示唆するように、将来も氷見市の人口が減少する可能性が高い。

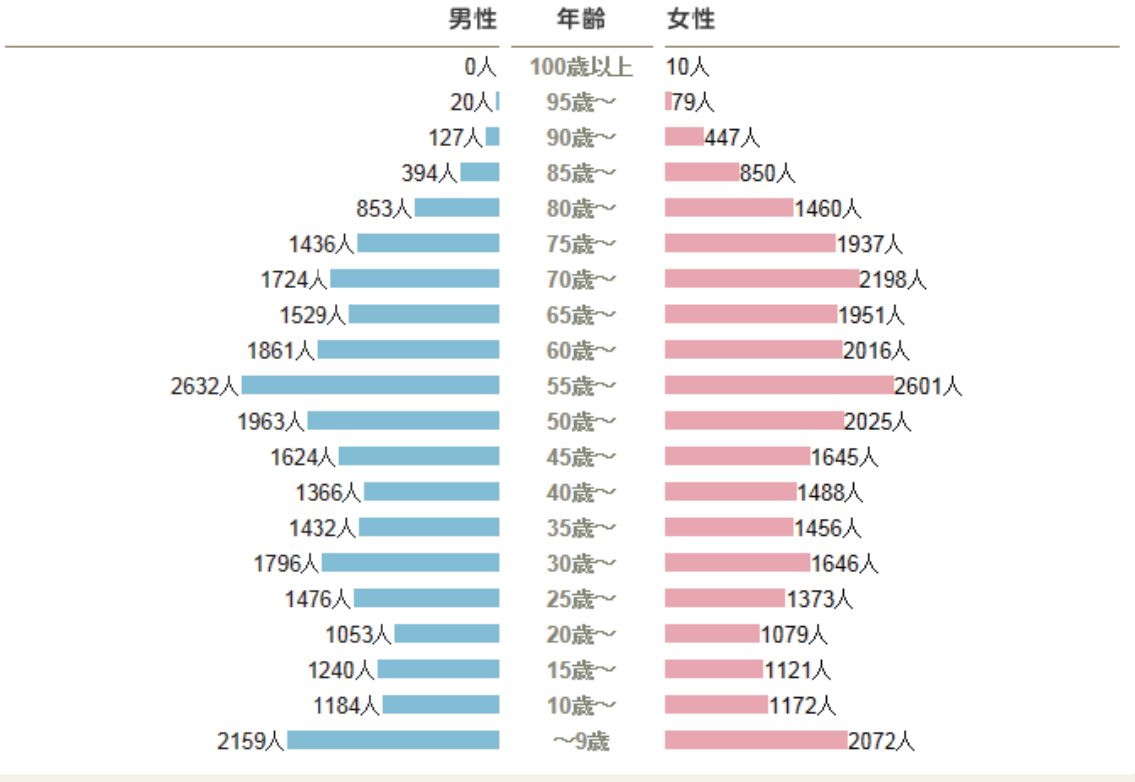


図 4. 氷見市の人口ピラミッド

（ウェブサイト「不動産投資」が平成 22 年の国勢調査をもとに作成したグラフ）

1-4. 産業

次に、氷見市の産業について見ていく。氷見市の平成 24 年度の統計によると、氷見市の産業従事者総数は 24,956 人、そのうち、第一次産業の従事者数は 1,216 人、第二次産業の従事者数は 9,166 人、第三次産業の従事者数は 14,417 人である [1)]。氷見市の産業別就業者数の割合を図 5 に示したが、これを見ると、第三次産業が約 6 割を占めていることが分かる。第三次産業において、氷見市が近年特に力を入れている活動に、藤子不二雄Ⓐ氏の作品である「忍者ハットリくん」を中軸に据えた様々な観光企画がある。また、氷見市はご当地グルメブームに乗って氷見市ならではの新たなご当地名物を開発するなど、観光面において多彩な活動を行っている。一方、第一次産業の従事者数内訳を示した図 6 を見ると、漁業が有名な氷見市ではあるが、実際には漁業よりも農業の従事者数が多いことが分かる。

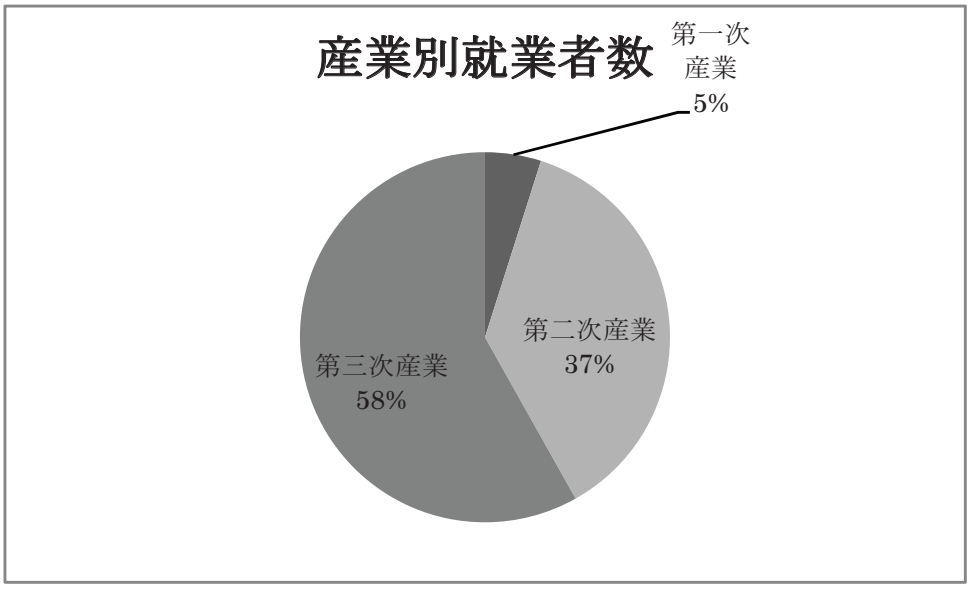


図 5.　氷見市の産業別従事者数（氷見市 HP「氷見市公開資料『4－3 統計資料（国勢調査）』氷見市の統計（平成 24 年度版）」を参照し作成）

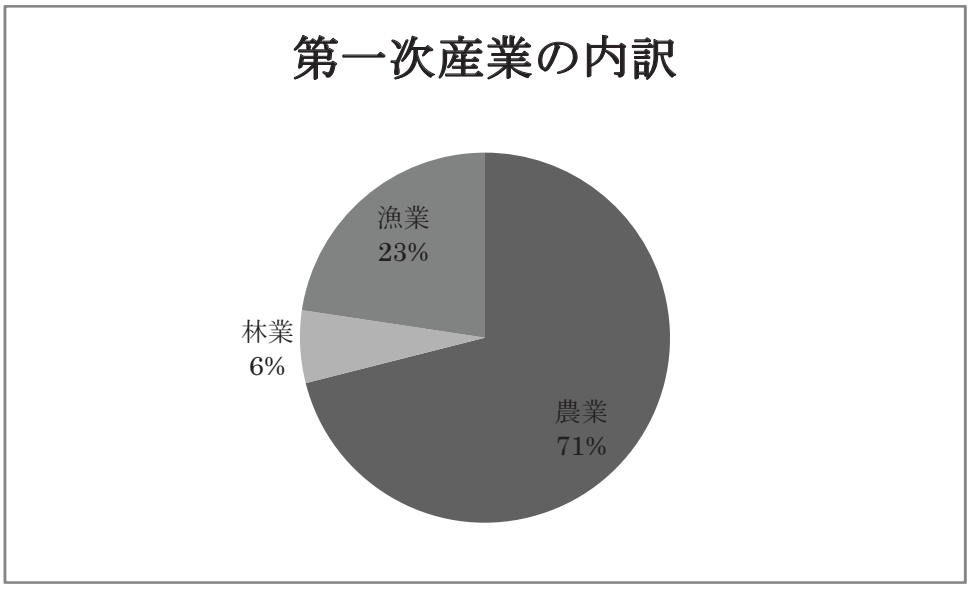


図 6.　氷見市の第一次産業の内訳（出典は図 5 に同じ）

漁業の概要

ここでは、富山湾と氷見沖の概要を述べていく。富山湾は、日本海側のほぼ中央に位置する湾で、大陸棚が狭く、沿岸から急激に深くなっているのが特徴であり、最深部は 1,200m 以深に達する（図 7）。氷見沖は、富山湾の最西部、能登半島付け根の東側の沖に位置する。

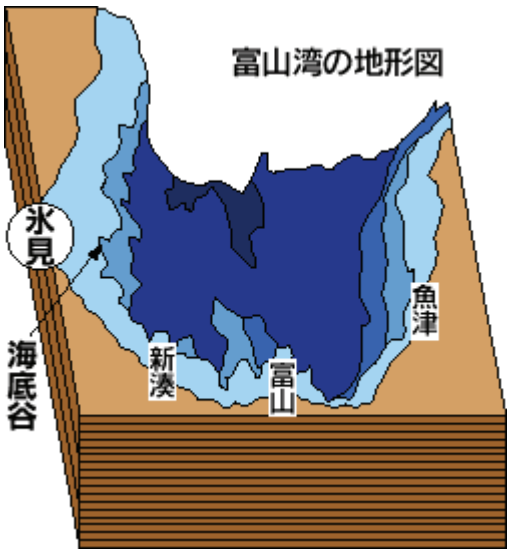


図 7.　富山湾の地形図（ウェブサイト「富山県氷見市観光情報サイト」より）

氷見沖は暖流である対馬海流が能登半島に沿って入り込み、また水深 300m 以深に年間を通じて 1℃～2℃で存在する日本海固有水（深層水）があるため、暖流系の魚も寒流系の魚も存在する（図 8）。また、能登半島が日本海に張り出していることによって、潮の流れが比較的遅くなるため、回遊魚を中心とする魚が入り込みやすい。

図 8.　富山湾周辺の海流図（出典は図 7.に同じ）

主な漁法は、大型定置網漁業、小型定置網漁業、八艘張網漁業、刺網漁業、である。経

営体数は平成 20 年（2008 年）時点で 97 で、大型定置網漁業が 7、小型定置網漁業が 19、八艘張網漁業が 1、刺網漁業が 39、その他漁業は 31 存在する（表 2）。

表 2.　主とする漁業種類別経営体数（氷見市 HP「水産統計」を参照）

	総数	敷網	刺網	大型定置網	小型定置網	地引網	船引網
昭和 63 年	250	4	75	9	24	4	22
平成 5 年	181	3	64	6	25	3	19
10 年	153	3	47	7	24	2	13
15 年	110	2	35	6	22	2	8
20 年	97	-	39	7	19	-	4

漁業就業者人数は、平成 20 年時点で 391 人で、昭和 63 年の 717 から比較すると年々減少している（表 3）。

表 3.　漁業就業人数（出典は表 2 に同じ）

総数（女性）	S.56 年	S.58 年	S.63 年	H.5 年	H.10 年	H.15 年	H.20 年
15~19 才	1 (0)	1 (0)	3 (0)	1 (0)	1 (0)	3 (0)	3 (0)
20~29 才	29 (0)	26 (0)	21 (0)	10 (0)	22 (0)	28 (0)	38 (0)
30~39 才	88 (4)	95 (3)	66 (2)	37 (1)	27 (1)	35 (0)	40 (0)
40~49 才	179 (10)	146 (3)	110 (3)	84 (2)	59 (2)	47 (2)	40 (4)
50~59 才	303 (6)	313 (3)	223 (7)	123 (6)	97 (6)	75 (3)	67 (4)
60 歳以上	304 (4)	298 (5)	295 (4)	323 (11)	313 (8)	241 (12)	206 (7)
総数	904(24)	879 (14)	718 (16)	578 (20)	519 (17)	429 (17)	391 (12)

1-5.　商店街の概要

氷見市商店街は、氷見市の中心に位置する商店街で、六つの商店街から成り立っている。商店街の中心には湊川が流れ、それを境目にして、北町商店街と南町商店街に分かれている。

北町商店街は、道の駅から JR 氷見駅に向かって加納商店街、中央町商店街、比美町商店街の三つの商店街からなる。南町商店街は、南中町商店街、本町商店街、御座町商店街の三つから構成されている。北町商店街は漁師だった人たちが流れて始めた商店の多い商店街で、南町商店街は元々商売をする目的で来た人たちが集まってできた商店街である。現

在、北町商店街は、中央町、比美町、丸の内に分かれているものの、かつては北六町と呼ばれ、六つの町（今町、新町、中町、浜町、湊町、本川町）だった。南町商店街も本町、南大町、伊勢大町、地蔵町に分かれているものの、かつては南十一町と呼ばれ、十一の町（南中町、南下町、南上町、御座町、仕切町、川原町、高砂町、地蔵町、上伊勢町、下伊勢町、中伊勢町）だった。氷見市の祇園祭では、日宮神社の氏子である北六町と日吉神社の氏子である（中伊勢町を除く）南十町が、旧暦の 6 月 13 日～15 日にかけて神輿の渡御に供奉し、北六町がたてもん、十町が曳山をそれぞれ曳き回していた。現在、祭礼には 13 日と 14 日に神輿と供に南十町の内五町が曳山を、また南十町と昭和 23 年（1948 年）より加わった中伊勢町を合わせた計十一町（南十一町）が、地元で「タイコンダイ」と呼ばれ親しまれる太鼓台を曳き回す。（詳細は趙による「7.　氷見祇園祭」を参照。）

氷見市は、『忍者ハットリくん』や『怪物くん』などの漫画家、藤子不二雄Ⓐ氏の出身であり、Ⓐ氏の作品を使って町おこしを行っている。北町商店街の一つである中央町商店街には、『笑ゥせぇるすまん』の主人公である喪黒福蔵のモニュメントが置かれている。図 9 に示した比美町商店街には、『忍者ハットリくん』の登場人物を中心にアニメアートが展示されている他、Ⓐ氏のオリジナルキャラクターである「氷見サカナ紳士録モニュメント」も 8 種 16 体置かれている。また、湊川には時限式で動く「忍者ハットリくんカラクリ時計」も設置されている。（詳細は西による「2.　比美町商店街の継続性と観光事業との関連」を参照。）

図 9.　氷見市商店街を中心にした地図

（ウェブサイト「Yahoo!マップ」を参照）

1-6.　年中行事

氷見市では、年間を通して様々な行事やイベントが行われている。下の表 4 は主な行事をまとめたものである。

表 4.　氷見市の行事とイベント

2 月上旬	起舟祭
4 月上旬	まるまげ祭り・ごんごん祭り
5 月上旬	唐島弁天祭
6 月上旬	えびす講
7 月中旬	祇園祭
8 月上旬	ひみまつり
11 月下旬	えびす講

氷見市の各地区では、漁業関係者が集まり、「起舟(きしゅう)祭」が毎年行われる。旧暦の正月に行われる行事で、海上の安全と大漁を祈願する。

「まるまげ祭り」とは、毎年 4 月 17 日に行われる氷見の伝統ある祭りである。かつて幸せな結婚を願った芸妓たちが、年に 1 度の休日に人妻を象徴する「丸まげ」を結い、市内の千手寺の観音様に願かけをしたのが由来と伝えられている。まるまげを結い、鮮やかな着物を身にまとって街の中を練り歩く祭りである。

毎年 4 月 17 日と 18 日には、朝日山上日寺で「ごんごん祭り」が行われる。江戸時代初期に起こった大日照りのための雨ごい行法が成就したことで、農民たちは狂喜乱舞し、上日寺の鐘を打ち鳴らして喜び祝ったのが由来とされている。以来、報恩と厄よけの法会とともに、力自慢の若者たちが長大な松の生木の丸太で、釣り鐘を連打する祭りとして市民に親しまれている。

毎年 5 月 3 日、氷見漁港の東約 300m の海上にある小島、唐島に祭られている弁天様に海上安全と大漁を祈願するために行われる「唐島弁天祭り」が行われる。氷見市の街中にある藤子不二雄Ⓐ氏の生家としても知られている光禅寺にて読経をあげた後、各町内の太鼓台や神輿が町中を巡行し、獅子舞競演後に唐島へ渡り、読経を行う。

毎年 6 月 10 日と 11 月 20 日には「魚取(なとり)祭」とも呼ばれる、「えびす講」が行われる。これも、大漁と海の安全を祈願して灘浦の藪田地区などいくつかの地域で執り行われる神事である。氷見浦から灘浦の海岸部には、「えびす神」を祀る魚取社やえびす社が点在する。元来は漁を生業として海に生きる漁民らに、大漁や海上の安全をもたらした守り神であったものが、後には漁家だけでなく商家や農家にも受け入れられ、「えびす大黒」と並称して

商いや交易、農作物の育成を見守る生業全体の守り神として都市や農山村へも浸透していったとされている。

祇園祭は、7 月の 13 日、14 日の 2 日間にわたって行われ、市街地中心部の「中の橋」をはさんで、南は日吉神社氏子十町、北は日宮神社氏子六町の大祭として、神輿と太鼓台が氏子区域を巡行する（詳細は趙による「7.　氷見祇園祭」を参照）。

氷見最大の夏のイベント、「ひみまつり」は青年会議所が実行委員となって運営しているイベントである。例年、パレードや園児による器楽演奏、小学校の児童による金管・鼓笛の演奏、獅子舞フェスティバルなどが行われ、屋台が立ち並び、花火が打ち上げられる。以前は 8 月に行われていたが、一昨年だけは開催時期が 10 月となり、この年には市制施行 60 周年を記念して、ディズニー・キャラクターが比美乃江公園前を行進した。また、去年は例年通りに 8 月に開催されている。

氷見獅子の概要

表 4 には記載されていないが、富山県は、北陸のなかでも獅子舞が盛んな県である。なかでも氷見市は、その継承に力を入れており、特に多くの地域に獅子舞が伝えられている。（詳細は、南谷による「8.　新保の秋祭りにおける獅子舞――今後への「継承」」、上野による「9.　一刎地区における獅子舞とその継承問題」を参照）。

獅子舞とひとくちに言っても、さまざまな種類があり、構成員や道具は地域によって違いがある。氷見獅子は、カヤ（胴幕）の中にカシラ（頭持ち）を含む 5 人が入る、「百足獅子」に属している。獅子には朱塗りの高鼻天狗が対峙し、棒を採ってさまざまなやり取りを行う。カヤの中には竹輪を入れず、獅子頭と天狗面は、市内どの地域でも朱塗りである。

囃子方は、太鼓と堅笛と摺鉦（すりがね）で構成されていることが多い。一般的に、太鼓は、松の木や御神灯（ごしんとう）と書かれた角行灯を飾った太鼓台に載せて曳いていく。

写真 1.　獅子に対峙する天狗

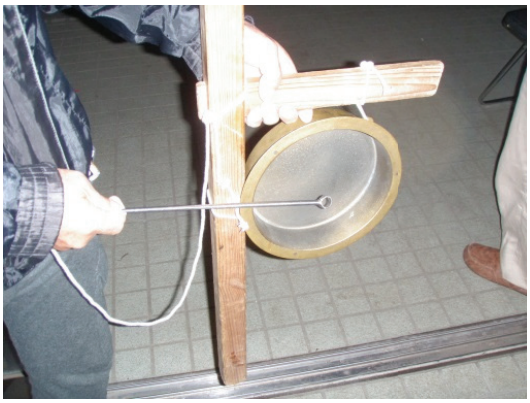


写真 2.　摺鉦

氷見市の地区ではたいてい、春秋の祭礼日の午後、村の産土（うぶすな）の宮に神職を迎え、祭典が営まれる。このとき、神社での神事と共に獅子舞が奉納される。その後、「村マワシ」もしくは「町マワシ」となり、獅子が地域内の民家を巡回することになる。祭りに際して、各家から出される祝儀のことを「ハナ」といい、ハナをもらった御礼に舞われる獅子舞は「ハナ獅子舞」という。特にその年、嫁や婿を迎えた家では、晩方に青年団に来てもらうようあらかじめ取り計らってもらい、「嫁バナ」と呼ばれる盛大な獅子舞が行われる。

一行は、通常「獅子舞宿」に泊まり、翌朝再び神社に向かって獅子舞をする。ここでの演目は地域によって差があるが、神社の境内で最後に舞われるのは、「獅子殺し」などの特別な演目である。ただし、地域によっては演目や手順が違うことも多く、上記のかぎりではないことにも留意しておきたい。

かつては、青年団が各地区の獅子舞を担当するのが普通であった。たいていの地区では、青年団には高校卒業と同時に入団し、近年は 30 歳前後で退団する。しかし現在、若年層の減少や地区外への転出のほか、地元に居住していても青年団と距離をおく人も増え、青年団を終えた後の壮年団や中高生を交えて獅子舞を出している地区も多い。そのため、近年では各地区ともに、特に青年団の退団年齢を上げる傾向にある。

写真 3.　小学生から大人までが参加する獅子舞

1-7.　一刎（ひとはね）の概要

1-7-1.　一刎の人口と地理

一刎は、富山県氷見市の北西部に位置する山間集落である。人口は平成 25 年 12 月の時点で、女性 119 人、男性 118 人からなる計 237 人、世帯数は 98 世帯である。氷見の中心市街地からは車で約 15 分かかり、直線距離は約 8km である。一刎は石川県との県境からも近いところに位置するため、一刎から中能登町の中心に行くのと、氷見市の中心市街地に行くのとでは、それほど距離が変わらない。実際、かつては石川県側との交流の方が盛んだったようだ。沿岸からは直線距離で約 7km 離れており、標高は約 261m である。面積は、3,819,707 ㎡である。一刎の気温は氷見の市街地に比べ、2、3℃ほど低い。また、一刎には大きな川がないため、農業には溜池の水が使用されている。

図 10.　氷見市における一刎の位置（ウェブサイト「グーグルマップ」を参照）

一刎地区内の地形

一刎は、「上出（かみで）」「中田浦（なかたうら）」「浦出（うらで）」「奥出（おくで）」「谷内出（やちで）」「番場出（ばんばで）」「宮格内（みやかくない）」の 7 つの地区に分かれている。以下の図 11 は一刎地区内の地図である。

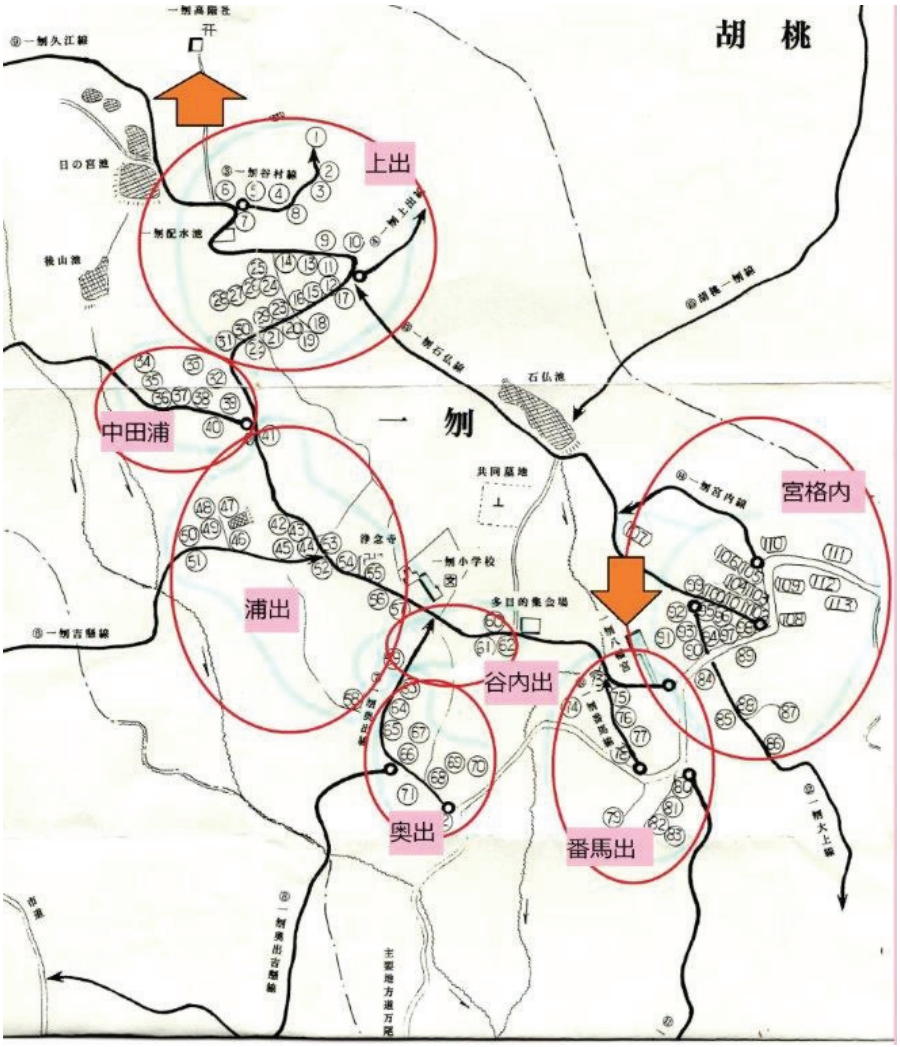


図 11．　一刎地区内の地図

（『一刎八幡宮史』を参考に筆者が加工したもの）

1-7-2.　一刎の歴史

一刎は縄文時代後期ごろにはすでに人が暮らしていた地域であるとされており、上出地区にある前田遺跡からはその時代に用いられていた土器が出土している。一刎にはいくつかの伝説が伝わっているが、その一つに平安時代末期の源氏の武将である木曽義仲に関するものがある。それは木曽義仲が一刎八幡宮に祈願したというもので、宮格内を通る芝峠

道は昔から義仲道と俗称されている。そういった伝説も影響して、諸説ある一刎の地名の由来の中には、木曽義仲の部下が白羽の矢を放って矢試しをしたことから、『一羽』と呼ばれるようになり、現在の『一刎』になったという説がある。しかし、文献的証拠があるわけでないため、これらの逸話は伝説の域を出ることはない。

一刎は富山県と石川県の県境に位置しており、一刎と氷見市街地を結ぶ市道が整備されるまでは、石川県能登地方の市街地へ抜ける方が交通の便がよかったため、文化的にも石川県からの影響を強く受けている。氷見市街地と一刎とを結ぶ市道が整備されたのは一刎が氷見市に編入された 1952 年以降であり、現在でも道路の改良工事が続けられている。

この一刎には、かつて一刎小学校という小学校があった。一刎小学校は 1877 年の 11 月に浄念寺に開校された一刎育立小学校がもととなっており、1908 年に初めて校舎が完成し、その後 1958 年には体育館、1965 年には運動場が造られるなどの増改築を重ね現在の姿となった。しかし、2006 年に一刎小学校を含む氷見市内の 6 校の小学校が比美乃江小学校に統廃合したため、一刎小学校は廃校となった。その校舎は現在でも維持されており、運動場をパークゴルフ場として利用したり、校舎の横に誰でも利用できる公衆トイレを設置したりすることで残された小学校の校舎を活用している。中学校については、1947 年から 1974 年にかけては一刎のふもとの味川という地区に余川谷中学校の分校があったため、一刎の中学生たちはそこに通っていたが、余川谷中学校が廃校となった 1974 年からは一刎から 8 ㎞ほど離れた氷見市立北部中学校に通学している。そのほかにも一刎にはかつて一刎保育園という保育施設があったが、2001 年に碁石保育園に統合されたため、現在一刎には教育施設や託児施設は存在しない。

近年一刎では、一刎小学校跡地をはじめとした花壇づくりに力を入れている。この活動は廃校となった一刎小学校の活動を引き継いだもので、一刎小学校の花壇は 1991 年と 1993 年に「花のまちづくりコンクール」において農林水産大臣賞を受賞している。2007 年には一刎内水芭蕉園が開園し、2008 年からは「水芭蕉ウォーキング in 一刎」というイベントが開催されるようになった。このイベントは 2012 年には一刎内外から 250 人もの人が集まるイベントとなっており、一刎の主要な村おこし事業の一つとなっている。

1-7-3.　一刎の産業

一刎では、主に農業が営まれている。しかし、地形の関係で規模は非常に小さく、昔は出稼ぎが盛んであった。現在では、若い時に氷見の市街地や高岡で働き、退職後に各農家で消費する分だけをつくるために農業稲作を営んだり、個人の趣味の範囲で畑作をしたりしている場合が多い。また、氷見市では JA が主体となって農村地帯でハトムギの栽培を行い商品化しているが、一刎もその農村地帯の一つである。JA は農村地帯の放置された田んぼや畑を借り、そこでハトムギを栽培している。

碁石地区全体の販売農家数と自給的農家数は表 5 の通りである。ここからわかる通り、1985 年から自給的農家が増加し、販売農家数が半分近くまで減少している。

表 5.　碁石地区の販売農家数と自給的農家数

	販売農家数	自給的農家数	総農家数
1985 年	303 戸	28 戸	331 戸
1995 年	188 戸	74 戸	262 戸

注

1）これらのほかに「分類不能な産業」という項目も存在し、就業者数は 157 人となっているが、割合として算出した場合あまりにも小さな値となるため、図 5 の円グラフでは省略している。

参考文献

氷見市立博物館編著、1996 年、『氷見の祭りと年中行事』、氷見市立博物館

北陸農政局富山統計情報事務所高岡出張所、平成 6 年 3 月、『海とみどりの自在都市　氷見――統計から見た氷見市の農林素産業』、富山農林統計協会

氷見市市立博物館、出版年不明、『氷見のあゆみ』、氷見市立博物館

参考にしたウェブサイト

「いこまいけ高岡」

（http://takaoka.zening.info/map/Toyama_Prefecture/Toyama_blank_map.htm ; 2014 年 1 月 22 日閲覧）

（http://takaoka.zening.info/map/Toyama_Prefecture/Himi_city/Blank_map.htm ; 2014 年 1 月 22 日閲覧）

「人口・面積・人口密度」

（http://demography.blog.fc2.com/blog-entry-4166.html ; 2014 年 1 月 10 日閲覧）

「富山県氷見市観光情報サイト　きときとひみどっとこむ」

（http://www.kitokitohimi.com/ ; 2013 年 1 月 7 日閲覧）

（http://www.kitokitohimi.com/fish_guide/sakana.html ; 2014 年 1 月 23 日閲覧）

「氷見市 HP」

（http://www.city.himi.toyama.jp/hp/menu000000400/hpg000000383.htm;2014 年 1 月 7 日閲覧）

「氷見市 HP 公開資料『4－1　統計資料（自然）』氷見市の統計（平成 24 年度版）」

（http://www.city.himi.toyama.jp/ct/other000008600/0120-130314-004.pdf；2014 年 1 月 7 日閲覧）
「氷見市 HP 公開資料『4－3　統計資料（国勢調査）』氷見市の統計（平成 24 年度版）」
（http://www.city.himi.toyama.jp/ct/other000008600/0120-130314-006.pdf；2014 年 1 月 7 日閲覧）
「氷見市 HP 水産統計」
（http://www.city.himi.toyama.jp/hp/page000003400/hpg000003383.htm；2014 年 2 月 3 日閲覧）
「不動産投資」
（http://toushi.homes.co.jp/owner/toyama/city160205/machi.html；2014 年 1 月 10 日閲覧）

2.　比美町商店街の継続性と観光事業との関連

西　里紗

はじめに

私は、氷見市にある商店街の一つである比美町商店街の観光事業について、地元住民の意識調査を行った。比美町商店街は、『忍者ハットリくん』や『怪物くん』の作者である藤子不二雄Ⓐ氏の生家、光禅寺がある商店街であり、現在は藤子Ⓐ氏のオリジナル作品であるモニュメントやハットリくんを使った観光事業を行っている。「シャッター通り」と形容されるように、空洞化や後継者不足などの問題が全国的に取りざたされている近年の商店街だが、氷見市にある 6 つの商店街（加納町商店街、中央町商店街、比美町商店街、南中町商店街、本町商店街、御座町商店街）から構成されている氷見市商店街も例外ではない。その一つ、比美町商店街の場合も平日ですら歩く人をほとんど見かけないという状態である。

私が今回、調査地を比美町商店街に選んだ理由は、2 つある。1 つ目は、私自身が町おこしに興味があり、比美町商店街が行っている観光事業について詳しく知りたいと思ったからである（ちなみに、本稿での「町おこし」とは、商店街の観光事業を中心としたものである）。2 つ目は、比美町商店街を歩く住民に話を聞いていくにつれて、商店街自体に活気がないことがわかったからである。商店街がシャッター通りに変容すれば、現在行っている比美町商店街の観光事業の維持も難しくなる。本稿では、比美町商店街の現状とその観光事業の継続性を、主に地元住民の意識面から考察していきたいと思う。

調査方法

本書で行う記述は、2013 年 4 月から 9 月の 6 か月にわたって、主に平日の日中に行った聞き取り調査に基づいている。聞き取り調査は、比美町商店街と道の駅である「ひみ番屋街」（以下では「番屋街」と記す）を中心に、のべ 16 日間行った。調査対象は、観光客、氷見の地元住民、比美町商店街の商店主であり、年齢層でいうと 10 代から 90 代まで、男女比は 4 対 6 というところである。また、商工会議所や市役所、氷見市観光協会でも話を聞いた。

1.　比美町商店街の概要

前述にもあるが、比美町商店街は、氷見市商店街と呼ばれる 6 つの商店街の中の一つで、商店街にはアーケードが設置されている。地図 1 に示した枠の中が、比美町商店街であり、比美町商店街振興組合という組合を持っている。組合の役職には、理事長が 1 人と副理事長が 2 人、専務理事が 1 人おり、理事も 10～14 名程度いる。組合員は、商店街に商店を持っているかどうかに関わらず、比美町商店街のアーケードの中に住んでいる人すべてだ。店舗数は、全部で 70 店だが、現在も経営しているのは 40 店舗である。この 40 店舗の内訳は、魚や野菜の食品を扱った店や衣服を扱っている店、飲食店、土産物店を中心としている。他には、自転車店や床屋、接骨院などがある。これらの店舗のほとんどが住宅も兼ね備えているため、テナントとして貸し出すことはできない。

地図 1.　比美町商店街地図地図

（ウェブサイト「アクセスマップ - 氷見市比美町商店街」より）

2.　比美町商店街の観光事業

比美町商店街では、観光事業として、商店街全体を藤子不二雄Ⓐ氏の作品を活用した「まんがロード」として整備し、観光客の商店街の流入、回遊性の向上を図っている。商店街の中には、写真 1、2 に示したように『忍者ハットリくん』のキャラクターを中心としたモニュメントが展示されている。また、Ⓐ氏のオリジナルキャラクターのモニュメントである「氷見サカナ紳士録モニュメント」（写真 3）が 8 種 16 体設置され、閉店したお店も含めた 3 店舗のシャッターにはラッピングアート（写真 4）と呼ばれるシャッターアートが施されている。また、潮風ギャラリーと呼ばれる漫画の複製原画が展示されているギャラリー（写真 5）もある。写真 3 のモニュメントは、商店街の通りを人が歩くと話すという細工があるが、大半は壊れていて音が鳴らない。また、商店街のすぐそばには、Ⓐ氏の生家である光禅寺もあり、Ⓐ氏の漫画キャラクターたちの石像が置かれている（写真 6）

この観光事業は、1992（平成 4）年に市が氷見市商店街の中心を流れる湊川にハットリくんのカラクリ時計を設置したことがきっかけで、比美町商店街内に紳士服店を構える林達也さん（50 代）の主導で行われるようになった。林さんは現在、氷見市商店街連盟の会長であり、比美町商店街振興組合の特別理事も務めている。

写真 1.　比美町商店街（筆者撮影）

写真 2.　『忍者ハットリくん』登場キャラクターのモニュメント（筆者撮影）

写真 3.　氷見サカナ紳士録モニュメント

（ウェブサイト「氷見市比美町商店街サイト　モニュメント」より）

写真 4.　ハットリくんのシャッターアート

（ウェブサイト「二子玉川 de ぼちぼち絵日記　氷見旅行 1」より）

写真 5.　潮風ギャラリー
（ウェブサイト「またたび　富山ガイド　氷見市潮風ギャラリー」より）

写真 6.　光禅寺内の石像（筆者撮影）

2-1.　林達也さんの語り

商店街の町おこしをはじめたきっかけと今後の活動について、林達也さんに聞いた。町おこしを始めたきっかけについて、林さんは「若いころから町おこしが自分のテーマだった。しかし、時間やそれに伴う出費が多いため、現在は趣味と氷見市を藤子Ⓐ氏の町にするために続けている」と語った。今後の町おこしにおける林さんの考えとしては、氷見市に先生の作品を使ったインパクトのあるものを設置し、全国に PR していくつもりらしい。また、比美町商店街以外の商店街にも先生の作品を使った観光化を進めて、氷見市商店街自体を観光地化し、観光ルートを整備していくつもりだとも語った。

以上から、比美町商店街の藤子Ⓐ氏の作品を使った観光事業は、林さんの主導で行われていることがわかった。今後、林さんの事業を受け継ぐ人が商店主の中にいるかどうかについても聞いてみたが、「私のように町おこしに特殊な思いがないとやらないと思う。比美町商店街内だけではなく、広域的なボランティア要素が強いため、商店主の中でやりたい

人はいないだろう」ということだった。

2-2.　藤子Ⓐワールド

林さんによるプロジェクトのひとつに、「藤子Ⓐワールド推進会議」がある。藤子Ⓐワールドは、2011（平成 23）年の 3 月 9 日に、藤子Ⓐ氏が喜寿をむかえたことをきっかけに発足した、イベントの企画及び実行組織である。藤子Ⓐワールドは、「藤子スタジオ」とは別の組織であり、藤子Ⓐ氏の作品を使用する際は、藤子スタジオに要請を出して行っている。メンバーは、林さんの他に商工会議所の人や氷見市役所の人など、氷見市の人が中心である。しかし、他県に住む藤子Ⓐ氏のファンもおり、誰でも藤子Ⓐワールドのメンバーになることができる。林さんは、「商店街だけでⒶ先生の町おこしを行おうと思うと垣根がある。行政やいろいろな人をまきこみたいという思いから立ち上げた」と語った。商工会議所の中尾さんによると、藤子Ⓐワールドの指針としては、まち全体としての「まんがロード」の拡大だそうだ。氷見駅や南町商店街（南中町商店街、本町商店街、御座町商店街）に藤子Ⓐ氏の作品を使った石版やモニュメントを設置して氷見市を藤子Ⓐ氏の町にしていくと語った。

2-3.　比美町商店街のイベント

比美町商店街では、年に 2 回、ハットリくんの誕生日である 5 月 5 日と秋頃に商店街主催のイベントが行われる。秋頃に行われるイベントは「潮風フェスタ」と呼ばれ、2013 年は 10 月 5 日に行われた。

5 月 5 日に行われるハットリ君の誕生日を祝うイベントは、10 時から 15 時まで氷見市商店街で行われ、2013 年で 6 回目を迎えた。イベントでは、「藤子Ⓐワールド祭り」と呼ばれる様々な催しや、商店街の各商店が百円の物を売る「百縁笑店街」という企画が行われた。「百縁笑店街」では、6 つの商店街からなる氷見市商店街のうち、比美町商店街を含む 5 つの商店街、計 39 店が参加した。このイベントは、商店街だけでなく、商工会議所や市役所、道の駅である番屋街、それに NPO 法人「ヒミング」の共催で行われた。商工会議所の職員の話によると、このイベントに来るお客さんは、市内の人よりも市外から来る人の方が多いそうだ。

もう一つの「潮風フェスタ」は、毎年秋頃に中央町商店街と比美町商店街の合同主催で行われる氷見市商店街最大のイベントである。2013 年は 10 月 5 日に行われた。時間は、13 時からで、フェスタの時間構成は 3 部構成だった。第 1 部は、藤子Ⓐ氏の生家である光禅寺で行われた。『忍者ハットリくん』の形を作る粘土作りや、『プロゴルファー猿』を目指すゴルフゲームである「旗づつみチャレンジ」などの体験コーナーが設けられた。第 2 部の「氷見うまいもん屋台」は、潮風ギャラリー横の特設会場で 16 時から始まり、ステー

ジでバンド演奏やダンスが繰り広げられた。つづいて、第3部の「トキワ荘14号室サミット」が、22時から、再び光禅寺で開催された（トキワ荘とは、藤子Ⓐ氏ら複数の有名漫画家が暮らした東京のアパートのことである）。

3. 地元住民の人々の声

商店街の観光事業の継続のためには、商店街そのものの維持が必要となるが、現在商店街を利用している地元住民は、商店街の観光事業をどのように捉えているのだろうか。また、商店街を利用している客は商店街についてどのように感じているのであろうか。私は実習や合宿の期間を利用して、商店街を歩きまわっていたが、平日に商店街を歩く人は少なかった。また、歩いている人も高齢者か下校途中の高校生がほとんどだった。土日は観光客がまばらに歩いている程度で、地元客らしき人はほとんど見かけなかった。そのため、調査対象は、高校生と60代以上の高齢者が中心となった。今回の調査で私が実際に話が聞けたのは、10代および40～90代の計30名である。本節では、商店街やスーパーマーケットで地元住民を対象に行った聞き取り調査の結果から、人びとの商店街の観光事業および商店街に対する考えをまとめる。

3-1. 商店街の観光事業について

商店街の観光化を進めることに対しての人びとの意見は、全体的に肯定的なものであった。例えば、50代女性の「モニュメントができて観光客は増えたと思う」という意見や、40代夫婦の「藤子Ⓐ氏の作品は氷見のメインになる」という意見があった。他にも、80代女性は「カラクリ時計は子供が喜ぶ」と話し、70代女性も「モニュメントは観光客の為によいと思う」と話した。イベントについても80代女性は「商店街はイベントなど頑張っていると思う」と語った。一方で、厳しい意見もあった。70代女性は「モニュメントは一度見れば十分」と話し、60代男性は「イベントをやっても来るのはその時だけで、客の流れが続かない」と話した。このことから、地元住民は、観光化自体は歓迎しているものの、集客による経済的な利益がないことから、観光化に対して物足りなさを感じていることがわかった。

3-2. 商店街について

他方で、商店街の存在意義については高齢者と若い世代で意見が分かれた。ある10代の女性は、「商店街は老人や高齢者にとっては近い存在だと思うから、高齢者のために必要」と話した。また別の10代の男性は、「商店街は人間関係がある。それに対して、スーパー（マーケット）はコミュニケーションがない」と話した。ただし、商店街には若者向けの

店があるわけではないので、彼ら自身は積極的に商店街を利用するわけではない。彼らの話しぶりからも、いわゆる「外野の意見」を述べている、という印象が強かった。ちなみに、彼らは商店街で行われるイベントにも興味がないのだそうだ。

それでは、当の高齢者たちは商店街のことをどう考えているのだろうか。今回の調査では、商店街を歩いていた方に加えて、商店街に隣接する「ハッピータウン」というスーパーマーケット（以下、「スーパー」と略す）で買い物をしていた方々（主に中年から高齢者にかけて）にも話を聞いた。そこからわかったことは、高齢者の多くが、スーパーの方が「買い物がしやすい」と考えていたことである。

その理由はいくつかあるが、まず挙げられるのは、スーパーの立地条件が商店街に比べるとずっと良いことである。商店街は、バス停からも約 2 年半前に移転した市民病院からも、ハッピータウンと比べると遠い。反面、スーパーのようにひとつの所で多種多様な商品が買えることも、高齢者にとっては特に便利なことである。ある 80 代の女性は、「膝が悪くて出歩けない。買い物ができない」と語った。そうした不調をかかえる人が商店街で買い物をしようと思えば、相当な距離を歩かなければならないが、スーパーであれば負担はずっと少なくて済む。さらに、ハッピータウンの従業員によると、同スーパーでは客層に合わせて品ぞろえを中高年向けにしているのだというが、こうした柔軟な対応も、一つの店舗ならではのものだろう。結果として、「大型スーパーで何でもそろう」ため、あえて「商店街で買うものがない」（70 代女性）のである。

ところで、調査をしていて意外だったのは、（先に 10 代の若者が話したように）スーパーでは必ずしもお客同士のコミュニケーションが欠如しているわけではない、ということである。スーパーにはベンチが多いが、ここで高齢者の人びとはおしゃべりをしながら過ごすことも多いようだ。また、ベンチに座っていた 87 歳の女性は、「店内の椅子で、みんなでバスを待ってしゃべるのが楽しい。スーパーで友達が出来た」と話した。このことから、スーパーがただの買い物の場だけでなく、高齢者が集まって休憩のとれる憩いの空間にもなっていることがわかった。

スーパーを訪れていた人のなかにも、一部（20 人中 7 人）、商店街の店舗を普段から利用すると話した人がいた。かれらの多くは、肉や魚などの専門店に行くとのことだった。ただし、総合的にみてスーパーの優位は間違いない。ある 40 代の主婦が語っていたように、「商店街は、地元の人が利用するなら必要（だが、十分に需要にこたえていない）。観光客目的ならもっと何かする必要がある。今の状態は中途半端」と言えそうである。

4.　比美町商店街の商店主の意見

地元の人の意見から、氷見市商店街全体の不振がみえてきたが、比美町商店街の商店主たちは商店街の現状や観光事業に対してどのような意見を持っているのだろうか。また、観光化を進めたことで、実際に観光客の集客に繋がったのだろうか。この節では、以上のことを商店主の意見を肯定的、否定的に分けて、改善点も探っていく。また、道の駅の移設によって、商店街の人通りに影響が出たのかどうかも聞いた。氷見市の現在の道の駅である番屋街は、以前は「海鮮館」という名前だった。海鮮館は、2012 年の 9 月まで商店街に近い所で営業をしていた。番屋街については、後述する。

4-1.　商店主について

比美町商店街振興組合で、理事長を務める小川隆さん（55）によると、2013 年 5 月 14 日の時点で、比美町商店街にある 70 店舗のうち 40 店舗が経営しているそうだ。うち、今回の調査で話を聞いたのは、36 店舗である。調査内容は、年齢、創業、後継者の有無、観光化について等である。年齢層は、20 代～80 代まで幅広かったが、ほとんどが 40 代以降の店主で、その大半は、自分の代で店は閉めると答えた。また、後継者がいると答えたところは、自分が後継者という場合も含めて 14 店舗だった。

4-2.　商店街における地元住人の人通りについて

商店街の地元住人の人通りについて、商店主は全員、減少したと答えた。80 代女性は、「話にならないくらいに少ない。昔は商店街の通りは一等地で栄えていた。今、商店街の通りに子供はいない。年寄りばっかり」と話す。60 代女性も「30 年前と比べると交通量も人通りも減った」と語った。しかし、モニュメント設置などの観光化で、土日など観光客の数は増えたようだ。私も調査中、何度も商店街を回ったが、平日はちらほらと地元客が行きかうだけで、土日は地元客らしき人をほとんど見かけなかった。一方で、土日はモニュメントを写真に撮っている観光客を多く見かけた。

4-3.　商店主の意見

町おこしについては肯定的な意見を持つ人もいたが、大半が否定的な意見を持っているようであった。また、林さんのように自ら町おこしを主導するだけの意気込みをもった人はいないように見受けられた。肯定的な意見として、50 代女性は「時代の流れを受けて、波を逆手にとるような町おこしが必要。氷見はまだまだやれる。林さんを主導にしてついて行く人がもっと必要」と話した。また、商店街の観光化や町おこしについて、「にぎやかになっていい」という意見や「観光客にとってモニュメントは良いと思う。町おこしはし

ても良いと思う」などの意見がでたが、積極的にイベントなどに参加しているかと聞いてみると、頼まれて参加しているという声が多かった。

否定的な意見として、40 代男性は、観光化について「モニュメントはオリジナルキャラクターだから認知度が低い。観光客は一定数来るけど、町にお金を落とさない」と語った。50 代男性も「町おこしは今のままでは無理だと思う。イベントももっと大々的にやるべき。商店街のイベントを観光客は知らないし、知っても来るのは 1 度きり」と話した。また、70 代の女性は、「氷見には目立つものがない。氷見で土産を買っていこうという客はあまりいない」と語る。このことから、比美町商店街の観光化は、商店街にお金を落としておらず、モニュメントの効果はあまりないことがわかる。年に 2 回のイベント時に商工会議所と協力して行っている百縁商店街に対しても「年々出すものがなくなっているので、今後は続かないと思う」という意見もあった。

4-4. 改善点

観光化に対しては消極的な意見の方が多かったが、改善点をあげる商店主も少なくなかった。改善点は、大きく 2 つにわけられる。一つ目は、商店街自体の問題である。比美町商店街は、観光客が来る日曜日を定休日にする店が多い。飲食店を営む 50 代女性は、「日曜日に来た観光客に、なぜ他の店は閉まっているのか聞かれるが、うまく答えることができなくていつもごまかす」と話し、50 代男性も、「ぽつぽつと店が開いていても入ろうという気にならない。購買意欲がそそられない」と語った。このことから、観光客の集客につながっていない原因として、日曜日を定休日にする店が多いことがあげられる。また、観光客向けの商店街の店が整っていないことも原因である。比美町商店街だけをとっても、土産物を扱っている店は（店内の一角に藤子Ⓐ氏の土産物を置いてある店も含み）6 店舗しかない。80 代女性の「食べながら歩ける店があったらいいのに」という意見もあったが、食べ歩ける商品を扱っている店もほとんどない。このことから、商店街にある商店自身が観光化に対応できていないことがわかる。

二つ目は、氷見市全体における観光施設の問題である。商店主たちに、集客のためにはどうしたらいいかと聞いたところ、50 代男性は「藤子Ⓐ氏の記念館を作るべき。また来たいと思わせるように子供がお金をかけずに遊べるところを作るべき」と話した。50 代女性も「大きい 1 つの穴場が必要。ハットリくんの忍者寺とかを作って、2〜3 時間楽しめる施設が必要」と話した。また、80 代女性は、「観光場所があちこちに点在している。簡単にぐるっと一回りできたらいい」と語った。氷見の中心となる施設が必要であることがわかった。他にも、60 代女性と 70 代男性は、「違うことをしないと商店はやっていけない」と話し、小売店の個性が求められるということがわかった。

4-5. 道の駅の移設にともなう人通りの減少

ところで話を聞いていくうちに、多くの商店主が道の駅の移設によって観光客の人通りも少なくなったと考えていることがわかった。氷見市が観光の中心として重視する道の駅だが、以前は「海鮮館」と呼ばれる海沿いの施設が、商店街からほど近いところに位置していた。それが 2012 年 9 月に「ひみ番屋街」として移設したのである。規模は大きくなったが、商店街から離れた位置にある。地図 2 からわかるように、地図の手前、比美町商店街により近い位置にあるのが海鮮館である。

道の駅の移設の評判は商店主によると、あまりよくない。例えば、現在、比美町商店街振興組合の理事長を務める小川さんは、「番屋街と商店街はしっくりきていない。番屋街は郊外にあり、なぜ人を郊外にやるのか理解できない」と話す。私はこの件に関して多くの商店主に話を聞いたが、ごく一部を除いて、ほとんど全員が、番屋街ができてから観光客の人通りは減ったと答えた。土産物店の 50 代男性は、「番屋街に移って、観光客は減った。去年、海鮮館があるときは、地図を持ってまわっている観光客をよく見た。道も聞かれたし、飲食店について聞かれたりもしたが、今は全然ない。売上にも影響あるし、番屋街を作ったのは痛い。どうせなら海鮮館を増築してほしかった」と話す。飲食店を営む 40 代男性も「海鮮館があった時は、職員の紹介で店に頻繁に電話がかかってきたが、今はない。」と話した。また、40 代女性は、「番屋街ができてから車通りが増えたと思う。番屋街から商店街まで歩く距離ではない」と話す。30 代女性も「海鮮館があった時は、海鮮館から歩くツアーがあったが、今はない」と話し、番屋街と商店街に距離があり、人通りにも影響を与えていることがわかった。

地図 2.　比美町商店街から海鮮館、番屋街までの地図

（ウェブサイト「Yahoo!地図」参照）

4-6.　氷見商工会議所

商工会議所は、商店街の事務局的な役割を担っている。商店街との連携した活動では、藤子Ⓐワールドの他に「まちゼミ」と呼ばれる街ゼミナールの開催と商店街で年に 2 回あるイベント時に百縁笑店街を行っているそうだ。まちゼミでは、氷見市の商店街の商店主が講師となって、ケーキ屋さんでのケーキ作りや電気屋さんでの修理相談会などのゼミナールを市の事業所や商店で行っている。

そこで、職員の中尾さんにも海鮮館から番屋街に移ってからの人通りについて聞いた。中尾さんが受けた印象としても、道の駅が海鮮館から番屋街に移って、商店街の「まんがロード」を街めぐりする観光客の数が減少したそうだ。

5. 観光客の意見

商店主の意見を踏まえて、観光客の商店街での消費がないことを確かめるために比美町商店街に来ていた観光客に話を聞いた。また、商店街に対する印象や町おこしについての意見も聞いた。番屋街に来ていた観光客にも話を聞いて、前節までで紹介してきた商店街のモニュメントなどが知られているのかについて調査した。

商店街を歩いていた 30 代～60 代の観光客 12 組に話を聞いた。土産物の購入は、大半の人が番屋街で買う、もしくは買ったと答えた。33 歳男性は「商店街では何も買わない」と話し、30 代男性も「番屋街にはお土産がなんでもそろっている」と話した。このことから、観光客の商店街での消費がないことがわかった。また、商店街で物を買わない理由として、商店街の土産物の品ぞろえの悪さやわかりにくさ、店の入りにくさがあげられた。商店街については、「何もない」「シャッター通り」という意見が多かった。また、商店街の観光化に対しては、50 代女性の「昭和的で懐かしい感じがした」との意見や「楽しい」という肯定的な意見もあったが、商店街を通って不満を感じるという意見もあった。30 代男性は、「路面店があればいいのに。店の中に入らないと商品がわからない」と話し、60 代男性は「モニュメントを初めて見に来たけど、オモチャみたい。よほどのものがないと人は来ないのではないか」と語った。

次に、番屋街に来ていた 20～60 代の観光客、15 組に話を聞いた。商店街のモニュメントのことを聞いたが、6 組の人が「知らない」と答えた。また、商店街の存在自体を知らない人が多く、番屋街から商店街までの行き方がわからないと話す人もいた。40 代女性 2 人は、「看板も道案内もないし、番屋街からどうやって商店街に行けばいいのかわからない。アピールも足りない」と語った。このことから、比美町商店街の町おこしの認知度が低いことがわかった。また、番屋街の観光案内版をみたところ、比美町商店街について書かれていなかった。番屋街から商店街までの道順も示されていないため、番屋街に来た観光客が、比美町商店街が行っている観光事業について知る手段がないことがわかった。

ところで、商店街を歩いていた観光客と番屋街に来ていた観光客を比較して、私が気づいたことがある。それは、商店街に来ていた観光客の方が、番屋街に来ていた観光客よりも出身県が遠いということである。商店街に来ていた観光客は、全組が県外からの観光客で、東京や大阪などから来ていた。商店街の観光化をどうやって知ったのか尋ねると、『るるぶ』などの観光雑誌やネットを見て来たパターンと偶然知って立ち寄ったパターンに分かれた。一方で、番屋街に来ていた観光客は、富山県内や北陸を含めた近隣の県から車で来ている人がほとんどだった。番屋街に来た理由を聞くと、最終目的や何かの帰りで番屋街に寄った人が多かった。このことから、近隣の県出身では、観光雑誌を買うことがないため、比美町商店街が観光事業として進めているモニュメントなどのことを知らないので

はないかと思った。

6. 行政の意見

この節では、氷見市の行政に聞いた話をまとめていく。氷見市役所、氷見市観光協会に商店主の意見を踏まえた町おこしや比美町商店街の観光事業について聞いた。

6-1. 氷見市役所

氷見市役所職員の、企画振興部商工観光戦略課の伏喜さんによると、氷見市の観光のなかで、現在の一番の目玉は番屋街だそうだ。また同課で観光戦略総括担当の竹口さんは、「番屋街は、氷見市への集客の入り口だと考えている。これから番屋街を中心にしていかにまわりに人を流していくかが課題だ」と語った。

では、現在の比美町商店街へ「人を流す」工夫は、十分と言えるだろうか。先述の通り、番屋街を訪れる観光客の多くは、比美町商店街への道順を知らなかった。竹口さんにその点を尋ねると、番屋街と商店街とをつなぐ道路を黄色く塗ったものが、商店街へ誘導するための仕掛けなのだという（写真 7 を参照）。

だが、有効性について疑問が残る。黄色いペイントは確かに目立つが、これが商店街への道のりを示すということは明確に表示されていない（私自身も言われるまで気づかなかった）。

その後の調査で、番屋街敷地にある氷見市総合観光案内板に、比美町商店街を中心とした「まんがロード」に誘導する地図看板が 2014 年 2 月中に追加設置されることがわかった。

写真 7-1.（左）　番屋街から商店街への通路。車も通ることができるが、近くに大通りもあるため、あまり利用されていない。

写真 7-2.（右）　写真 7-1 に写っている黄色いペイント部分

6-2.　氷見市観光協会

氷見市観光協会は、一般社団法人で独立した団体である。職員によると、氷見市の委託業務や観光案内、宿泊予約、スポーツ大会の団体の宿泊斡旋業務などを行っているそうだ。また、「まるまげ祭り」や「ごんごん祭り」などの氷見市の祭りの運営や、「氷見夜のまちなか巡り」などのイベント業務も行っている。ここでは、かつて行われていた、海鮮館から商店街まで歩く観光のツアーに関して尋ねた。職員によると、現在新しいツアーチラシはないものの、継続して「氷見ゆったりまちなか巡りヒミパズル」を開催しているそうだ。「氷見ゆったりまちなか巡りヒミパズル」とは、氷見市の観光スポットを観光ボランティアガイドと巡り、ガイドから出されるクイズに正解してパズルのピースを集めるというツアーのことである。その他、季節に応じて日帰りツアーやまち歩きツアーを開催している。ツアー以外では、ボランティアガイドの申し込み次第で潮風ギャラリーやカラクリ時計などの観光スポットのお勧めはするものの、商店街だけに人を誘致するという活動や企画は行っていない。

観光ツアーに関して、私はインターネットで氷見市観光協会の web サイトである「ひみきときとどっとこむ」を見たが、番屋街から商店街まで歩くツアーはなかった。しかし、海鮮館があった当時は、「氷見ゆったりまちなか巡り」のツアーの中に海鮮から商店街まで歩くツアーが存在した。以上のことから、**4-5.**で商店主の女性が述べていた通り、海鮮館から番屋街に移ったことで、道の駅から商店街を町めぐりするツアーがなくなったことがわかった。

これまで、商店主に聞いた話を参考にして行政に話を聞いてきたが、聞いていく中で矛

盾点が見つかった。例えば、番屋街の中に設置されている観光案内所である。商店主の意見によると、海鮮館の際にはあった観光案内所が番屋街の中には入っていないということだった。しかし、氷見市役所の職員によると、観光案内所は番屋街にも設置してあるという。実際に私が番屋街に行って確かめたところ、商店主の言っていた通り、観光案内所のような建物はみつからなかった。そこで、氷見市の観光案内を行っている氷見市観光協会で話を聞いてみると、現在の番屋街では、観光案内所が案内所だけでなく物販も行っているということがわかった。物販が中心となっているため、見た目では案内所だとわかりにくかったのである。また、海鮮館の時は常駐していた観光コンセルジュも番屋街には置かれておらず、今後の設置にはまだ時間がかかるということだった。これらのことから、番屋街の中にある観光案内所が海鮮館の時と比べて十分に機能していないことがわかった。

7. まとめと考察

比美町商店街の観光事業を維持していくためには、商店街自体の継続が必要だが、これまで調査を行ってきた中で、商店街自体の継続が難しいことがわかった。また、観光事業に関しても、観光客の意見から不十分だということがわかった。その原因を大きく 3 つにわけてみていく。

1 つ目は、観光事業以前に商店街が今の時代に対応できていないということである。これらは大きく 2 つの問題がある。一つが、後継者不足である。商店主 36 人のうち、後継者がいると答えたところは（自分が後継者という場合も含めて）14 店舗にすぎなかった。現在の商店主は、そのほとんどが 40 代以上で、その大半は自分の代で店を閉めると答えた。もう一つは、商店街の想定する客がスーパーマーケットに流れていっている、ということである。商店街の消費に関する調査からは、地元住人の多くがスーパーを利用していること、商店街の利用はスーパーで買い忘れたものを買うという程度であることなどが分かった。品ぞろえの豊富さのほかにも、駐車場があるという利便性から、氷見市でもスーパーが買い物の中心の場になっていた。

2 つ目は、商店主が観光事業に消極的だという点である。聞き取り調査を行っていると、高齢、自分の代で店を閉めるという理由から、今さら何かをしたところで変わらないと考える人が多かった。林さんのように積極的に何かをしている人はみられず、林さんの行う活動には参加するものの受け身でいる人が多かった。また、林さんの後を継ぐ人がいないということもわかった。

3 つ目は、商店街の「まんがロード」などの観光スポットがわかりにくいということである。道の駅である番屋街と商店街の両方で、観光客に対して商店街の観光事業に関する意見を聞いたところ、番屋街から商店街までの道順がわかりにくいことや、商店街の観光事

業自体の知名度が低いことがあげられた。また、商店街に来ていた観光客の意見から、現状に物足りなさを感じる声もきかれた。

おわりに

比美町商店街で調査を進めていくうちに、商店街自体が、観光化と地域の商店街の間で中途半端な立ち位置にいることがわかった。なぜなら、現在の商店街は、地元客と観光客のいずれのニーズにも対応できていないからである。地元客のニーズに対応できていないことは先にみたとおりだが、商店街の店舗に統一性がないことや観光客の多い日曜日を定休日にする店が多いことなどから、観光客向けでもないことがわかる。この現状を打破するためには、店舗の種類に限らず、土産物を店の前にカゴを置いて並べたり、林さんと共に藤子Ⓐワールドに積極的に参加することなどが必要だと思う。現在、商店街という形態はどこも厳しい局面に立たされている。だからこそ、お客を待つのではなく、地元客と観光客のどちらも呼び込めるような積極的な活動が必要なのではないか。

謝辞

本調査を進めるにあたって、多くの方々から貴重なお話をお伺いすることができ、また、さまざまな経験をさせていただきました。特に調査の初めから終わりまで、接することの多かった林さん及びに比美町商店街の皆さんには本当にお世話になりました。他にも市役所、商工会議所、氷見市観光協会の方々など調査中に出会ったすべての方々にこの場を借りて感謝の意を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

参考にしたウェブサイト

「氷見市比美町商店街サイト　モニュメント」
（http://fuzikoworld.com/wp/wp-content/img/spot/monu_sakana.jpg ; 2013 年 11 月 26 日閲覧）
「二子玉川　de　ぼちぼち絵日記　氷見旅行 1　藤子Ⓐ先生キャラに会える街ハットリくん列車～まんがロード」
（http://blog.goo.ne.jp/nikotama-life/e/beb1e68b9bc007f97973271529791f11 ; 2013 年 11 月 26 日閲覧）
「またたび　富山ガイド　氷見市潮風ギャラリー」
（http://www.toyamaguide.net/spot/68/ ; 2013 年 11 月 26 日閲覧）
「Yahoo!地図」
（http://map.yahoo.co.jp/ ; 2014 年 2 月 19 日閲覧）

3.　氷見市の「ご当地食」とそれに関わる地域の人々

村田葉月

はじめに

私は食べることが好きで、旅行に行くたびにその土地ならではの食べ物を食べるのを楽しみにしている。食に大きな関心を持っていた私は、食に関するテーマで調査したいと考えていた。しかし、郷土食や伝統食、行事食といったテーマは過去の調査実習報告書ですでに数多く取り上げられていたため、せっかくなら従来とは違う視点から、食に関する調査をしたいと思うようになった。平成25年4月から7月にかけて行った事前調査では、氷見市は食の宝庫としてPRされており、「食」が大きな観光資源となっていることを知った。そこで私は、食文化研究では比較的新たな方向性の開拓を試みるため、氷見市にて観光要素を含む食文化、一般にご当地名物やご当地グルメと呼ばれるものの成り立ちや特徴について調査することに決めた。

1.　調査の概要

今回の調査では、ご当地食材、ご当地名物などと呼ばれるものを複数取り上げ、それらに携わる人々に聞き取り調査を行った。私が取り上げたのは、「氷見の水産加工品」、「氷見牛」、「氷見カレー」、「氷見パスタ」である。調査に協力していただいたのは、飲食店経営者や土産物店の店員の方、水産加工業に携わる人、畜産農家といった方々である。聞き取り調査を行うにあたって特に焦点を当てたことは、ご当地食材やご当地グルメと呼ばれるものが、どのような特徴を持っており、確立するにいたるまでにどのような経緯をたどったか、という点である。

なお、今回ご当地食材やご当地名物と呼ばれるものを対象として扱うにあたり、これらを一括りに「ご当地食」と呼び、以下の報告で取り扱っていくことにする。ここでのご当地食の定義は、観光資源となっている、またはそれを目指して制作された食材や名物のことである。そして、使用される材料が氷見産のものであること、または製法やアイデアが氷見にて生まれたもの、と定めることにする。

2.　氷見の「ご当地食」

2-1.　氷見の水産加工品

氷見市はその昔から漁業の地域として知られているだけあって、魚介類を長期にわたって食べていくための保存や加工の技術が、昔からの知恵として継承されている。代表的な保存や加工の技術としては、季節の魚介を使っての素干しやミリン干しなどの干物類、塩漬け、米糠や麹で発酵させたもの、カタクチイワシを使った煮干しなどが挙げられる。調査では土産物店や水産加工会社の方々を訪ねたが、どの人も氷見の昔からの伝統的な方法ということを口々に話していた。

海産物を観光資源の目玉の一つに位置付けているだけあって、氷見市では、多くの観光パンフレットなどで氷見の海産物がアピールされており、そこには鮮魚店や民宿、氷見の等を扱う商店も紹介されている。今回の調査で訪れたのも、主にそれらのパンフレットに掲載されている土産物店などである。まず、商店街にある土産物店 H を訪ねた。この店は正面から見てオープンな雰囲気で、聞き取り調査の最中にも客や店員が絶えず行きかっていた。この店で働いている H さん（60 代女性）に、店にどれほど観光客が訪れるのかを訪ねてみたところ、「客数は地元の人と観光客が半々くらい」だという。また、同じく商店街にある別の土産物店 N も訪ねてみた。こちらは 10 代にもわたって長く続いている商店で、長年やり取りをしている個人客も多いそうだ。この店で働く K さん（50 代女性）にも顧客の内訳について尋ねてみたところ、「観光客の人と地元のお客さんは、大体 4:6 ぐらい。昔からのなじみのお客さんが多い」ということであった。お二人の話からは、商店街に位置する土産物店でも客数の割合はほぼイーブンであり、地元住民もしくは観光客どちらか一方に極端な偏りはないということが分かる。これは、2012 年 10 月 5 日にオープンした氷見道の駅「氷見漁港場外市場『ひみ番野街』」にも海産物を出店している店があり、観光客からしてみれば、必ずしも商店街に行かなければ購入できないというわけではないからだろう。また、商店街の商店が今でも地元住民に利用されている理由の一つに、氷見の水産加工品が贈答品として適している点が指摘できるように思われる。というのも、H さんと K さんのいずれも、「お歳暮やお中元の時期になると、贈答用に買っていくお客さんが多い」と答えていたからである。

ところで、氷見で販売されている水産加工品は、当然、氷見産の海産物を使用しているものだと思い込んでいた筆者の考えとは裏腹に、実際には「氷見産の魚介を使っての加工品は数が少なく、すぐに売り切れてしまう」のだという。というのも、ブランド力が高く生鮮食品として十分な需要と競争力を持つ「氷見産」の魚介は、漁獲量全体のうち加工に回る量がそもそも少ないからである。それに加えて、季節や旬によって獲れる魚介の種類や量が変化するため、「安定した供給は難しく、持続性がないことが欠点」なのだという。そこで、氷見の水産加工業者の中には、原材料となる海産物を他の地域から取り寄せ、氷見で加工して提供するという手法をとることで需要に応えようとしているところも出てきている。すなわち、冷蔵・冷凍技術の進歩と交通網の発達に伴って、「氷見ブランド」の鮮

魚の流通量が増え、加工用に使われる魚介がぐっと減少したにも関わらず、鮮魚と加工品を合わせた「氷見の海産物」には、それを超える需要があるということである。

冷蔵や冷凍の技術の進展や食の嗜好の変化からか、氷見において水産加工品の生産量は多少の増減はあるものの、減少していることが分かる（表 1）。各種加工品の中で 1，2 を争う生産量を誇っていたみりん干しも、総量が年々減少しているのにほぼ並行して減少している。しかし、平成 10 年では漁獲高そのものが全体的に落ち込んでいるものの、煮干しだけは翌年倍近くにまで生産量が回復していることが分かる。このように根強い需要があると見える煮干しだが、近年ではその需要の用途が広くなってきており、後述するご当地食「氷見カレー」でも、氷見の煮干しが使われている。また、飲食店や水産加工業者が連携して、煮干しや干物を使った料理を開発しようとする動きもあることが、聞き取り調査を行う中で分かってきた。例えば、一般的には和食に用いられることが多いが、それを洋食の料理に使用するという試みである。これらのことから、氷見の水産加工品を新たな形で展開・消費していこうとする動きがあることが分かる。

表 1.　氷見の水産加工品の生産量の変化

（『氷見市史　別巻　統計』p.134、『氷見の統計平成 12 年度版』p.38 より）

年度	総数	煮干し	みりん干し	素干し	塩干し	塩蔵	その他
平成 7 年	5173	250	1000	12	130	12	3769
平成 8 年	5044	635	1000	20	110	15	3278
平成 9 年	5446	905	900	85	90	10	3456
平成 10 年	3977	155	900	8	90	10	2814
平成 11 年	4232	305	750	16	140	10	3011
平成 12 年	4650	405	750	20	175	10	3290
平成 13 年	4156	215	675	20	220	2	3024
平成 14 年	2336	185	550	13	180	2	1406
平成 15 年	2367	555	400	8	175	2	1227

単位（t）

2-2.　氷見牛

氷見牛は、それまで氷見に在来していた農耕・運搬用の牛に、昭和初期に兵庫県但馬から雌牛を導入し、改良を加えて生み出された肉牛である。本格的なブランド化や PR 自体はここ 10～20 年の間に始まったものではあるが、現在では氷見牛を使ったコロッケやメンチ

カツ、カレーなど様々な商品の名前に冠されるほどになっている。また、氷見牛は氷見市の HP や観光面のいたるところでアピールされており、魚介と並ぶ氷見市の観光の一翼を担うご当地食と言える。

氷見牛は、歩留り等級と肉質の品質等級によるランク付けにおいて、高い品質を誇っている。歩留り等級とは、生体から皮、骨、内臓などを取り去った肉（枝肉（えだにく））の割合を算出し、割合の多さを評価する等級のことを言い、品質の高い順にアルファベットの A・B・C によって格付けされる。品質等級は、霜降りの度合いを示す「脂肪交雑」＝「BMS（ビーフ・マーブリング・スタンダード）」、「肉の色沢」、「肉の締まりときめ」、「脂肪の色沢と質」の 4 項目から評価される等級で、1～5 の数字によって格付けされる。特に BMS は等級によりその数値が細かく異なってくる。以下に肉質等級と BMS の数値に関する相対表を表 2 として記載しておく。この歩留り等級と肉質等級を組み合わせて、A3、A4 というように等級が表記される。格付けの点から言うと、氷見牛は B3 以上、BMS3 以上かつ氷見市内において 12 か月以上飼育された牛のことを指し、そのなかでも、A4 以上、BMS7 以上の高品質のものは「特選和牛」と称され、証明としてパッケージに金色のシールが張られる。一方、B3 以上 A4-BMS6 未満の和牛の肉及び交雑種の肉には銀色のシールが張られる。

表 2.　肉質等級と BMS の相対表（日本食肉格付協会 HP を参照し筆者が作成）

肉質等級	BMS（脂肪交雑）
5	No.8～No.12
4	No5～No.7
3	No.3～No.4
2	No.2
1	No.1

氷見牛は高価な肉であるため、地元であっても、普段の食卓に並ぶというよりも、特別な日のごちそう（ボーナスが出た日やお祝いごとがある日）や贈答用として食べられることが多いようだ。氷見牛を販売している店でも、贈答用としてのパックをラインナップしているところがある。観光客の中には、宿泊先や食事先で氷見牛を食べ、実際に購入できる精肉店などを聞いたうえで店に買いに来る人もいるそうだ。

氷見牛のブランド化の構想は平成 7 年に始まり、これは生産者である畜産農家の人々の発案によるものであった。畜産農家である T さん（60 代男性）によると、「当初はイベントでの PR や精肉店に（氷見牛の肉を）置いてもらえないかといった交渉で苦心した。というのも、肉屋としては飛騨牛のような有名な肉を置いた方が売れるから。反応は渋かった」

という。決して好調なスタートではなかったブランド化の試みは、平成 13 年頃に波紋を呼んだ BSE 問題や、平成 22 年の宮崎県での口蹄疫問題によりさらに苦境に陥ることになった。しかし T さんは、むしろそのために「『今どん底の状態から始めれば、上がるしかない』と思い直した」そうだ。一方、精肉を販売する側としては、氷見牛を扱うに至ったのには別の要因も加わっている。精肉店の N さん夫婦（50 代～60 代）は「全農の経団連が『富山県産牛』を PR していた」「生産者の顔が見えることから、消費者への安心・安全を保障できるし、地産地消にもなる」と言っていた。これらのことから、氷見牛のブランド化には、生産者側の努力に加え、全農の PR による拍車がかかったことが一助になったのではないかと考えられた。

他方で、ブランド化による影響は必ずしも良いものばかりではないことも分かった。例えば、ブランド力に便乗しようと、他地域で育った牛や、氷見牛と呼べるほど十分に成長していない牛、さらには、肉質がランク外であるにもかかわらず「氷見牛」と称して牛肉を販売する偽装問題が発生した。これらはいずれも、ブランド化が成功したからこそ可能になる違法行為である。

氷見牛の畜産農家は平成 25 年 10 月の段階では 12 軒で、生産者の高齢化が進んでいる。そして、高齢化問題に伴い、後継者問題も生じており、2013 年 10 月までの段階で後継者が決まっている農家は 2 軒である。T さんは「(生産者の) 中には 80 代の人もいる。生産者の中には自身の代でやめようと思っている人もいる」「年取って体力がなくなってくると、たくさんは世話できない」と語っていた。生産者の体力面の事情により、飼育頭数を減らしている農家もいるとのことで、生産量そのものが減少しているようだ。

また、仔牛の市場価格が値上がりしていることも生産量の減少の要因となっているようだ。昨年の仔牛の市場価格が 1 頭あたり 46～47 万円だったのに対し、今年は 54～55 万円にまで値上がりしているというのだ。第一次産業ということもあり、このような事態に対しては、国や自治体から何らかの補助や助成があるのではないかと期待したが、氷見牛においてはそうはいかない事情がある。T さんによると、「宮崎や飛騨、九州みたいな畜産が盛んなところには県や国からの助成がはいるだろうけど、畜産が主流ではない富山県では、特に補助を受けられることはない」というのだ。また、以前、仔牛の買い付けに訪れた九州の畜産農家では、「周囲 4 キロの範囲に何軒もの農家がある」様子や圧倒的に多くの「市場や競りの回数」を目の当たりにし、「北陸とは畜産の密度が違う」ことを思い知らされ、驚いたのだという。すなわち、県単位である程度畜産が盛んでない限り、自治体の助成もそれほどあてにできない、ということであるらしい。こうした事情を聞くにつけ、牛をはじめとする畜産業界全体の経営実態そのものが楽観視できるものではないということが、徐々に分かってきた。

2-3. 氷見カレー

氷見カレーとは、氷見産の煮干しを使うことを定義とした B 級グルメである。B 級グルメが全国的なブームとなっていた最中に、飲食店経営 D さん（故人、享年 54 歳男性）が「氷見は寒鰤が有名だが、寒鰤以外のシーズンも考えて一年を通じて人々が楽しめるメニューを B 級グルメで提供したい」と考え、商工会とも連携して平成 20 年 6 月から活動を開始した。同年 9 月からは、外部から活動グループを「氷見カレー学会」とネーミングしてもらい、各地のイベントへの参加や視察など様々な活動を行ってきたが、ここでの活動のポイントとして、テレビや新聞などメディアをうまく活用したメディア戦略が挙げられる。メディアに多くの人脈を持っていた D さんは、開発過程からメディアに取り上げてもらうことで、宣伝効果を生み出し、後の販路にも繋がるルートを確保することができたというのだ。新聞にも氷見カレーに関する記事が多数掲載されている点からも、このポイントが確認できる（写真 1）。

北日本新聞

地産地消 仕掛け人 ⑧

氷見市編

20店が味の"競演"

カレーに海鮮パスタ、パエリア、そしてカレードーナツ。氷見市内30の飲食店が「魚のまち」の誇りを入れたとっぱちカレーや氷見牛のうま味が凝縮されたカレー、ジャージャー麺、寒鰤の数々。どれを選ぼうか、迷ってしまう。

カレーによるまちおこしを進める土居会長（右から4人目）ら氷見カレー学会のメンバー

氷見カレー　氷見カレー学会（市内）

カレーでまちおこし。丸の内でレストラン傾林を営む土居博さん（51）がそう思い立ったのは2年前の夏だった。B級ご当地グルメがブームとなる中、一緒一つでできるカレーならどこの店でも取り組めると提案したものの、寒気で「なぜカレーなのか」と当初、困惑の色を隠せなかった。

氷見カレー学会が発足、同11月から16店で販売を始めた。氷見カレーの条件は、氷見産イワシの煮干しを使うこと。パエリアを煮干しスープで炊いたり、揚げて粉末にしてふりかけに使ったり、隠

北日本新聞社は、地産地消（略）を考えもっと知ってもらう「地産地消」連載中、なんでも物語・キャンペーンを展開しています。

カレーにこだわりとスタイルにこだわらなかった。各店が個性を出そうと切磋琢磨した結果、さまざまなオリジナルカレーが出来上がった。カレーがつなぐ輪は広がり、加盟店は6月に20店になった。

学会発足は氷見の名物を生んだだけではなかった。学会顧問の南田勝則さん（63）＝よつば社長＝は「これまで道であいさつする程度だった仲が、料理について熱く議論するようになった」と、飲食店同士の連帯感が生まれた効果を喜ぶ。

5月に神奈川県横須賀市で開かれた「華麗なる食の祭典・よこすかカレーフェスティバル」に参加し、9月には岐阜県恵那市の食のイベントへの出展も決まり、全国ブランドへ飛躍する舞台は整った。

「カレーは国民食だから、メニューは無限に広がる。民間やさまざまな業種に参加を呼び掛け氷見をカレーのメッカにしたい」と土居さんは力を込める。"食"が全国のグルメを呼びこめ―カレー学会の挑戦は続く。

（氷見支局長・西川義裕）

メモ　加盟店（順不同）＝氷見ラーメン、ラ・メール、イタリアンキッチンオリーブ、お食事処（とは）や太田、ポーノ、ペッシェ・ファミリーレストランポリエ、レストランハロー（香港飯店たんたん）、氷見グランドホテル、レストラン内山、ラグ船、レストランロワイヤル、食堂マイアミ、ロッジ、レストランロワ、ロワ、レストランロイヤル、食堂いろりや、七福本町牛乳、スパゲッティ専門あらはま、寿司処0（ゼロ）、1200。

（第3種郵便物認可）　2013年（平成25年）3月20日（水曜日）　読賣

レトルト氷見カレー発売

遺志継ぎ「地元グルメに」

氷見産の煮干しを使った「氷見カレー」のレトルト商品が21日に発売される。協賛店による街おこしグループ「氷見カレー学会」（谷内吉成会長）などが、昨年2月に急逝した土居博・前会長（享年54歳）の遺志を継ぎ、開発を進めてきた。関係者は19日、土居さんの命日前に商品化を報告し、「天国の土居さんのためにも、地元グルメに育て上げたい」と誓った。

土居博さん（氷見商工会議所提供）

レストランを経営していた土居さんは初代会長を務め、氷見カレーの普及に尽力した。レトルト商品化は、同学会が岐阜県内の業者に委託して開発を進めていたが、関係者によると偶然にも完成品が納品されたのは土居さんの一周忌にあたる先月26日だったという。

19日は谷内会長が経営する同市建のレストラン「ロイカ」に関係者が集まり、レトルト商品を富山大の学生がデザインした箱に詰める作業などを行った。同学会副会長の金谷和義さん（41）は「土居さんの遺志を継ぎ、カレーで氷見を盛り上げたい」と力を込めた。

発売されるレトルト商品は氷見産の煮干しの粉末だしに使った牛すじ入りカレー。牛すじは氷見牛でないが、ミニトマト、リンゴは地元産。煮干しだしうま味が特徴だ。

200グラム入り630円。初回生産分の880箱は氷見カレー学会の会員16店など地元で販売する。問合わせは氷見商工会議へ。（0766・74・1200）

レトルトカレーの出荷準備をする氷見カレー学会関係者（氷見市建のレストラン「ロイカ」で）

写真 1.　氷見カレーに関する新聞記事の一部（上：北日本新聞　下：讀賣新聞）

氷見カレー学会には 2013 年 10 月の時点で 16 店舗が加盟しており、各店舗がそれぞれ独自の氷見カレーを販売している。これらの加盟店舗は、D さんが飲食店を一軒一軒訪ね、協力を呼びかけていくことで参加店舗を増やしていったそうだ。氷見カレー学会の目標として D さんが精力的に取り組んでいたもののひとつに、「氷見カレーのレトルト商品化」があった。それだけに、開発半ばの平成 24 年 2 月に D さんが急逝した後、しばらくは、加盟メンバーも意気消沈してしまっていた。だが、「D さんの遺志を受け継ぐ」との思いから皆が一致団結し、2 代目の会長に代わって 2013 年 3 月にレトルト化及び販売開始に成功した。レトルトの氷見カレーは、氷見産の煮干しの粉末、同じく氷見市の柿谷地区で栽培されたリンゴ、胡桃地区で栽培された「アイコ」という品種のミニトマト、牛すじ肉を使ったトマトベースのカレーとなっている。このように、当初の目標を D さん抜きで達成した氷見カレー学会ではあるが、学会としての今後の目標や方針、展開に関しての見通しは、今のところ立っていないのだそうだ。

氷見産の煮干しを使うことを条件とする氷見カレーだが、煮干しの使い方は店舗によって異なる。出し汁としてカレーのルーに使っている店舗もあれば、トッピングの粉末として別に添えて提供している店舗もある。今回の調査ではいくつかのご当地食を実際に食べてきたが、このうち筆者が食べた氷見カレーは 2 種類で、ひとつは商店街に飲食店を構える H さん（60 代女性）のお店で提供される「クリームコロッケカレー」（写真 2）で、これはルーの出汁に煮干しが使われている。もうひとつは、同じく商店街に食堂を構え、学会の顧問も務める Y さん（60 代）のお店で提供されている 4 種類の氷見カレーのうちのひとつ、「ととぼちカレー」（写真 3；「ととぼち」とは、魚のすり身ないしすり身を団子状にしたもののこと）である。こちらでは粉末状の煮干しが添えられ、客が好みで振り掛けられるようになっている。

写真 2.（左）　H さんのお店の「クリームコロッケカレー」

写真 3.（右）　Y さんのお店の「ととぼちカレー」; 右下の小鉢に盛られているのが煮干しの粉末

筆者は当初、煮干しの使い方を各々の店のやり方に任せていては、「氷見カレー」としての統一感を生み出せないのではないかと思っていた。しかし、レトルトの氷見カレーに使われる煮干しを生産している水産加工会社の K さん（40~50 代女性）は、「店それぞれの工夫があるのだから、良いと思う」と話された。統一された「氷見カレー」のイメージがない一方で、各加盟店がそれぞれの工夫や個性をアピールことができる利点もある、ということだろう。

聞き取りを行う中で、人々が口々に話していたことがある。それは、氷見カレーの活動により、他の飲食店や他業種との交流の機会が増えたということである。氷見カレー学会というグループを編成し、グループとしての活動を通していくことで情報交換や交流の機会が増えたというのだ。Y さんによると、「飲食店の組合はあるが、年に 1～2 回温泉といった旅行に行く程度で、挨拶するぐらいの付き合いだった。しかし、カレーの企画によって交流が増えた」のだという。それまで挨拶を交わす程度だったつきあいが、他愛もない世間話に始まり、店の経営や資金繰りなどの内容へと話題は深まりを見せ、そして、それぞれの飲食店のメニュー考案に関する相談をもメンバー同士で交わすことが多くなっていったそうだ。つまり、氷見カレーの活動は、加盟店同士のコミュニケーションを高めるという効果も生み出したようだ。

2-4.　氷見パスタ

氷見パスタは、氷見の料理研究グループ「氷見クッキングスマイル」に所属する飲食店 2 軒とうどんの製麺所 1 軒（この製麺所が作っているうどんは、いわゆるブランド化した「氷見うどん」とは異なる）によって作られた料理及び商品である。氷見パスタは、平成 25 年 1 月に氷見で開催された、第一回氷見グルメ料理コンテストに登場したことで、商品化のス

タートを切った。このコンテストは、地元氷見の食材を活かした創作料理の開発を狙いにし、プロ・アマ及び和洋中のジャンルを問わず公募された。このコンテストにおいてグランプリを受賞したのが、氷見パスタの「ブリャベース」だ。ブリャベースはその名の通り、鰤のアラで出汁を取り、具にも氷見で獲れた旬の魚を使用したトマトベースの海鮮鍋パスタである。しかし鰤の季節は冬に限られるため、一年を通して店で販売するために、実際には季節ごとに旬の魚を使い分けて調理しており、具に使われる魚も季節によって異なるそうだ。また、パスタ麺にも特徴があり、うどんの製法である手延べ製法によって作られた半生パスタ麺である。このうどんの製法を用いた点は、会員の職業をうまく活かしたものだと言える。

ブリャベースはクッキングスマイル会員飲食店 2 軒で食べることができる。筆者も会員である飲食店経営の K さん（50 代男性）のお店で食べてきた（写真 4)。筆者が食べに行った 10 月某日は、具の魚にカマス、フグ、カワハギが使われていた。K さんによると、氷見パスタを開発しようと思ったのは、「和食が多い氷見の食材を、洋食という新たな視点からアプローチしてみよう」と考えていたためだという。これは洋食に携わる人間ならではの視点のであろう。

写真 4.（左）　ブリャベース

写真 5.（右）　クッキングスマイルが発行している氷見パスタのパンフレット

コンテスト後、ブリャベースは会員である飲食店 2 軒で販売されることになり、ブリャベースに使われたパスタ麺は正式に商品化された。それと同時にレトルトのパスタソースも開発され、商品化された（写真 5)。パスタソースは飲食店 2 軒がそれぞれ 1 種類ずつ作っていて、どちらのソースにも氷見の食材が使用されている。ひとつは氷見牛のボロネーゼ、もう一つは氷見鰤と発酵真鰯 [1] を使ったトマトソースである。もともとお店で使われていたソースを、レトルト商品用にアレンジして作られたものだそうで、普段お店で作るのとは勝手が違い、大鍋での大量生産を見越してレシピを工夫したそうだ。新たなご当地

食としてこれから大々的に売り出されるものかと筆者は思ったが、実際はそうもいかないようだ。氷見パスタのセットは販売してもすぐに売り切れる上、ソースの制作に手間がかかり、レトルトパックに仕上がるまでに 2〜3 週間かかるからである。需要に対する供給スピードが追いついていないため、大量生産は難しいようだ。

3. 氷見の「ご当地食」の分類の試み

以上に、今回の調査で着目する氷見のご当地食について概観してきた。次に、本節では、材料や素材、加工の段階から、それらの特徴を指摘したり、分類してみようと思う。

氷見のご当地食を見てまず指摘できるのは、その多くが、動物性食材、もしくはそれをメインに使用したものであるということだ。ただし、氷見に農産物が無いというわけではない。2-3.で先述した柿谷地区のリンゴや胡桃地区のトマト、さらには、今回の調査では取り扱っていないが、細越地区を中心に栽培されているハトムギなど、植物性食材は見られる。しかし、本章でこれまでに取り上げてきた、比較的有名なご当地食は、魚介類や氷見牛、およびそれらを使用したものである。この背景には、氷見の地形的要因が考えられるだろう。氷見は平地が少なく、農耕に適した土地柄とは言い難い。それに加え、海産資源に恵まれ、漁業の街としての古い歴史を持っている。農産物よりも魚介類を中心とした動物性食材が観光資源として主軸に置かれているのは、このあたりに理由があるのだろう。

次に、各々のご当地食の加工の程度に着目してみよう。例えば、氷見牛はいわば牛肉という素材そのものだが、水産加工品は魚介類を干す、漬ける等の加工という手順を経て生産されている。そして氷見カレーや氷見パスタは、素材や加工品を活かした料理であり、調理の段階を経たものである。つまり、ひとくちにご当地食といっても、その中身は、素材そのもの、加工してあるもの、調理されたものに分類することが出来る。このご当地食の段階による分類を、図 1 に表した。ここでは、それぞれの段階を、「第一次ご当地食」、「第二次ご当地食」、「第三次ご当地食」と名付けることにした。まずは「第一次ご当地食」だが、これは素材そのものの状態であるご当地食を指す。今回調査したご当地食の中では、氷見牛がそれにあたり [2)]、生産過程で難航したものの、現在では観光資源のベースとなっているといえよう。次の「第二次ご当地食」は、素材に何らかの加工を加えたものを指し、水産加工品が当てはまる。また、第二次ご当地食は、その土地の生業だった産物を観光資源化したもの、それまでの食べ方とは違う新しい食べ方を試されるものだという特徴をも持つ。最後の「第三次ご当地食」は、調理済みの料理と捉えられるもので、近年全国的に注目を浴びた「B 級グルメ」と呼ばれる料理だとも言えるだろう。今回調査したご当地食では、氷見カレーと氷見パスタが該当する。第三次ご当地食の特徴としては、氷見カレーが水産加工品である煮干しを使用し、氷見パスタが地元氷見の魚介類や氷見牛を使用してい

る点から、第一次・第二次ご当地食を使用しているという点が挙げられる。また、氷見カレーと氷見パスタのどちらもが、開発経緯の中で「レトルト化」を一つのキーポイントとしており、これらのことから、第三次ご当地食は、「B 級グルメ」、「第一次・第二次ご当地食の使用」、「レトルト化」という 3 つの方向性を持つことが指摘できる。

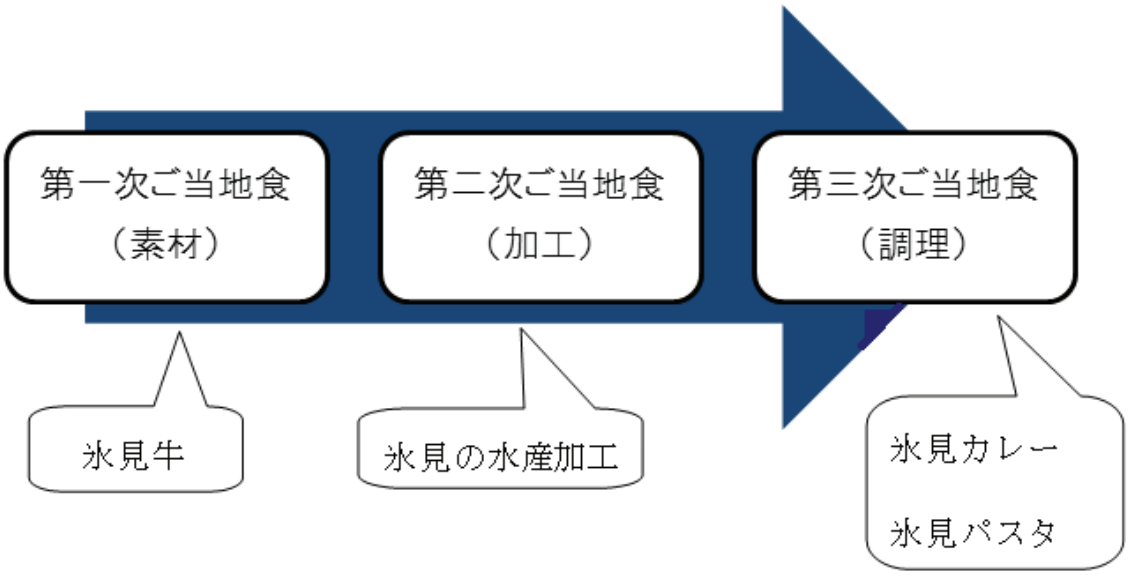


図 1.　素材の加工段階とご当地食の関係図式

4.　考察――「ご当地食」にはどんな人が携わっているのか？

この節では、ご当地食の生産や開発に携わる人々について着目したい。前節で指摘した素材の加工段階による分類を踏まえて、筆者が気づいた点がある。それは、素材の加工段階によるご当地食の分類が、ご当地食に携わる人々の分類に重なるという点だ。まず、第一次ご当地食の氷見牛の場合、生産と初期の展開は生産者（畜産農家）や組合による働きが大きいものの、行政が広報活動を担うという傾向を指摘できる。氷見市の観光に関するホームページやパンフレットを見ても、氷見牛がいたるところにプッシュアップされており、行政や財界からのバックアップ、特に広報活動における支援が存在することが分かった。第二次ご当地食の水産加工品は、もともと氷見の生業だった地域の産物を、行政が観光資源にコンバートしたものだと捉えられる。氷見産の魚介類は市外のスーパーや県外においても販売されており、氷見市が漁業の町として鮮魚や加工品など魚介類分野のブランド力を高めようとしていることがうかがえる。一方、第三次ご当地食の氷見カレーと氷見

パスタは、第一次・第二次ご当地食を活用し、地域の飲食店が工夫を凝らし考案したものである。展開についても、地元メディアや地域のイベントを基点に拡大していることが分かった。これらを振り返ってみると、第一次・第二次ご当地食は行政による PR の影響が大きく、その結果ブランド化に繋がったものだと推測される。そして、第三次ご当地食は、既存の食材を地域住民のアイデアにより新たな形に形成し、展開についても地域住民の努力による効果が強いということが考えられた。

このような違いが生まれた理由には、「生産・開発にかかるコストの大小」と「企画の自由度」という 2 つの要因が考えられる。第一次・第二次ご当地食は生産の段階で生産者に大きなコストを要するため、生産者側で企画や広報までを行うにはある程度の限度がある。そこで、広報を行政が担うことで、行政としては、すでに存在するものをご当地食として推進することが出来る。その結果、行政は生産コストをかけずに展開を企画し、観光資源を育てていくことが可能となる。つまり、第一次・第二次ご当地食の企画展開は、生産者と行政のメリットがある程度一致していると考えられる。一方、第三次ご当地食は、第一次・第二次ご当地食をもとに創作されているため、初期コストを小さく抑えることが可能である。その上、個人の自由な発想やアイデアを基盤に活動しているため、行政が担う場合とは異なり、より自由な発想やアイデアを尊重したうえで展開していくことができる。例えば、氷見カレーの展開活動では、地元氷見での活動はもちろんの事、他地域でのイベントも積極的に展開するなど、市内外を問わずに柔軟な活動を行っていた。また、飲食店同士の自発的な連携も密なものであり、この連携が氷見カレーの活動全般において非常に重要であったことも特筆すべきことである。氷見パスタにしても、氷見カレーにしても、地域住民の密な連携があったからこそ確立したご当地食と言えよう。このように考えると、ご当地食の活動を、行政が担う場合と地域住民が担う場合とでは、それぞれ独自のメリットがあることが分かる。そして第三次ご当地食を見ても分かるように、近年では生産者や個人の考えを重視する方向にシフトしてきている。この傾向は今後も続くと思われるが、今後は、地域住民の発想を重視し尊重するスタンスで行政が助力する、といったような体制も出てくるかもしれない。

上記の「生産・開発にかかるコストの大小」、「発想の自由度」といった点とは別に、他にも第三次ご当地食ならではの特徴も見受けられる。それは、氷見カレー学会やクッキングスマイルのような、生産者や飲食店業者を中心とした地域住民によるネットワークを確立していることだ。しかもネットワークの確立により、ネットワークの参加者同士によるコミュニケーションチャンスが増え、交流が拡大・親密になるという効果も派生している。個々の意識の高さや努力に加え、集団での活動を経ることにより、地域の一体感の醸成につながり、ゆくゆくは地域の活性化にも一役買うことが予想される。

おわりに

今回取り上げた 4 つのご当地食には、まず素材や材料にどのくらい人為的加工が加えられているか、加工の段階による違いが見られた。そして、生産・開発や展開に関わる人物模様についても、それぞれのご当地食ごとに異なるものが見えてきた。特に第三次ご当地食は、行政よりも地域住民による働きかけが肝要な原動力になっており、住民によるネットワークの形成がコミュニケーションを向上させるという波及効果をも生み出していることが判明した。ご当地食を取り巻く要素には、素材や材料以外にも、人間的要素も多分に含まれていることが、筆者にとってとても印象的であった。

今回の調査を経て、筆者は、ご当地食における地域性を具体的に見出すことが出来た。ひとくちにご当地名物や B 級グルメと言っても、その成立過程や個性には、それぞれの地域の風土や気質、文化といった多種多様な背景がある。つまりご当地食とは、地域性が具現化したものだと言うことが出来よう。今回氷見におけるご当地グルメ、B 級グルメを調査対象にしたことで、「ご当地」という地域性をコンセプトに生み出される食文化の、新たな境地の一端を、少しばかり開拓できたのではないかと思われる。

最後に、聞き取り調査を行う中で、それぞれのご当地食に携わる生産者・開発者の人たちが、どのような想いや考えを持って臨んでいるのか、その意志の強さと熱い思いをひしひしと感じることが出来た。これからの「食」の分野における観光戦略では、こういった強い想いを持つ地域の人たちの役割が一層増していくのではないだろうか。

謝辞

最後に、今回の調査でお世話になった飲食店の方々や生産者の方々に、この場を借りて厚くお礼申し上げたいと思います。突然お伺いしたにも関わらず、親身に接してくださった氷見の方々は、調査中の私の心の支えとなりました。調査を経て、氷見の食のおいしさ、氷見の人々の温かみが以前より一層身に染みて感じます。本当に、ありがとうございました。そして、ご馳走様でした。

注

1）糠（ぬか）鰯、こんか鰯とも言う。このソースに使われているものは、前項 2-3 において登場した水産加工会社の K さんの会社にて作られているもので、最近では「氷見アンチョビ」とも呼ばれる。

2）氷見牛は、「氷見牛コロッケ」や「氷見牛メンチカツ」といったようなファーストフードや料理に使用されていた場合、第三次ご当地食に分類されるものとする。

参考文献

黒澤仁、2013 年、『養牛の友　10　2013』、日本畜産振興会

氷見市史編さん委員会、2007 年、「34 昭和 35 年～平成 15 年水産加工品生産高の推移」『氷見市史　別巻　統計』、氷見市

氷見市総務部総務課、出版年不明、『氷見の統計　平成 12 年版』、氷見市

参考にしたウェブサイト

「公益社団法人　日本食肉格付協会 HP」

（http://www.jmga.or.jp/；2013 年 12 月 10 日閲覧）

4.　氷見の定置網漁とその漁師

檀野　祐作

はじめに

私が漁師について興味を持ったのは、氷見の定置網漁師星野喜秀さんの語りからである。星野さんは、漁師歴 25 年の中堅漁師であり、現在港近くの漁師町に住んでいる。私は、合宿がはじまる前の 4 月 23 日に星野さんの自宅へ上がらせてもらい、実際の仕事内容や生活リズムなどを聞くことができた。がっしりとした体格の持ち主の星野さんは、自然を相手に仕事をすることの厳しさ、一年を通して移り変わる魚をとることの楽しさを語ってくれた。「定置網漁は、ギャンブルのようなもので、実際に朝網を手繰りにいくまでは、どれぐらいの魚が入っているか分からない。だからこそ面白い」「仕事中は命がかかっているから、若いもんには厳しくなる」といった、男らしい言葉を聞いた。星野さんの語りを聞いていくにつれて、それまでに自分の持っていた漠然とした「漁師」像が思い込みであったと感じ、現在「漁師」を職業としている人はどのような人たちなのか調べようと考えた。

本論では、現在の定置網漁業について、聞き取りや文献資料からの技術的文化的側面の調査結果、また聞き取りからの心理的側面を過去と比較することで「定置網漁師」について言及していくこととする。

1.　調査概要

1-1.　調査概要

本章の目的は、過去と現在の定置網漁や漁師について調べることで、「現在の漁師」はどのような人たちであるのかを考察することである。調査地は氷見市、調査期間は平成 25 年 9 月 14 日から 9 月 20 日、10 月 22 日、10 月 29 日、11 月 11 日、12 月 6 日である。なお、聞き取り調査は、「四共（よんきょう）漁業組合」という大型定置網組合に所属する漁師とその組合を引退した漁師、富山県定置漁業協会理事（網元）、それに氷見漁協の方々を対象に行った。また、特に氷見の定置網の歴史に関しては、文献資料も利用している。

1-2.　現在の大型定置

氷見市内の大型定置網漁組合は、氷見地区に 3 経営体、阿尾地区、薮田地区、宇波地区、女良（めら）地区にそれぞれ 1 経営体ずつの、計 7 経営体が存在する。昭和 63 年時では 9 つ経営体があったが、平成に入ってからの経営体数は減少した。なお、氷見市の漁業経営総体数 97

に対して、大型定置が 7 つしかないが、平成 24 年の氷見市の漁獲量の 54%（14,030 トンに対し 7,565 トン）、漁獲金額の 38%（38 億 1 千 6 百万円に対し 14 億 4 千万円）を占める。大型定置の漁獲量の上位を占めるのはマイワシ、カタクチイワシ、ソウダガツオ、スルメイカであり、漁獲金額では、ブリ、スルメイカ、アジ、メジマグロが上位を占める。氷見市の定置網数は大小合わせて 45 ヵ統、大型定置網は氷見沖に 17 ヵ統ほど敷設されていて、調査対象組合は 5 ヵ統所有している。

水揚げされた魚は全て氷見市南部の県営漁港である氷見漁港に集められ、各地に卸される。氷見漁港に集められる魚の大半は近くの海で水揚げされたものだが、能登方面やたまに市北部からトラックで魚が運送されてくることもある。

2. 定置網について

2-1. 定置網の歴史

まずは、定置網漁の歴史を、「台網（だいあみ）」と呼ばれた頃から、現在までさかのぼって記す。氷見の定置網の歴史は天正年間（1573～1593）までさかのぼるとされている。最古の資料としては慶長 19 年（1614 年）にクロマグロをとる「夏網（なつあみ）」についての文書がある。氷見では、明治 34 年に制定された漁業法に「定置網」という言葉が使われるまで、「台網」と呼ばれていた。初期の台網の構造は、魚をとらえる袋状の「身網（みあみ）」と、回遊してきた魚群を身網へと導く垣根のように張られた「垣網（かきあみ）」の二つの部分からなり、当初は藁縄を編んで作られた藁網であった。藁網は海中に敷設（ふせつ）しておくとだんだんと腐ってゆくため、秋から冬にかけて富山湾に回遊してくるブリとブリの若魚であるフクラギをとるための「秋網」、冬から春にかけてイワシやスルメをとる「春網（はんなみ）」、夏にマグロをとる「夏網」を周期ごとに入れ替えて操業していた。その後明治 40 年に、当時宮崎県で使われていた「日高式大敷網（おおしきあみ）」が導入され、網の構造が変化した。明治 45 年から大正元年にかけて氷見の上野氏が「網口（あみくち）」と呼ばれる開口部を狭くした「上野式大謀網（だいぼうあみ）」を考案した。この大謀網は大規模で長大な身網を持つことから、網取りの時間の短縮と「垣網」に沿って身網に入った魚群の散逸を防ぐため、昭和初期頃に「角斗（かくと）、のぼり網、身網」の三段階に分け「身網」に入った魚を水揚げする「落とし網」の工夫がなされた。「角斗」は「運動場」とも呼び、垣網に沿って沖へ泳いだ魚が最初に入るところである。ここで魚群を一定の範囲に囲んで行動を制限しさらに「身網」へと誘導する。「角斗」と「身網」の途中に位置するのが「のぼり網」である。「のぼり網」の出口は海面近くにまで上がってきているため、「身網」に入った魚はまた海面近くに上がらないと脱出することができない。昭和 30 年代頃から網の材質が藁から合成繊維を編んで作られた化学繊維網が導入された。これにより、周期ごとに網を入れ替える必要がなくなり、通年敷設することが可能になった。昭和 40 年代には身網の奥にさら

に「のぼり網」を設け、二つ目の身網を取り付けた「二重式落とし網」が考案された。これは「越中式落とし網」として、現在も敷設されている（図 1）。

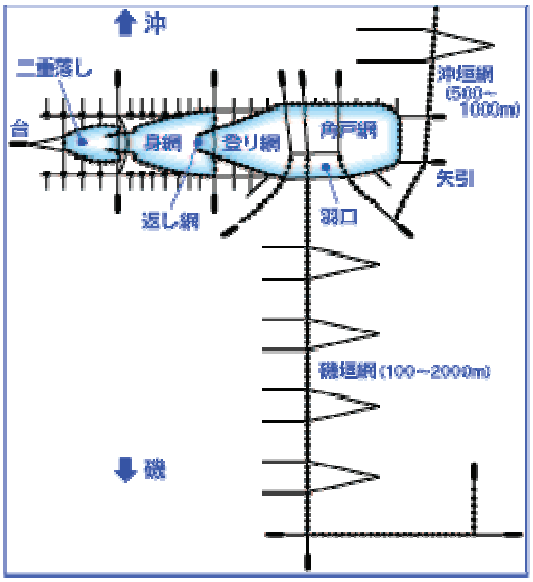


図 1.　越中式落とし網（きときとひみどっとこむより）

次に、定置網漁に使われてきた船についてである。氷見で定置網漁が行われてきた天正年間から、昭和 30 年ごろまでは、「ドブネ」と呼ぶ箱型の舟が使われた。全長 14～15 メートル、幅約 2.5 メートル、深さ約 0.7 メートルあまりで、船体には、主に地元の杉を、網取りの際に太い藁綱やロープが直接当たって擦れる部分には、擦れに強いアテ材を使った。ドブネは動力がないため、後に舵をつけて曳船（ひきふね）に曳かれて漁場へ往復するようになるまで、船尾の艫櫓（ともろ）1 丁と両脇に脇櫓（わきろ）を 2 丁のほか、6 丁から 8 丁の櫂（かい）で操船した。「櫓（ろ）」とは水中で翼断面を持つ棒を左右に振ることで推進力を得る道具で、「櫂（かい）」は船べりに支点を持つオールと同じものである。昭和 40～45 年頃には、FRP（繊維強化プラスティック）製の動力船が導入されるようになった。それまでは曳船となる木製の動力船は存在したが、この新しい動力船には、揚網機（ようもうき）や「ユニック」と呼ばれるクレーンなども搭載された（写真 1）。

写真 1.　揚網機

定置網は大きく 2 種類に分けられる。敷設水深が 27 メートルより深い大型定置、それより浅いところに敷設される小型定置である。定置網を敷設する海域は県の許可が下りた区画にのみ制限される。現在の氷見市の場合、大型定置網は海深 27m～90m の間に敷設されている。氷見沖には 17 箇所の漁場が存在する。

2-2.　調査組合について

氷見の定置網漁が組合のかたちをとるようになったのは、大正時代になってからのことである。そのなかで、四共漁業組合ができたのは昭和 28 年（1953 年）のことである。当初、四共漁業組合の参加したのは、もともと定置網漁をしていた漁師たちではなく、八艘張り網漁をしていた漁師たちであった。

現在の四共漁業組合の構成員は 31 人で、その役割は 7 つに分けられる。まずは、現場の総括である「船頭」である。船頭は 1 人のみで、漁の総指揮をとり、乗組員の管理や漁獲の管理を行う。また、現場の人間として株主の役員会に参加するのは船頭だけである。それに続いて、船頭を補佐する「副船頭」が 2 人、各船の現場監督である「監督」が 3 人いる。揚網機などが導入される前は構成員の人数が多く、各船に 1 人監督が乗っていた。現在、四共漁業組合では運用している船が 6 隻あるが、それに対する監督が 3 人である。現在の監督は、近くの船へも注意を配る。その下には、船の全体的な操作と仕事の伝達をする「表乗り」が 6 人、「友取り」と呼ばれる操縦士が 6 人、船のメンテナンスをする「機関士」が 6 人である。さらにその下に、船頭以下、機関士までの指示に従い働く「若い衆」が 7 人いる。若い衆は組合に入った頃から、4 年目ぐらいまでの漁師である。

四共漁業組合は 6 隻の船を所有していて、それぞれの船に 5～7 人ほど乗船する。最も大きい船は 16 トン級で、揚網機が搭載され、網起こしがしやすいように船の先端が尖らず四角形になっている。

所有する5つの網を、県から許可された漁場に下している。常設されている網は「茂淵(もぶち)一番」、「茂淵二番」、「茂淵三番」と呼ばれ、それらは、氷見漁港から最も近接した大型定置漁場に下されている。この「茂淵一番」などの網の名称はその漁場の海底の状況から名付けられたとされる。また12月20日から6月10日までの期間中網が下される「中浜六番」、「中浜七番」と呼ばれるスルメ、イワシをとる網がある。この網の敷設に期間を設けられているのは、この網を期間以外に敷設すると、周囲の組合の漁獲に影響するためである。こうした取り決めは、周囲の組合との話し合いによって決定される。

また、四共漁業組合は、同じく大型定置組合の氷見漁民合同漁業組合と網を共有していて、平成25年は、四共は「茂淵三番」、「中浜六番」、氷見漁民合同は「茂淵一番」「茂淵二番」、「中浜七番」の漁場で漁をしている。これは5年周期で交代になる。

2-3. 網元から組合への歴史

網元とはもともと氷見の定置網漁が始まったときに、網の資本金を出資し経営を行った雇用主やその家族、一族のことを指す。起源は定置網の起源にほぼ等しく、文禄4年（1595年）の文献資料には、すでに網元に関する記述が存在する。定置網漁のように巨大な網が必要な漁の場合、漁師が網を買うことは不可能である。そのため、漁師たちは基本的に網元の資本力に頼るほかなかった。

現在氷見の定置網漁は全て「任意組合」のかたちで運営されている。「任意組合」とは、各当事者が出資をして共同の事業を営むことを約する合意によって成立する団体である。一般的に氷見で組合化が始まったのは大正時代に入ってからとされるが、それは明治末に制定された漁業法（「明治漁業法」とよばれる）によるものである。四共漁業組合が昭和28年に八艘張網(はっそうばりあみ)の漁師たちによって結成されたのは、昭和26年にこの漁法が許可制となったことに起因すると思われる。組合化したことにより、形式上組合員全員の出資により経営され、全員がその責任を負うようになった。

3. 漁法の近代化

3-1. 網

季節ごとに網が入れ替えられていた昭和初期までは、特にブリやフクラギをとる秋網の事を「大敷網」と呼んでいた。そのほかに、夏にマグロを水揚げする網を「シブ網」や「夏網」といい、春にマグロをとる網を「春網」や「鰯網(いわしあみ)」とよんで区別していた。秋網を下す準備として、氷見では8月ごろから敷設準備の陸(おか)仕事へかかった。当時の「垣網」はほとんど藁縄を編んで作られており、「身網」にはトワインと呼ぶマニラ麻や、綿糸の糸網が併用された。

垣網は、漁師らによって陸で藁の堅縄を編んで作られたが、この作業を「網をシク」といった。垣網は水面に近いほど潮の流れと水を吸った藁網自体の重みによりかなりの力がかかるので、藁網は太く、網の目合いが細かく、海底に近いほど藁網は細くて、目合いは粗かった。

魚を水揚げする「身網」には綿糸の糸網を使い、魚と取り上げる身網の最深部に一番目合いの細かい網を使った。身網の網口部分、および上方の部分ほど次第に目合いが粗くなった。

また、「身網」は海中での腐食と防ぐため、仕立て上げた糸網を大釜で煮たてたコールタールに染めた。この糸網は補修しながら 2〜3 漁期つかえたが、「藁網」は 1 漁期しかもたず、12 月には長い竹竿の先に結んだ鎌で海中に切り落としていた。コールタールに染めた糸網は 2〜3 期使えるといっても、最も力のかかる海面近くの網には常に新しい網を使うため、古い網は順番にあまり重みのかからない底の方へまわして使った。

本格的な秋網の敷設には 10 月初旬ごろからかかった。この作業は波の穏やかな日を選んで行われるが、氷見の北部「灘浦（なだうら）」では、10 月 15 日と日にちが決まっていた。最初に行う作業は「矢引切（やびきぎ）り」という。矢引切りとは沖と磯の双方に矢引と呼ばれる大きな浮（うき）子物を、海上の定められた所定の位置に土俵を沈めることによって定置する作業で、これによって網の形状が決まる。「切り」というのは、土俵を縄で船に固定し、その縄を「切る」ことで土俵を沈めることから由来する。いずれの矢引も、沖に向かって上手（かみて）（氷見）側に切られ固定されるが、対面の下手（しもて）（能登）側には、台と呼ぶ大きな浮子物を固定する。この両方の矢引と台との三点間に丈夫な太いワイヤーやロープを張り渡す。この骨組み的ロープを「オオゴ」という。このオオゴに「身網」や「角斗網」を掛けると定置網の主要部が完成する。沖に切られるのを「沖の矢引」、磯側のものを「磯の矢引」といった。矢引切りの日には沖と磯の矢引を同時に切った。双方の矢引を固定すると、対面にある台の位置が必然的に決まってしまうので、この作業は「大敷網」の敷設作業中最も重要とされ、双方の切るタイミングがずれてしまうと、大量の土俵の重みで一瞬のうちに船が海中に沈んでしまう緊張する作業であった。

明治以前の浮子物は「ロクハン」といって、長さ六尺から七尺（約 180〜210 ㎝）直径一尺二寸から一尺五寸（約 36〜45 ㎝）余りの秋田杉の丸材を四割りしたものが使われていたが、昭和初期には全て孟宗竹（もうそうちく）を浮子に使うようになった。孟宗竹とは、日本に生息する竹のなかでも最大のものであり、最も多く植生する竹でもある。もっとも潮の力がかかる台と、沖、磯の両矢引部分にはとりわけ太い「四間竹（しけんたけ）」が選ばれた。現在、台は鉄ブイ製で、沖と磯側に一つずつの「二ツ台」だが、当時は孟宗竹を束ねた「一ツ台」であった。

氷見では、昭和の初めごろ、5 月末から 7 月中旬ごろまで、主に地元で「シビ」とか、「オオタロウ」と呼ぶクロマグロをとる夏網を下した。夏網は「シブ網」ともいって、年末に

入れた春網の漁期が終わったあと 4 月末から 5 月頃にかけて網の仕立てなどの陸仕事を行った。氷見浦では古くは、「秋網」、「夏網」とも沖垣網をつけて操業していたのだが、灘浦との漁場紛争に発展するため、灘浦との協定の結果、3 月になると藁網で作られた沖垣網は取り払われた。そのため、夏網には沖垣網はつけられないのが普通だった。

3-2. 網取り

昭和 20 年頃までの定置網漁では、「網起(あみお)こし（網を引き上げる作業のこと）」はすべて人力で行われた。身網の最深部付近に「台船(だいふね)」と呼ばれる船を 1 艘待機させ、身網の網口付近には 6 艘の船が横一列に並んだ。それぞれの船は、岸から沖に順に「岸の子」、「岸二」、「岸三」（岸中(きしなか)、岸大中(きしだいなか)）、「沖三」（沖中(おきなか)、沖大中(おきだいなか)）、「沖二」、「沖の子」と呼ばれた。6 艘の船で身網の網口に結ばれたロープを引き上げて網を手繰り始め、「台船」と「岸の子」、「沖の子」と、「岸三」、「沖三」どちらかの 4 艘で挟み込んで魚を水揚げした。魚を水上にあげるまでだけでも約 2 時間かかり、魚の量によっては、船上に水揚げするまでにさらに小 1 時間ほどかかった。網取りの中心であり、最も力のかかる船は、「中船(なかふね)」とも言われる「岸中」、「沖中」の 2 艘には、16～17 人の水夫が乗り込んだ。

魚の積み込みには基本的に「岸の子」、「沖の子」、「台船」の順に積み込まれた。ブリやフクラギをはじめ、イワシやイカ、アジ、サバなどを船上に揚げる際には、「オオダモ」と呼ばれる大型の袋状の網を使い数人がかりで水揚げした。しかし、全長 2 メートル、重さ 100～200 キロを超えるクロマグロや、夏から秋にかけてはいるシロカジキなどの大型の魚は、「ドウカギ」とか「テカギ」と呼ばれる、長柄をつけた鉄製のカギで船上に引き摺り揚げた。

3-3. 近代化の影響

昭和 30 年以降の技術革新とともに、漁業においても作業全般に機械化が進められてきた。以前は網を敷設するのにも高岡の二上山(ふたがみさん)や石川の石動山(せきどうさん)といった目印になりやすい目立つ山、また岸の建物などを目印として、二点間の角度で海上の現在地をはかる「ヤマダメ」という技術が使われてきた。現在では、海上の現在地を把握するためには GPS が使われている。現在「ヤマダメ」を使える人は 50 代、60 代のベテランの漁師のみだ。現在地の情報が必要となると GPS が使われる。船も「ドブネ」と呼ばれていた無動力木製船の頃から、FRP（繊維強化プラスティック）製の動力船となっている。これにより、港と定置網までの往復の時間が短くなり、また船の巨大化、機械化が進んだ。船には「揚網機」と呼ばれる、網起こしの際に網を巻き上げる機械が四機ついている。揚網機が導入されるまでは、網を手繰る作業は全て人力で行われた。海水に浸かっていた網は重く、100 人近くの漁師が横に並んで網を手繰った。現在の網起こしは主に揚網機の力で行い、揚網機間の網を人が

手繰るといった網起こし方法になっている。揚網機の登場によって人員が削減され、30 人程度で網起こしができるようになった。近年の漁船には「ユニック」と呼ばれるクレーンも搭載されている。これは魚を水揚げする際にオオダモとともに使われ、水揚げ作業を容易にしている。以上のような近代化、特に機械化により、かつて漁師に必要不可欠だった特殊な技術や知識、独自の伝統は、不要になりつつあるといえる。

4. 実際の漁の様子

今回の調査では、四共漁業組合の組合長森本太郎さん、船頭堀田義信さんの協力を得て、2013 年 9 月 19 日と 12 月 6 日の二度にわたって、実際に漁に同行することができた。本節ではその際に私が見聞きしたことを中心に、漁の様子について記す。

私が氷見漁港近くの番屋に到着したのは午前 2 時 30 分頃である。その時間は、若い衆が、出港のための準備をしている。船に真水や氷、暖房用の燃料ガス、それに仕事後に配る缶コーヒーの積み込みが行われる。他の漁師は午前 3 時頃までに、各々集合する。船頭、副船頭、監督は、港にある番屋とは別の、川沿いにある倉庫にある事務所に集合していて、出航の直前にやってくる。午前 3 時 10 分頃に各自船に乗りこみ、出航を待つ。直接港にバンでやってくる船頭、副船頭、監督の乗り込みとともに出航する。港内は最徐行を義務づけられているので非常に低速で進み、港内を出て加速、氷見港近くにある唐島（からしま）を通り過ぎるとさらに最高速へと加速する。15 分程で漁場「茂淵三番」に到着し、昇り網と一段目の身網（一段箱（いちだんばこ）という）の合わさっている部分と台に船が待機する。網起こしが始まるまでの間、漁師は表に並び静かに待機する（写真 2）。

写真 2. 網起こしの直前

現在は船の大型化、高性能化により、昇り網側には沖側と岸側で 2 艘、台に 1 艘の 3 艘で水揚げを行う。私が乗船したのは岸側の船である。網起こしはまず、一段箱の入り口の昇り網を沖側と岸側から海上に引き上げ、魚の逃げ道が無くなるようにする。その後、一段箱の網を揚網機と人力で手繰っていき、魚を台の方へ追い込む。網起こしの際は作業しやすいように照明が点けられるが、その光にイカが寄ってくる。そして集まってきていたカモメがイカを獲りあう。網の目は台に向かっていくにつれて、だんだんと細かくなっていく。「茂淵三番」に敷設してある定置網は「二重式落とし網」である。そのため、二段目の身網（二段箱（にだんばこ）という）の入り口の昇り網を引き上げる作業をもう一度行う。二段箱の網起こしになると網の目はさらに細かくなり、網の目に指をいれて手繰っていたものが、指をいれられないサイズになる。二段箱に入ると、様々な魚群が見えだす。なかでもシイラは大きいうえに海中ではエメラルド色をしているのでわかりやすい。

魚を台の手前に追い込むと、台側の 1 艘と岸側の 1 艘で挟んで水揚げ作業に入る。沖側の 1 艘は台側の隣に移動し、台の船に移って水揚げ作業に参加する。岸の船が残ることになるのは、岸の船が大きい船だからである。身網の魚をオオダモですくい、台の船の真ん中にある魚艙（ぎょそう）に入れる作業はだいたい 10 人ぐらいで行われる。1 人がオオダモの柄を持ち、3 人でオオダモをロープで引っ張って魚をすくいあげる（写真 3）。

写真 3.　水揚げの様子

魚艙には海水に氷を大量に入れて、水温が 0℃近くに調節されており、入れられた魚は仮

死状態となる。これを「沖締(おきじ)め」という。10 分ほど水揚げ作業をし、魚を積み込み終わると、氷見漁港へ帰港する。帰りの途中で 1 人 1 人に缶コーヒーが配られる。

港へ帰ってくると、セリにかけるために、魚の選別作業が行われる。大きな机のような選別台に魚が入れられ、それを漁師たちが周りのカゴに魚種ごとに選別していく（写真 4）。この日に水揚げされたのは、ブリに幼魚であるフクラギ、シイラ、イワシ、などであった。小型のマンボウも一匹水揚げされていた。

この作業は船頭から若い衆まで一緒になって作業する。海に出ている時は皆黙って緊張感のある現場となっているが、選別は冗談や世間話をしながら和気あいあいとした雰囲気で行われる。選別が終わると漁師たちは船に乗って番屋へと帰る。セリをするのは漁協の人と仲買人で、漁師は関わらない。船とともに漁師が番屋に帰ってくると、若い衆が船の後片付けをする。各々カッパをぬいで着替え、ストーブのまわりで雑談をしながら過ごす。若い衆は停泊している船の上で、「カブス」と呼ばれる選別で余った魚をさばいて焼いたりしている。

写真 4.　選別作業の様子

5.　各世代の漁師の「漁師観」

30 代～40 代の漁師は中堅漁師とされる。中堅漁師はそろそろ若い衆から昇進し、役職が与えられる。船の整備や操縦など、若い衆と比べるとずっと重要な仕事を任されていることもあり、自分の仕事に対して責任を感じてきている人が多いようである。彼らの漁師歴は 15～20 年ほどで、網取りの際も仕事を理解し、網の引き上げや揚網機などあらゆる場面で活発に作業している。まだ引退が視野に入るような年齢ではないので、定置網や、組合

についてよりは、実際の作業の充実を目指しているようである。

「若い衆」は高校卒業したての 19 歳から 20 代後半の漁師である。現場での仕事は、基本的な網起こしや網の固定などの、多くの人出を必要とする力仕事が主である。高校卒業とともに漁師になった人が多く、高校の先生からの勧めで漁師になった人もいる。彼らのような若手漁師は、現在も仕事を「見て覚える」ことが主とされ、陸仕事などは先輩が教えているが、漁師として 1 人前の知識量に至るまでは、長いキャリアが必要である。

組合内での漁師をおおまかに分類すると、およそこの三つの世代に分かれるようである。この区別は、漁が終わり番屋に帰ってきてから集まって雑談をするグループとも対応している。40 代や 50 代以降の漁師は仕事後すぐ帰宅するが、それ以下の年齢層はおおまかに 30 代と、30 歳以下のグループに分かれていた。若い漁師たちは、先輩の輪の中にありながら、同世代同士で固まっているような印象であった。

ところで、調査を続けていくうちに、各世代の漁師たちが「漁師」という仕事に対して、それぞれ違った観念を持っているように感じた。近代化し、仕事の内容が少しずつ変化していく中で、その流れとともに生きてきた年配の漁師からすると、漁師の生活リズム、習慣が変わってきたようである。たとえば、以前の漁師には仕事後番屋に集まり酒を酌み交わす場が存在した。漁から帰るとほぼ毎日、カブスを肴に酒を飲んだ。後輩は先輩に酒をつぎ、緊迫した網起こしの最中には聞けない事を教わった。そこには世代間の交流があり、後輩は先輩の「漁師観」をこのように共有、継承していたのだという。ところが、仕事後に酒を飲むという習慣は、5、6 年前からなくなってしまった。

現役漁師や、引退した漁師、漁協の方や網元に話と聞いているなかで、「今の漁師はサラリーマン化している」という語りをしばしば耳にした。これは、過去と比較して、現在の漁師の生活が保障され安定してきている、ということである。現在組合の漁師のなり手を募集するには、一般的な求人広告を出すのだが、昔は家業のような仕事で、親が漁師で船を持っているから自分も仕事を継いで漁師になるとか、漁師の親戚のつてで漁師になるのが主だった。漁業法も近代化し、就業時間は短縮され、特殊な技能も必要とされなくなり、技術習得のための経験と時間も減ってきている。また、最低賃金が設定されたことで、ギャンブルの度合いが高かった漁師の収入も安定しているのである。彼らが「今はサラリーマンのようなもんや」とか、「海のサラリーマン」などというときに念頭にあるのは、以上のような漁師のライフスタイルの変化および近代化である。

おわりに

漁師の仕事を「サラリーマン」と形容する傾向は、漁師という仕事に対する愛着のあり方の変化のようにも見える。かつては家業として、これから家を継ぐという覚悟や、自分

には漁師という生き方しかないという考えがあったのだろう。そして、それが自分の仕事に対する愛着につながっていたのではないか。しかし現在では、漁師という職業も、一般的な求人広告を出している。それでも船頭は、漁師になりたいという若者と面接をする際、「海は好きか」と必ず聞くのだという。そうして、海や魚が好きで、漁師の気質を持つと見込まれた若者が採用されるのである。聞き取り調査では、人びとは「漁師はサラリーマン化している」と話す一方で、「今も昔も漁師は変わらん」とも語っていた。網をみんなで一緒に手繰るときの気持ちは同じなのだという。私自身も漁に同行させてもらった時、この網の中にどれだけの魚がいるのだろうと高揚したが、そうした高揚感は昔のままなのではないだろうか。私が垣間見ることのできた、漁師の人びとの自分の仕事に対する愛着や、漁師という仕事の楽しさは、そこにあるのではないかと思う。

参考文献

氷見市立博物館、2001 年、『氷見の漁業と漁村のくらしⅡ』、氷見市立博物館、p.3～37
氷見市史編さん委員会、2000 年、『氷見市史 6』、氷見市

参考にしたウェブサイト

「きときとひみどっとこむ」
（URLhttp://www.kitokitohimi.com/；2014 年 1 月 10 日閲覧）
「氷見漁業協同組合」
（URLhttp://www.jf-net.ne.jp/tyhimigyokyo/；2013 年 12 月 11 日閲覧）
「氷見市」
（URLhttp://www.city.himi.toyama.jp/；2014 年 1 月 10 日閲覧）

5.　氷見の八艘張網漁――後継者問題を中心に

中村　春貴

はじめに

テーマとその選定理由

寒ブリで有名である氷見は、越中式定置網漁が盛んなことで知られている。11 月ごろから 3 月にかけて脂が一番のった寒ブリが水揚げされる。氷見の寒ブリは、その美味しさで全国ブランドとして名が通っている。しかし、調査をしていくうちに、氷見では寒ブリがよく獲れる定置網以外にも、様々な漁法が存在することがわかってきた。なかでも私が興味をもち、本章でとりあげるのは、一般にはそれほど知られていない「八艘張網漁」という漁法である。全盛期には定置網漁よりも勢いがあった八艘張網漁だが、現在では氷見で操業する組織が一つにまでに減ってしまった。目下のところ、唯一操業している「有磯組」にしても、その存続すら危うい状態となっている。本章で特に後継者問題をテーマにすることにしたのは、この背景を明らかにしたいと考えたためである。

報告について

以下の報告では、八艘張網漁の漁法についての具体的説明をしたうえで（第 2 節）、八艘張網漁の歴史的変遷について記述する（第 3 節）。そして八艘張網漁の組織の運営方法や組織の構成員などについての説明をしたあと（第 4 節）、八艘張網漁の現在置かれている状況を報告する（第 5 節）。最後に、八艘張網漁の過去と現状についてまとめたうえで、後継者問題の原因と対策について記述して（第 6 節）、その後それまでのまとめを報告する（第 7 章）。最後に、実際に八艘張網漁に同行して観察してきた様子を紹介する。

1.　八艘張網漁とは

そもそも八艘張網漁とは、具体的にどういった漁法なのだろうか。ごく簡単に説明すると、海の底に敷いた八角形の網の上に灯りをともして魚を集め、周囲を囲んだ八艘の船で網を引き上げ、集まってきた魚を獲る方法であり、「八艘張網」という名前はこの網の形に由来する。

八艘張網は光に集まる魚の習性を利用しているため、漁船は、日が暮れ始めた頃に出漁する。漁に使用する船は、魚を集めるための集魚灯を保持している船（中船（なかふね））が 1 艘、網を揚げる船（側船（がわぶね））が 8 艘、船に問題が起きた時の予備となる船（道楽船（どうらくせん））が 2 艘である。

漁場は決まっており、そこには既に網が沈められている。漁場に着くと、それぞれが担当する八角形の頂点の位置に移動して網を巻き取るための準備をして待機する(図 1 を参照)。中船が集魚灯を点けて魚が集まったのを確認すると、側船に網を揚げる合図をする。網揚げの際、不均等に揚げると魚が間から逃げてしまうことがある。そのため、親方が指示を出しながら揚げる。最後に大きなタモを使って魚をすくい獲り、その後、網を元の形に戻して海に沈める。この時、網が破れていたりすると船の上で網の補修を行う。そのため八艘張網漁では、操業期間中に陸仕事はない。定置網漁が、設置してある網に魚が自然に入ってくるのを獲るという受け身の漁であるのに対して、八艘張網漁は網を設置したうえで光を利用し魚をおびき寄せて獲るという能動的な漁なのである。

獲れる魚はイワシ、アジ、ソウダガツオ、カマス、イカ、ニギス、サバ、フクラギである。このほかにも、集魚灯で集まってくる魚は獲れる。

八艘張網漁で使われる船は大型定置網の船よりも小さいため、天候や波の影響が出やすい。そのため、出漁できない日も少なくない。

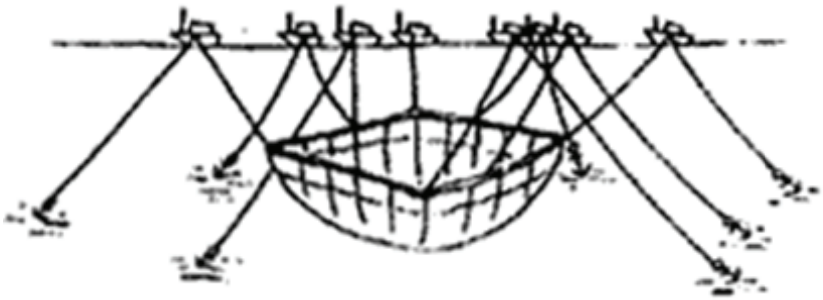


図 1.　八艘張網漁の仕組みを表す図（氷見市編『氷見の漁業』p.2 より）

2.　八艘張網漁の歴史

以下の記述は、『氷見市史 6』「第五章　漁業　第三節　八艘張網漁（敷網）」（氷見市史編さん委員会編、2000 年、pp.155-159）による。

氷見で八艘張網漁法がはじまったのは、それほど古いことではない。もとは、昭和 23～24 年ごろに、当時島根県方面に出稼ぎ漁に行っていた人たちが彼の地の「ジャコ網」に習って試験的に導入したのが初めとされる。導入当初は四艘張網だったので、氷見では「四手（よつで）」、あるいは「四手網（よつであみ）」と通称される。

もともと、四艘張網が導入される以前から、水深 70 尋余り（≒105 メートル ; 1 尋は 1.5～1.8 メートル）の漁場で夜間、船の端でバッテリー電球を灯してイカの釣漁をしていると、明りに誘われてカタクチイワシの大群が浮上してくることが経験的に知られていた。そのイワシを追ってまたおびただしいアジとサバの群が海上近くまで浮いてくるので、初めは

釣り棒を使った手釣りで、枝鉤(えだばり)をつけて一度に二匹ずつ釣っていた。しかし釣漁だと大量でも 200 キログラムと水揚げ量に限界がある。そこで、昭和 23 年（1948 年）に初めて一ヵ統の四艘張網を試験的に敷設・操業したのである。

当初の漁では、釣漁の倍にあたる、10 貫ザルに 10 杯分（約 400 キログラム）あまりのアジを水揚げした。しかし、資金と資材があまり豊かでなく網の規模も小さいため、いったん魚取り網に入った魚群も水揚げ作業の途中に網外へ逃げてしまう。そのため網の改良が図られ、魚取り網をより深い場所に敷設し、かつ魚取り網の上方につけた網の規模を大きくするための工夫を施した。

操業初年度は、中船のほか四艘の船による四艘張網で、しかも秋季だけの操業だったが、次年度からはより深い場所での操業にも耐え得るように網取り船を四艘から八艘に増やし、現在の操業に近い八艘張網に変わった。同時に、それまで（万力(まんりき)を使いながら）人力で行われていた網取り作業が、動力式ドラムの導入によって機械化が図られた。

当時の操業は、明りを灯す中船（灯船）を中心に、四隅と各辺の中央部に位置して網を揚げる網取り船 8 艘の、合わせて 9 艘が一船団を組んだ。四隅の船のほか、四辺の中央部に各々一艘の船を配するのは、網揚げ時に沖合での早い潮流によって網が一方に流されたり緩んだりすることで、いったん網に入った魚がここから逃げ出すのを防ぐためとされる。

当時の八艘張網漁は、現在と違って集魚灯とする灯船の光量も比較的弱い。また板を敷いた座板張りの漁船の上に漁の合間、風雨を避けるために張った帆布製テントの中に入って、中船の船頭の「網起し」の声が掛かるまで待機した。魚群探知機や無線機も装備されていなかったため、網入れや網揚げは船頭の経験と勘に頼る部分が大きく、「網起し」の合図などはあらかじめ決めておいた動作を、懐中電灯を用いることで知らせあった。

昭和 26 年（1951 年）9 月、この敷網漁業（当時は、四艘張網）は許可制となった。最盛期には氷見町のほか、阿尾・藪田・宇波・中波各地先沖に 12 ヵ統が許可されていたが、当時の操業期間は周年免許ではなかった。

その後、敷網漁業者側からたびたび操業期間の延長が要望され、数次の変遷を経て、昭和 51 年（1976 年）に敷網（八艘張網）に関して、次のように許可方針が改められた。対象漁船は総トン数 8.5 トン未満で、操業場所は氷見市沖水深 100 メートル以深。操業期間は周年だが、「竹里掛(ちくりのがけ)」や「川尻漁場」など特定漁場では、11 月 16 日から 12 月 21 日までの 35 日間は大敷網（大型定置網）によるブリとフクラギが八艘張網の集魚灯の明りを嫌って網に入らないといって操業が禁止された。平成 8 年（1996 年）の段階で、氷見地区では「有磯組」・「加納組」・「やまじゅう組」の 3 ヵ統の八艘張網が許可され、動力船に自家発電機を積み込んでいる。

以上が『氷見市史』にもとづく八艘張網漁の起源だが、聞き取り調査の中では、これとは異なる説を聞くことが出来たので、そちらについても紹介しておく。それは、元定置網

漁師の酒井勝宏さんの父親と八艘張網漁の親方である本川雅幸さんの父親が「四手」を発案したという説である。酒井勝宏氏によると、彼ら漁師たちは戦時中に食べ物がなくて食糧確保に必死だったが、その時、魚が光に集まるという習性を利用して漁ができると考えたのだという。手はじめに、かんてら（灯り）を灯して寄ってきた魚を、4 人それぞれのふんどしを使って捕まえた。その後に、このアイデアをもとに試行錯誤した結果、「四手網」を考案した、というものである。

3. 八艘張網漁の組織

昭和 40 年頃までは、八層張網漁の組は 6 つ存在していた。しかし平成に入った頃から八艘張網漁の組が消滅、合併を繰り返して、現在では有磯組だけになった。

現在、八艘張網漁を操業している「有磯組」は、共同経営という形で運営されている。代表は、有磯組の「親方」である本川雅幸さんである。本川さんは八艘張網漁を始めて 50 年、親方になって 26 年というベテラン漁師である。定置網漁のように法人化されて、株式会社と変わらない組織体系となっているのと比べると、有磯組の経営方法はいかにも昔ながらのそれである。たとえば、株式会社化の進んでいる定置網漁では厚生年金や保険などが整っているのに対して、八艘張網漁の漁師には厚生年金の保証はない。

有磯組における、網の所有者は個人ではなく有磯組（法人）である。昔から漁に使われる網は大変高価なもので、それを所有している者のことを「網元」と呼んだ。しかし現在の有磯組では、八艘張網は組織で共同の所有物となっている。また、有磯組では、すべての船を合わせて八艘保有している。ただし、常にすべての船を動かせるというわけではなく、故障して動かせない時もある。

八艘張網漁の賃金は月給制で、最低賃金の 10 万円、これに漁獲高に応じた上乗せ金が発生するという、歩合制を取り入れた形になっている。ちなみに、これは水夫の賃金であって、船を出す船主には基本給料および漁獲高の上乗せ金に、さらに船の使用料が上乗せされる。また、決算の際には漁獲高に応じてボーナスが出るというが、そのほかにも船の燃料代や、番屋の電気代、ロープや網の補修にかかる費用といった、共有資材にかかる必要経費は有磯組から支給される。

次に記すのは、有磯組の構成員についてである。大まかに見てみると、多くの構成員は厚生年金を受け取っている、60 歳を超えた高齢者である。今回の調査では、1 人だけ、30 代の男性と話をすることができたが、その男性の場合は、父親が八艘張網漁を営んでいるということであった。彼らが八艘張網漁に入ったきっかけとしては、会社勤めでサラリーマンをやっていたが、定年退職してから、友人や親戚のつてで有磯組に入ったという人が多かった。これはいずれも、船持ちではなく、水夫（船乗り）である。他にも、会社を辞

めて有磯組に入ったという人もいれば、急病で倒れた人の代わりとして急きょ水夫になったという人もいた。水夫はみな若い頃に漁師の経験があったので、1、2 週間もたてば、ある程度慣れるそうである。他方で、船主の場合は、10 代や 20 代の頃からずっと八艘張網漁に携わっている人が多く、他には船を親から譲り受けた人も少なからずいた。

八艘張網漁の操業期間は、9 月から 5 月末までである。6 月から 8 月までの間は休業期間であり、給料も発生しない。そこで有磯組では、毎年 1 年契約で水夫を雇うことになっている。水夫を探すのは、船主の役割である。水夫の顔ぶれは毎年のように変わるものではないが、高齢や病気のために出来なくなったということで、他の人を雇うことはある。ただし船主が全く知らない人を雇用するということはなく、親戚や知人、友人に頼むのが普通である。これは知らない人よりも知人の方が一緒に仕事をしやすいからである。それでも見つからなかった場合には、有磯組の他の船主に聞いて見つけてもらう場合もある。

4. 八艘張網漁の様子

八艘張網漁がどのように行われるかの概略は第 2 節に記した通りだが、現在、八艘張網漁は、昔とはやや異なる方法で操業されるようになっている。もっとも大きな違いは船の数で、網を巻きとる船（側船）が 6 艘にまで減ってしまった現在では、網は六角形になっている（現在、道楽船は使われていない）。また、機械化が進んだことと人件費削減のために、船の乗組員も 3 人にまで減少したことも大きな違いである。そして、昔は 1 日に 2、3 度網を揚げていたが、魚の量が減ったので現在は 1 日に 1 度しか網を揚げない。

今回の調査では、漁の様子をさらに詳しく知るために、2013 年 9 月 19 日の漁に同行させてもらうことにした。本節では、そこでの観察にもとづいた記述を行う。

船主はだいたい夕方 5 時頃から「番屋（漁場近くにある待機所）」に来て、船に乗って出漁の準備をする。ひととおりの準備が終わると、他の船主たちと世間話をしたり、車や船の上で寝るなどする。親方の本川さんが乗る中船の本川丸だけは、準備ができてからほどなくして漁場へ出港するのだが、八艘張網漁は日没後でないと集魚灯で魚を集められないので、日が沈むのを待ってから出港する。漁場へ着いたら、集魚灯を灯して魚を集める。昔は船が一斉に出港していたが、燃料が高騰し省エネが求められる世の中になったため、中船のみ先に出ることになったのである。

魚がたくさん集まってくるのは 24 時前後で、魚群探知機を使って確認する。水夫たちは 23 時ごろから有磯組の番屋へ集まり始める。他愛のない話や軽い冗談を言い合ったりして和やかな雰囲気で待っていたが、24 時過ぎに親方から連絡が入ると、スイッチが入ったかのように、みな黙々と出航の準備に取りかかりはじめた。準備ができた船から出港して、製氷機のあるところまで行って、船の貯蔵庫に氷を敷き詰めていく。この作業には 3，4 人

程度しか必要ないので、残りの人はその様子を見守っているだけなのだが、この時も誰も無駄口を叩くことはなかった。番屋でしゃべっていた時とは全く異なる雰囲気である。

船を 25 分程走らせて漁場に着くと、それぞれの位置につく。このとき、中船から無線を使ってきれいに並ぶように各船に指示が入り、網を巻き取る側船はそれに従う。続いて、中船の合図で網を巻き取るのだが、1 ヵ所だけ引き揚げすぎることのないように、漁師たちは周りを注意深く見ながら揚げていた。網を引き揚げる際は船が揺れて隣の船同士が接触するので、漁師たちはそのことにも十分気をつけていなければならない。網を揚げ終わると、次にタモで魚を獲る。この日は主にフクラギが獲れていた。他にもイワシやイカなどが揚がっていた。はじめはベテラン漁師が魚を獲っていたが、途中からは 30 代の若い漁師にもやらせながら、魚を揚げる時のコツを教えていた。その後は作業を完全に若い漁師にまかせて、ベテラン漁師たちは、彼らが汗だくになって頑張っている姿を静かに見守っていた。

魚を獲り終えると、網を海中に戻す作業に移る。この時、側船の 1 隻が網に絡まったようで、親方がその船に向かって罵声を浴びせるかのように叫ぶ、という場面があった。このように、わずかなトラブルはあったものの、無事に網を元の位置に戻して港に帰る段になると、みな緊張が和らいで顔がゆるんでいたように見えた。そして船主は乗組員にビールを配って、飲みながら無線で冗談をぶつけあったり、しゃべったりしながら帰っていた。

港に戻ると、すぐに魚の選別にとりかかる。魚は新鮮さが売りであるため、選別が早ければ早いほど、セリでいい値がつくのだ。選別が終わったら「かぶす」と呼ばれる現物支給の魚（主に旬な魚や値がつかない魚）を持って番屋に戻り、船の片づけをする。八艘張網漁は陸（おか）仕事がないのでそのまま帰路につく人もいる。番屋に残ってビールやコーヒーを飲んで、話をしてから帰る人もいる。親方は選別後も市場でセリの様子を見てから、「番屋（組員の待機場所）」に戻ってきた。

漁の現場を体験してみて私が何よりも印象的だったのは、仕事のスイッチの切り替えである。連絡が入ると人が変わったように真剣に仕事に取り組み、漁が終わると緊張が解れて和やかな雰囲気になる。その変化の様子が、彼らの表情からありありと伝わってくる。また、親方や先輩にあたる漁師たちが若い漁師を見守る姿も印象的であった。親方は、魚がセリにかけられるまでを見届けたり、仲間を叱りつけたりする場面があったが、いずれも有磯組の親方としての責任感からくるものであったのではないか、と思われた。

5.　八艘張網漁の後継者問題

5-1.　後継者問題とその原因

上でも述べたように、有磯組には高齢者が多数在籍している。このことから、いまは元

気に働いていても、今後、いつ誰が仕事を出来なくなったり、辞めたりするかわからない。ましてや、船主が倒れるなどしたら、八艘張網漁の操業すら厳しくなる見込みだという。以前よりも少人数での操業が可能になったとはいえ、この点が漁の存続を根本から脅かしていることに変わりはない。それに加えて、八艘張網漁では後継者問題も深刻である。

八艘張網漁の場合、後継者問題の要因は、以下の三つが考えられる。まずは、漁師に対する社会保障が十分でないことである。八艘張網漁の経営形態は従来からの従業員らによる共同経営であり、近年の法人化の進んだ定置網漁業のように、厚生年金や健康保険など福利厚生の整備が進んでいない。このため八艘張網漁師は、生活や将来に対する不安が残る。現在の八艘張網の漁師の大半を占める、定年退職後の人々にとっては大した問題ではないことかもしれないが、「若い」漁師たちにとって、この環境はとても整っているとは言えないだろう。ただし、定年退職者にとって働きやすい環境があるからこそ、現在でもなんとか漁が続けられている、という見方もできるため、このことの良し悪しを判断するのは、実は難しい。

次に、労働の時間帯と労働環境の不規則さが挙げられる。一般的なサラリーマンのように、朝から夕方（あるいは夜）まで働くという生活リズムとは異なり、光で魚を集める八艘張網漁の労働時間は、暗くなり始める夕方から朝までである。この仕事の開始時間は、定置網漁に比べてもさらに早い（定置網漁の仕事開始時間は早朝の 3 時前後である）。そのため、他の業種に就いている友人、知人と会う機会が極端に少なくなってしまう。また、現代の多くの若者にとって、漁業といえば「汚くて臭い仕事」、「年寄りのする仕事」であるように思われる。後継者不足の原因には、こうした固定観念もあるだろう。

最後に挙げられる要因は、操業期間である。八艘張網漁では、獲れる魚の量が少ない 6 月から 8 月にかけて休漁することになっていて、この期間は給料が発生しない（この期間を利用して、1 カ月ほどかけて網の修理が行われるが、それは船主だけの仕事である）。以前はこの期間に、サヨリ船引き網漁やイカ釣り漁、小型定置網漁などを行っていたが、現在は燃料代と網の高騰や魚の減少、そして魚の取引価格の低下によって採算が取れなくなったため、操業されていない。この期間は、船を持っている人は船釣りする人のために船を出す仕事があるが、そうでなければ別の仕事をするか、無給の状態ですごすことになる。

5-2. 考えうる対策

以上の後継者問題の要因については、対策がないわけではない。以下、私の考えうる限りで、上にあげた順に対策を考察してみる。

まずは社会保障や福利厚生を充実させる、という方法である。この際には、定置網漁の経営方法がモデルとなるだろう。すなわち、有磯組を共同経営から本格的に法人化する、というものである。法人化して船の所有者を有磯組にすることで、後継者の確保もしやす

くなるように思われる。ただし、私は、有磯組がこれまで法人化せずにきたことの理由を十分に調べていないため、ここにはそれなりの理由があるのかもしれない（たとえば、漁獲量や漁獲高が大型定置に遠く及ばないという経営形態が、何らかの理由で株式会社に向かない、など）。

次に、労働時間と労働環境についてだが、これを根本的に見直すということは、八艘張網漁自体を変えるということになるので、実際は不可能に近い。しかし、仕事内容や労働環境を明示し、求人情報として発信することで、興味を持つ人が出てくるのではないだろうか。たとえば、実際の漁に同行すると分かるが、漁業は必ずしも「汚くて、臭い」わけではない。漁が終わると道具や船をしっかり清掃されており、その仕事場はむしろ清潔である。こうした先入観を取り払ったり、イメージを改善するための余地は、まだかなり残されていると思われる。また、仮に漁師をやりたいという若者がいたとしても、八艘張網漁の船主たちは求人情報を外に発信していないために、彼らの多くが定置網漁の方に流れていっている、ということもありうる。その点、定置網漁は仕事と経営の分離をすることで、経営側が集中して求人対策について考える事ができる。

最後に、操業期間の問題である。私は当初、別の漁を夏に行うことでこの問題を解決できるのではと思ったのだが、先述の通り、そうした方法は以前に行われていた。コストの問題で断念したことなので、今後また復活させることは困難だろう。他には、この期間に別の仕事をあっせんすることも考えたが、少なくとも氷見の漁業という労働市場では、すでに労働力は十分なようだ。だが、別の考え方をすれば、八艘張網の漁師は後継者問題について議論したり、可能性を模索するための時間がたっぷりとある、ということでもある。今後は、夏の休漁期間を使って対策を練るなどすると良いのではないだろうか。

写真 1.　氷見漁港の様子

おわりに

戦後に誕生し、一時は定置網漁よりも勢いのあった八艘張網漁だが、高齢化と後継者問題が重なった上、組の数が減少し、今や存続すら危ぶまれている。現在、唯一残っている「有磯組」は、定置網漁と比べると、いかにも昔ながらの組織である。漁師のほとんどは、家族や親戚、知人といった間がらであり、身近な関係で構成されている。そのため、親方とその他の漁師の上下関係も、定置網漁などと比べるとずいぶんゆるやかであるように感じた。漁に用いられる技術も、最新式とはいかない。GPS も潮流計も取り付けられていない、親方の本川さんの船を見た私は、これが経験と勘に頼った漁か、と思わされた。

もちろん、漁師の数は日本全体でも減少しているのだし、漁の機械化が進み魚の値段も下がった現在では、八艘張網漁のような小規模で昔ながらの漁が存続したり、新たに参入するのは、そもそも難しいのかもしれない。他方で、労働環境が整備されており若者の就労者も多い定置網漁の例などを見ると、八艘張網漁にも現状を改善する余地があるのではないかと感じた。本章で、有磯組を法人化、求人情報の積極的な発信、休業期間の有効活用といった対策を提案したのは、そのためである。

今回調査したのは、氷見の八艘張網漁のなかでも有磯組だけである。そのため、調査報告書のデータとしては、偏りがあるかもしれない。だが、全国各地に、似たような状況に立たされている漁はいくつもあるだろう。調査を通じて、私は、現在はどんな漁業でも時代にあった柔軟な対応が求められており、そうしなければ時代から淘汰されてしまうのかもしれないと感じた。時代に合わせて変化してきた八艘張網漁だからこそ、これまでに培ってきた知恵を出し合って生き残ってほしい。

謝辞

今回、八艘張網漁を調査するにあたって、有磯組の代表、本川雅之さんをはじめとする有磯組の漁師の方々、また、市場や家で話を聞かせてくださった漁師の方々や氷見漁業協同組合の方には大変お世話になりました。有磯組の方々には、実際の漁に同行させていただきました。大変なご迷惑をおかけしたとは思いますが、温かく受け入れてくださり、心から感謝しております。話を聞いているだけではわからない細かいところや、具体的な様子を実際に見ることで、発見できたことが多くありました。この度、無事に調査を終えることができたのは、八艘張網漁関係者のみなさまのご協力があってのことだと思っています。この場を借りて皆様に心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

金子利生・木津庸之ほか、2003 年、「生業と社会関係」、竹内潔・都留泰作編『海と山の文化誌――富山県氷見市と利賀村の生活文化の研究』、富山大学人文学部文化人類学研究室、pp.13-39
氷見市史編さん委員会、2000 年、『氷見市史 6』、氷見市

6.　山間地帯での農業形態について――一刎地区の事例から

木村　綾

はじめに

私が一刎の農業に関心をもったのは、その地形のためである。私の出身地、石川県金沢市の鞍月地区では、小学校の授業の一環として稲作を体験する学習を行っていたのだが、そこで私が経験したのは、平地における稲作であった。それに対して、山の中にある一刎では、傾斜のきつい土地に切り開かれた田んぼや畑で農業を営んでいた。これだけ異なる（そして、おそらく厳しい）自然環境の中では、どのように農業が営まれているのか。これが調査をはじめるにあたって抱いた疑問である。本章では、一刎における農業についての調査結果を記述し、山村での農業の経営状況について考察することを目的とする。

1.　調査方法

調査方法は主に聞き取りである。2013 年 9 月 14 日～20 日に行った合宿期間を中心に、5 月から 10 月にかけて合計 17 日間の調査を行った。聞き取り調査は 60 年代以上の方が中心で、今でも畑作や稲作を営んでいる方、及びかつて農業を営んでいた方を対象に行った。一刎の農家の戸数や統計などに関しては、氷見市史編集委員会編集の『氷見市史』、奥村秀雄著の『碁石の歩み』などの文献、それに北陸農政局富山統計事務所編集の『農業センサス富山県累計統計書』などといった資料を用いた調査を行った。

2.　一刎の稲作の過去と現在

2-1.　一刎の農地

海抜 200～250 メートルの山間地に位置する一刎の田畑は、傾斜のきついところにあるものがほとんどである。そのため、圃場整備の進んだ平地の田畑と比べると、形が歪で、面積も狭いものが多い。氷見市街地に比べて、気温が 2 度から 3 度低いだけでなく、「土も痩せている」（80 代女性）とも言われ、農業にはあまり適さない土地だとされている。一刎は農村地帯であるが、河川が流れておらず水量が限られているため、干ばつが心配される土地である。そのため稲作の主な水源は溜池である。稲の収穫量は水量と天候で決まると言っても過言ではなく、個人のものと共同のものを合わせると、一刎には溜池が 18 ほど存在する。

また、富山県の農業センサスと『碁石の歩み』によると、碁石地区における耕地面積の推移は表 1 の通りである。碁石地区とはかつての碁石村のことである。碁石村は 1989 年の 4 月 1 日に射水郡の味川村、上余川村、一刎村、吉懸村、懸札村、寺尾村が合併したものである（一刎だけの資料がないため、今回は碁石地区全体の資料を使用する）。ここからもわかる通り、田んぼや畑の面積は近年急激に小さくなっている。

写真 1.　一刎の田んぼ（著者撮影）

表 1.　碁石地区の耕地面積

	1908 年	1950 年	1985 年	1995 年
田	約 20,866a	約 25,655a	約 16,600a	約 11,800a
畑	約 17,789a	約 17,483a	約 1,900a	約 1,100a

単位（a＝平方メートル）

2-2.　昔と今の農業の変遷

田畑の面積が狭い一刎は、少なくとも大正時代から、出稼ぎや内職が盛んであった。稲作の際に収穫した藁でむしろを作ってそれを売却するという内職や、土木関係、山切りという出稼ぎの仕事をしていたようだ。他にも家畜の糞を稲作の肥料として売却するなどして生計を立てていた。他には、畦塗りの仕事をお金を貰って代理で行う人もいれば、なかには秋に一刎に自生している栗を採集し、一刎の外で売っていたという人もいるようだ（畦塗りについては次の節で説明する）。

現在も農業だけで生計を立てられる人はほとんどいない。現在は、出稼ぎという形ではないが、氷見市の市街地や高岡などで仕事をし、稼いだお金や退職金を使って、退職後に趣味や親の後継ぎで農業を行う人がほとんどである。

現在稲作を行っている世帯は少なく、自分の家庭で消費するためだけに稲作を行っている世帯は 30 戸、少しでも農協などに出荷している世帯は 10 戸ほどである。富山県の農業センサスによると、一刎の農家の戸数は、昭和 55 年の 121 戸から平成 2 年の 101 戸へと、急激に減少していることがわかる。ここまで一刎の稲作が衰退したのは、以下の理由が考えられる。

(1)　戦前は手作業中心の稲作だったが、戦後急激に機械化が進んだ結果、零細農家が多い一刎の農業全体が衰退した

(2)　地形の関係で耕地整理事業の全面的導入が難しく、そのため田の畦作り、水の供給、肥料や収穫物の運搬作業などに平地よりも多くの労力がかかって効率が悪く、さらに地形の関係で機械の導入が厳しいところは休耕地となり、田んぼが荒れた

(3)　高齢化

まず（1）の、昔の稲作と現在の稲作の変化を見ていきたい。表 2 は、『氷見市史』を参考にして、過去（機械化以前）の農作業の手順と、現在のそれを比較したものである。かつては、株分け、田植え、稲入れなどは一家総出で行うほど人手が必要だった。また、人手だけでなく、牛や馬を用いて田畑や畦道を踏み固めたり、収穫物を運ばせたりするなど、家畜を利用した農家が大半であった。だが、現在はほとんど機械で賄えるため、人手もほぼ不要になった。

表 2.　過去の農作業と現在の農作業の比較（－は現在行われていない手順）

	かつての手順	現在の手順
種籾浸し	前年の稲穂から種籾にする籾を厳選し、3 月に種籾を俵に入れたまま小さな溜池に浸す。	育苗箱に稲の種・種籾をまき、育苗器で発芽させ、その後ビニールハウスに移してある程度まで大きく育てる。
株かけ	鎌で稲を一株一株切り割る。	—
田おこし	鋤で田の土をたたき起こす。一度だけでなく二度か三度ほど行う。	トラクターで、田の土を砕いて緑肥などを鋤き込む
苗代作り	日あたりがよく、用水に便利で運搬や管理のしやすい道路ぶちなどで、種籾を大きくなるまで育てる。	—
畦塗り	前年に作った畦を壊し、鍬でもぐらの穴を塞ぎ、数日乾かしてから泥を塗り重ね、水漏れしないようにする。	—

代かき	圃場に水を入れさらに細かく砕き田植えに備える。	田に水を入れ、トラクターでさらに細かく砕き、田植えに備える。
田植え	苗代にてある程度育った稲を本田(圃場）に移植する	育った苗を、田植え機（手押し又は乗用）で、本田に移植する。
稲架づくり	栗やクヌギの丸太を使用し、竹や縄で組み立てる。(9 月上旬)	—
稲刈り	稲が実ったら刈り取る。朝早いうちから一家総出で行い、鎌で刈り取る。	稲が実ったら稲刈りと脱穀を同時に行うコンバインで刈り取る。
稲かけ	稲架で天日干しにし、乾燥させる。(一週間ほど)	通風型の乾燥機で乾燥する。
稲入れ	乾燥したかどうかを、稲を口に入れて判断し、稲を縄でまとめて運ぶ。	—
籾摺り	藤籠という道具を使用し籾と藁を分離し、土臼で籾殻と米をわける。	籾摺り機で籾すりを行う。
俵詰め	米を選りすぐり、俵に詰める。	—

機械の導入数についての碁石全体の統計は表 3-1 および表 3-2 の通りである。農家の戸数自体が減少しているので少しわかりづらいが、機械を導入した農家の割合は確実に増加している。

表 3-1.　碁石地区全体の個人所有台数

	動力耕運機、農用トラクター	動力田植機	バインダー	自脱型コンバイン	米麦用乾燥機
1985 年	320 台 (324戸中292戸)	86 台	153 台	88 台	153 台
1995 年	290 台 (227戸中235戸)	151 台	85 台	132 台	139 台

表 3-2.　碁石地区全体の数戸共有台数

	動力耕運機、農用トラクター	動力田植機	バインダー	自脱型コンバイン	米麦用乾燥機
1985 年	3 台	6 台	1 台	1 台	1 台
1995 年	14 台	6 台	1 台	5 台	1 台

他方で、ほんのわずかだが、昔ながらの稲作が生き残っていると思われるふしもある。たとえば、「農協に出荷する分は全て機械で乾燥させているが、自分で食べる分や近所に配る分は、稲架掛けで乾燥させた美味しいお米を食べている」（60 代女性）という方がおられた。（稲架掛けについては写真 2 を参照）しかし、機械を各農家に導入するにしても、最低 500 万円ほどかかると言われている。そのため、「採算がとれないし儲からない」（70 代男性）のが普通である。ある男性（60 代男性）は、あまりに農業機械にお金がかかるので「稲作を始めてから 5 年で退職金が全部なくなった」と語った。これは、一刎での稲作における最も重要な問題となっている。

次に（2）についてである。戦後から、一刎は先ほども述べたように山村地帯であり、整備をしにくいため、田んぼの大きさや形がさまざまである。そうした理由もあってか、戦後から昭和 50 年代にかけて、富山県のあちこちで農道整備や溜池の改良が行われた中で、一刎のような山村地帯の整備は実現しなかった。整備が他より遅れたために、次第に住民の営農意欲が低下し、さらに稲作の効率も低下していった。

そして最後の（3）の高齢化についてである。一刎は、人口 252 人中 112 人（約 4 割）が 65 歳以上の、超高齢化社会の集落である。そのため、一刎では高齢化に伴って稲作ができなくなっており、「年をとって体が動かなくなり不自由になってしまったから、もう農作業はできない」（80 代男性）といった語りが多かった。他方で、これらの方々の話しぶりからは、稲作をやめることに対する「未練」や「寂しさ」というものは感じられなかった。

しかし、一刎の農業は衰退しつつあるなかでも、その農業を引き継いでいる人や、外部から手伝いに来ている人もいる。たとえば、「両親が一刎に住んでおり、親の顔を見るために週末だけ高岡から一刎に来て手伝っている」（60 代男性）とか、「定年退職してから一刎に戻ってきて農作業を行っている人がいる」（女性）という声が聞かれた。

写真 2.　一刎にあった稲架

3.　一刎の畑作の状況

聞き取り調査によると、一刎でよく作られている作物はなす、ピーマン、トマト、ねぎ、かぼちゃ、ニラ、じゃがいも、すいか、さつまいも、里芋、とうもろこし、大根、いちじく、かぶ、白菜など多種多様である。筆者が調査中に見聞きした限りでは、一刎では畑作は個人の趣味で行っている人が大半であり、面積もそれほど広くない。収穫した作物は親戚や近所の人に譲ったり、その家庭で消費したりしており、出荷して売り物にすることはほぼない。

また、「昔は田んぼの畦道で黒豆を作っていたが、稲作用の機械を入れるために畦道を通るため、黒豆を畑で作ることになった」（80 代女性）というように、稲作の機械化による影響を受けている作物もある。

また、一刎では、水田転作作物としてハトムギを栽培している（ハトムギは写真 3 を参照）。ハトムギは、高温や乾燥などの不良環境下だけでなく、湿潤条件下でも栽培が可能な作物である。そのため、農協は氷見の農村地帯の、放置された田畑を借り、そこでハトムギの栽培を行っている。一刎もその一部である。農協はハトムギ栽培用の機械を購入し、借りた土地で種まき、収穫を行う。その土地を貸した農家では、栽培期間中に雑草を抜くなどの手入れを行う。ハトムギ栽培では、作業のほとんどを農協が行うため、農家の人々の負担は非常に少ない。かつ、国からの助成金が出るため、「稲作よりもハトムギの方が儲かる」（80 代女性）といった語りも伺えた。

氷見市でハトムギの栽培が始まったのは昭和 60 年である。当時は米余りで転作が必要となったために、標高 160 メートルの山間部の細越（ほそごえ）地区で栽培が始まった。細越地区の住民は、ハトムギ栽培の先進地である広島県と岡山県を視察ししたうえで、地区全体で取り組みはじめた。当初は育て方がわからず収量が少なかったため、他地区にはなかなか広がらなかった。しかし県や氷見市と提携し、栽培の普及に取り掛かった。その後さまざまな地域にハトムギ栽培が広がり、今では全国のハトムギ生産量の 11 パーセントを氷見市が占めている。しかし、このハトムギ栽培にも課題は多いようで、「今のハトムギは実が成る時期がバラバラで収穫しづらい。品種改良をして、実が成る時期が全部一緒になれば収穫しやすくなって生産量もあがるのではないか」（80 代男性）という声が上がっている。

氷見市と一刎の、平成 25 年度のハトムギ栽培の耕地面積と収穫量は表 4 の通りである。

写真 3.　ハトムギ

（ウェブサイト「元気な農林業の実現と魅力ある農山村創造をめざす水農里木（みのりぎ）プラン
～平成２１年度地域農林業振興計画（概要版）～」より）

表 4.　氷見市全体と一刎地区のハトムギの耕地面積と収穫量

	氷見市	一刎地区
耕地面積	5870a	379.4a
収穫量	66.2t	4.48t
収穫量の割合	100%	約 6.7%

4.　害獣や天候による被害について

4-1.　害獣被害

近年、一刎ではイノシシ、熊、ハクビシンなどといった害獣による農作物の被害が多く発生し、農作物に影響を与えている。被害が生じる主な農作物はイネをはじめとした穀類、サツマイモなどの根菜類、キャベツなどの葉菜類、トマトなど果菜類など多岐にわたり、また、栽培作物ではないがタケノコの被害も大きい。被害をさらに大きくしているのは、水田中でのヌタ打ちによるイネの押し倒しやイモ類の掘り起こしである。ヌタ打ちというのは、動物が体に付着したダニなど寄生虫を落としたり、体温調節のために泥につかり、転げまわる行為のことを言う。

イノシシは本来森の奥深くに生息する動物ではなく、人里の近くの、いわゆる里山に生息している。かつては農業が盛んだったためイノシシは森の奥深くに追いやられ、少数で

生息していたとされている。しかし、近年は農業が衰退し、かつて田畑だった場所には竹林や藪が広がるようになり、さらに人々の手入れが行き届かなくなり、山が荒れるようになった。このような場所はイノシシにとって格好の餌場、住処、繁殖の場となり、頭数も増加し、被害が及ぶようになった。「自分の畑のさつまいもを掘ろうとしたら、食べられる部分だけなくなっていた」(70 代女性)、「イノシシが田んぼで走り回ったから、稲が倒れてだめになった」(80 代女性)という声がよく聞かれた。また、被害には作物を食べられてしまうというもの以外にも存在し、「イノシシの糞のせいで食べ物も臭くなって出荷できなくなった」(70 代女性)という語りも多い。

この害獣被害の対策として、氷見市が農家に電気網を補助しており、各農家の田んぼや畑に張られているのが見かけられる。その他に、空気銃を用いる人もいるようだが、こちらは電気網ほどの効果は得られないようだ。このように様々な対策をとっているが、イノシシは運動能力や学習能力が高いうえに、繁殖力も高い(年に一度 4 頭から 5 頭ものこどもを産む)ため、今のところ被害は増える一方である。

4-2. 天候被害

近年では、CO2 の増加による温暖化や、それにより引き起こされる台風や大雨、気温の上昇といった異常気象がメディアでもしばしば取り上げられているが、それは農業にも深刻な影響を与えている。聞き取り調査によると、天候による被害として、台風や気温の上昇をあげる人が多かった。

まず、台風による被害をあげると、稲の茎葉の裂傷、籾ずれ、倒状がある。茎葉の烈傷とは、でんぷんの同化能力を低下させ、発育不全やくず米の増加により収量、品質の低下を引き起こすことである。また、籾ずれは、傷口等からの病菌の侵入により、発育・成熟がうまくいかず、米の品質低下を招くことをいう。さらに倒伏によって、穂発芽という収穫前の穂から新しく芽が出てしまう現象や、発育・成熟の阻害を引き起こし、収量や品質の低下を招く。また、最悪の場合、開花から 40～50 日間の登熟期中期以降の時期に、管理が不適切な場合、急性萎凋の症状(作物が急激な脱水症状を起こし、作物が萎れる症状)が発生し、枯死に至る場合もある。

次に夏の気温の上昇による被害について見ていきたい。気温が上昇しすぎると田んぼの水温が上昇し、その結果稲の茎葉が茂りすぎて稲の呼吸作用と蒸散量が増加し、豊熟阻害が発生して籾が成熟しなくなってしまう。そしてくず米が増加し、品質や収穫量が減少する。

5.　まとめと考察

一刎の農業は元々地形の関係によって規模が小さかったが、それに加えて近年の農業は機械化、高齢化、天候や害獣による被害といったさまざまな要因が重なり衰退の傾向がある。一刎の住民にとって稲作や畑作はもはや稼ぐための手段とは成り得ない。一刎の人々にとって農業とは収入源ではなく、老後の生活に潤いを与えるための趣味のようなものであると言えると思う。

また、一刎で農業を続けていくには、土地と水源の整備や、害獣対策の補助など、行政が農業をもっとサポートしていくべきだと思う。これは一刎だけではなく、現在の日本の農業全体に言えることであると思う。しかし、2013 年に日本が環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）に参加することが決定したことで、一刎の農業は今後さらに厳しくなってくると思われる。日本政府は今後の農業のあり方を見据え、零細農家を支えてきたという減反政策を廃止し、農業の大規模化を促進する方向を打ち出した。具体的には戸別所得補償制度で減反した農家に一律で出ている 10a15,000 円の補助金を段階的に削減し、補助金の支給対象を大規模農家に絞ったりすることなどが検討されている。もしこの方針がこのまま変わらないとしたら、零細農家ばかりの一刎で、今のように農業を続けていくことは、今後は難しくなってくると思われる。このままだと、一刎の農業はさらに衰退していくことが予想できる。

しかし、そうした環境の中でも、これからも農業を続けたい方、親の農業を継ぐ方、一刎に住む親族の農業を手伝うために週末だけ一刎を訪れる方などの支えがあって、現在の一刎の農業、そして生活が存在しているのだと私は感じた。そして一刎の農業が衰退しないようにするためには、稲作用機械などをいくつかの農家で共同購入したり、農作業ができなくなった人の代わりに作業を行うなど、一刎の農家同士が協力していく必要性があると感じた。

謝辞

調査にご協力いただいた一刎の皆様、農協の皆様のご協力のおかげで執筆することができました。本当にありがとうございました。

参考文献

奥村秀雄、1993 年、『碁石の歩み』、個人出版

農林水産省経済局統計情報部、1985 年、『1985 年農業センサス第 1 巻　都道府県別統計書　16 富山県』、農林統計協会

農林水産省経済局統計情報部、1995 年、『1995 年農業センサス第 1 巻　都道府県別統計書　16 富山県』、農林統計協会
氷見市史編集委員会、1963 年、「旧町村の全貌　碁石村」「近世」『氷見市史』、pp.373-377、968-1010、氷見市
氷見百年史編集委員会、1972 年、「農業」『氷見百年史』、pp.355-447、氷見市
北陸農政局富山統計情報事務所、1993 年、『農業センサス富山県累年統計書（昭和 35 年～平成 2 年』

参考にしたウェブサイト

「気象庁 HP」
（http://www.jma.goj.jp/ma/index.html；2013 年 12 月 11 日参照）
「氷見はとむぎ物語」
（http://www.ehatomugi.com/index.html；2013 年 12 月 26 日参照）

7.　氷見祇園祭

趙　力鳴

はじめに

筆者の出身は中国の遼寧省瀋陽市である。遼寧省は中国の東北地方に位置し、昔から様々な古い文化を継承してきた。しかし、近代化及び工業化の進展とともに、古くから伝承されてきた伝統が消えつつある。子供の頃には、賑やかだった瀋陽市の祭りを見に行ったことも多かったが、この 10 年ほどの間に、瀋陽市で祭りは行われなくなった。私の周囲の人々は祭りがなくなったことを気にしたり、理由を話し合ったりするわけではなかったし、私自身もその 1 人だった。ところが、日本に住み始めてから、日本の祭りが現在も存続するのを目の当たりにした。そこで私は、なぜ中国にあった私の故郷の祭りは消えてしまったのに、日本の祭りは古くから存続しているのか、地域の人々やそれを見に来る人々にとって、祭りはどのような意味を持っているのかについて、研究したくなった。

数ある氷見の祭りの中から、私が選んだのは祇園祭である。なぜなら、氷見祇園祭は 300 年以上の歴史を持つ上に、氷見地域において最も規模の大きな祭りだからである。

1.　調査地概要

筆者が調査したのは、祇園祭を行っている「北六町」と呼ばれる地区の中の「湊町」である。湊川以北に位置する湊町は、現在の国道 415 号を挟んで東側の海岸までの地域であるが、昭和 29 年（1954）に比美町の一部となって以降は、登記される地名としては消滅している。しかし、市街地に住む人々の間ではいまだに生きた地名であり、祇園祭を担う北六町の一町としても使用されつづけている。平成 15 年（2003）に出版された『氷見市史 5』によると、明治 2 年（1869）までは、仏生寺川、神代川、十二町潟の水はすべてこの湊川へ流入し、湊町の河口は良港として栄えた。昭和 3 年（1928）に上庄川河口の新港が修築されたため、湊川の港は廃港となった。現在、比美町の一部となった湊町の人口についての統計データは収集されてないが、地元の人の話によると、70 軒ほどが残されている。

2.　祇園祭の概要

2-1.　祇園祭の由来

氷見祇園祭とは、毎年 7 月 13 日から 15 日の 3 日間をかけて、氷見市街地の御座町（現

南大町）日吉神社と中町（現中央町）日宮神社の、各々の神社に相殿とされている八坂神社の例大祭である。祇園祭の由来は様々な説があるが、日吉神社には、伝承にもとづく、次のような記録がある。（以下は日吉神社の宮司がまとめたものである。）

元禄 9 年（1696 年）の初夏の頃である。上庄川と仏生寺川が合流する交易地の港川の上流、御座町の朝日小路から「三日ころり」と言って、今でいう「赤痢」に似た熱病が発生した。この病気は、高熱が続いて熱い、熱いと苦しんでいるかと思えば、次は悪寒が続いて寒い、寒いと苦しみもだえながら、3 日から 1 週間くらい苦しみもだえて、ついには死んでしまうという恐ろしい流行病だった。食物の腐りやすい季節であったことや、交易品の中に病原菌に汚染されたものがあったことが原因と考えられる。これが氷見町一帯に流行し、人々を苦しめた。

御座町の朝日小路にいた久津呂屋喜太郎という人も、この「三日ころり」にかかり、明日をも知れぬ身体となったので、京都の八坂神社（祇園社）に行儀見習いに出ていた娘に知らせを送った。驚いた娘は父のことを八坂神社の宮司に話をし、家へ帰ることを願い出た。宮司は、この八坂神社の神様は須佐之男尊といい、「病気」、特に恐ろしい流行病から人々を守ってくださる神様なので、家に帰ったら、病気が治るよう心を込めてお願いしなさいと、八坂神社の分霊を娘に託した。帰った娘は床の間に祭壇をしつらえ、一心にお祈りしたところ、父をはじめ、御座町や広く氷見町に荒れ狂っていた「三日ころり」が、7 月 13 日から 15 日頃にかけて治まった。そこで、御座町の人々は八坂神社（祇園社）の神様に感謝し、久津呂屋で 7 月 13 日と 14 日に祭りをすることになったが、久津呂屋は八坂神社の神様を自宅に預かるのがもったいないと、御座町の「手向神社」へ移り、そこで祭りをするようになった。

この噂が広がり、御座町の手向神社（相殿八坂神社）の祭りは、南町、そして北町へ広まって行った。霊験に感謝した久津呂屋喜太郎は御座町の人々に相談し、祇園の神様を氷見町の全体鎮守である日吉神社に移した。そうして、祇園の神様を日吉神社の神様として神輿に乗せ、13 日は御座町、14 日は南町、15 日は北町で、家々を巡行する祭りが盛んになった。町の戸数が増えるに伴い、北町の「日宮神社」にも祇園の神様を勧請し、現在の祇園祭の姿になった。

2-2. 曳山とタテモンについて

祇園祭は、氷見市において規模の最も大きな祭りである。南十町と北六町別々に行われるが、それぞれの特徴を持つ。氷見大火の前の南十町は、毎年各町ずつ 10 基を出したが、氷見大火の時に 5 基が焼失したため、現在、5 基の曳山を出している。北六町の場合は「タテモン」を出したが、現代に入ると、電線や電話線の影響で出さなくなり、かわりに太鼓台だけが引き廻されるようになった。

氷見の太鼓台は小さな地山の上に松の木を立て、その上に提灯が飾られる。太鼓台の前方に鳥居、鳥居の上には行燈を立て、その下に太鼓台をのせる。地元の人々に「タイコンダイ」だと呼ばれる。祭りの本祭の時、太鼓台の突き合せがあり、遠方からの見物客も多い。

2-3. 南十町の曳山

南町にはもともと 10 基の曳山があったが、明治 15 年と昭和 13 年の氷見大火で、焼失ないし類焼するという、大きなダメージを受けた。現在まで残っているか再建されたのは、10 基のうちの 5 基のみである。現存する 5 基の曳山は、いずれも上山と下山の二層構造で、地車に鉾柱を立て、花傘をつけた花鉾山曳である。鉾柱の先に鉾留がついており、本座といわれる神体と前立人形と脇立人形が供えられている。以下では、現存している 5 基の各町の曳山と太鼓台について、『氷見の曳山人形展　特別展』（氷見市立博物館著、1988 年）の記述にもとづいて紹介する。

御座町

御座町の曳山は、現役の曳山の中では最も古いとされている。鉾留は梅鉢付き梅枝で、本座人形は布袋であり、本座人形についている前立人形は笛吹き唐子童子と太鼓打ち唐子童子である。本座人形の頭部と胴体部は大正元年に新調され、衣装は大正 4 年に作られたものである。二体の前立人形は昭和 42 年に東砺波郡井波町で塗替修繕され、衣装もその時に新調された。もとは花笠が掛けられていたが、昭和 57，8 年ごろに、掛けられなくなった。

南上町

南上町の曳山は明治 15 年の大火で類焼されたが、明治 36 年に、町内共有の土地などを売却し、再興されている。ただし、左後輪に「明治二十六年　高岡職工　越前吉五郎」と記されているところをみると、曳山の全体が同じ時期に作られたものではないか、完成するまでに 10 年前後かかったと考えられる。鉾留は胡蝶で、本座人形は尭帝である。前立人形は石橋唐子童子となる。

南中町

南中町の曳山は、氷見大火で焼失したあと、昭和 51 年に再興された。大火では、曳山の本体は全焼したが、本座人形や脇立人形の頭部などは残った。千成瓢箪が鉾留として、本座人形は孔子、脇立人形は顔子と曾子である。焼失した本座人形と脇立人形の胴体部と衣装は、昭和 45 年に井波町で彫刻されたもので、それに氷見本川町の職人によって彩色が施

されている。

地蔵町

地蔵町の曳山の本座人形は福禄寿であり、前立人形には操作可能な太鼓打ちの猿がおいてある。この猿の人形には本物の猿の毛皮を使っている。かつては太鼓と鶏が鉾留としてあったが、現在は取り付けられていない。また鉾留の心柱も切り下げられたらしい。しかし、大きな修繕を行われたことのない上山の部分は、江戸時代にまでさかのぼるものと思われる。

上伊勢町

上伊勢町の曳山も明治 15 年の大火で焼失したが、明治 33 年に、本座人形と前立人形とともに、再興されたものである。鉾留は千枚分銅に打出の小槌で、本座人形は大黒である。前立人形は操作のできる神楽鈴を持った稚児だが、古くからある前立人形ではなく、途中で代替わりしたものらしい。本座人形大黒と前立人形の頭部は明治 33 年に作られ、同年、本座人形と前立人形の衣装を新調した。

表 1.　現存する 5 基の曳山の特徴

	御座町	南上町	南中町	地蔵町	上伊勢町
鉾留（ダシ）	枝付き梅鉢	胡蝶	千成瓢箪	太鼓と鶏	千枚分銅に打出の小槌
本座人形	布袋	堯帝	孔子	福禄寿	大黒
脇立・前立人形	笛吹き唐子童子と太鼓打ち唐子童子	石橋唐子童子	顔子・曽子両手に獅子頭を持つ唐子童子	太鼓打ちの猿	神楽鈴を持つ稚児

焼失した 5 基の曳山に関する資料はきわめて少なく、わからないなところが多いのだが、資料を参照すると、表 2 のような特徴を持っていたことがわかる。

表 2.　焼失した 5 基の曳山の特徴

	南下町	下伊勢町	川原町	仕切町	高砂町
鉾留（ダシ）	鶏	笹龍胆	菊花に五七桐	錫杖	梅花
本座人形	恵比須	源頼朝	関羽将軍	寿老人	菅原道真
脇立・前立人形	懸垂回転（でんぐるまい）唐子童子	梶原平三景時・御所五郎丸	懸垂回転（でんぐるまい）唐子人形	笛吹き唐子童子	なし

2-4.　北六町のタテモン

南十町の曳山に対し、北六町の祇園祭で引き回されていたのは、「タテモン」と呼ばれる、竹籠編みに紙を貼った巨大な人形である。タテモンの起源はさだかではないが、おそらく南十町に対抗するために作られたものと考えられる。タテモンの構造は、曳山の地車と同じようなものの上に心柱を立て、この心柱を心材にして、別々に作った胴体、両手足、頭部を組み合わせる、というものであった。狭い道を練り歩いたり障害物を回避できるように、心柱は回転式であった。

タテモンは、曳山のように長持ちするものではなかった。とはいえ、作るにはそれなりの費用と労働力が必要だったので、祇園祭のために毎年作られたわけではなかった。その年に曳き回すことが決定すると、準備や製作をはじめたのである。各町内でどんなタテモンを作って出すかも決まっていたわけではないので、大きさもまちまちであった。歴代で最も背の高いタテモンは、18 メートル以上もあったらしい。表 3 は、明治 21 年の祇園祭に北六町の全町が出したタテモンである。

表 3.　明治 21 年の祇園祭に引き回された、北六町のタテモン

地区	タテモンの人物
湊町	仁田四郎猪退治
北新町	浦島太郎
本川町	荒獅子男之介と仁木弾正
今町	鐘馗
中町	平将門
浜町	不明

当時の写真を見ると、いかにも堂々として人々の注目を集めたと思われるタテモンだが、電線や電話線が多くなった明治 40 年ごろから、高い鉾留を持つ曳山とタテモンを曳き回すことが困難となりはじめた。タテモンが最後に曳き回されたのは明治 41 年のことで、それ以降タテモンが作られることはなくなった。

3.　祭りの運営及び当日の流れ

北六町は、年中大祭に中祭と小祭をあわせると年間で 40 回ほど、その他の行事をあわせると 60 回ほどの祭りないし行事がある。祭りに加わるのは北六町だけではなく、神社があっても宮司がいない「八ヵ区」のすべて（六町に柿谷と熊無とあわせた 8 つの地区）も含

まれる。各町では、宮総代（任期は 3 年）を務める人を 3 人ずつ選ぶ。北六町の中で、毎年一町がその年の祭りの当番、通称「宮番」を務める。2013 年の年行司は本川町だが、来年は今町が担当する。つまり、どの町も 6 年に一回宮番を行う。祭りの際には、宮番の町の太鼓台が先頭を歩くが、これは「カミサマの露払い」の意味を持つ。

祇園祭が始まるのは 7 月 13 日（土）だが、この日、北六町では大祭式の準備と宵祭式だけが行われる。神社総代が、午前 10 時から、日宮神社で神輿の蔵出（くらだし）、飾り付け、シートかぶせなどの作業をする。各町内では、人々は自分たちの太鼓台を飾り付ける。17 時になると、大祭宵祭式が始まる。総代、各太鼓台関係者が日宮神社前に集まり、太鼓台を表 4 の順序で並べる。その年の「年行司」（宮番）を務める町を先頭に、次回、次々回に年行事になる町内が続く。今年の場合は、年行司の本川町が先頭になる。年行事は 2 年ごとに交代するのだが、今町が年行事になって先頭に来る年には、本川町が最後尾になる、という具合である。18 時から太鼓台の祝詞・お祓いを受け、玉串奉奠[1] は青年団長のみによって行われる。その後、18 時 25 分から、中町の太鼓台と新町の太鼓台を突き合せ、18 時 35 分に、宵祭式は終了し、解散となる。

表 4.　2013 年の太鼓台の順番（左から先頭に；南から北の順）

本川町	今町	中町	湊町	濱町	新町

翌日の 7 月 14 日（日）は祇園大祭の本祭である。神輿の巡行順路図とスケジュールは図 1 と表 5 の通りである。

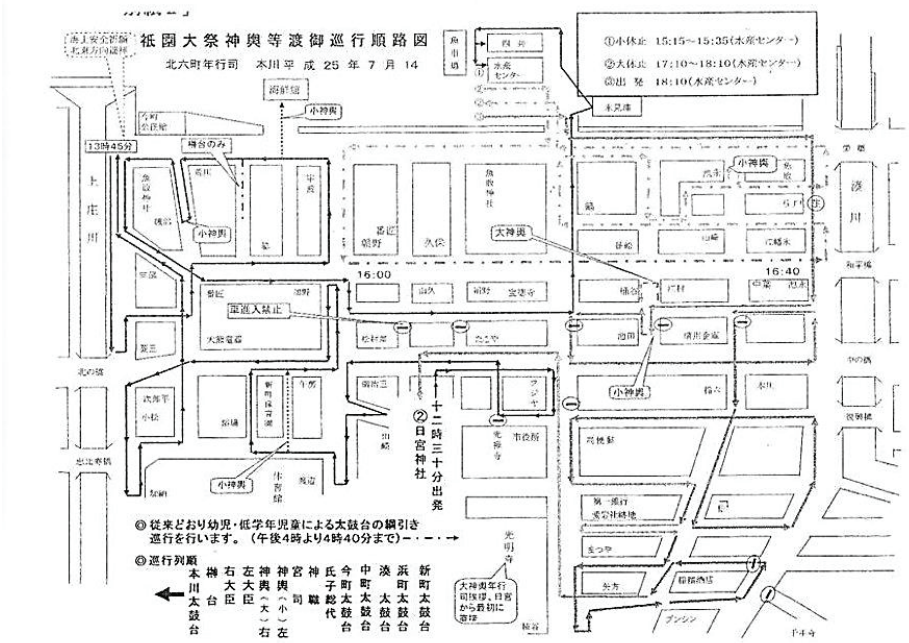


図 1.　祇園大祭神輿等渡御巡行順路図（地元の H 氏の提供）

表 5.　祇園大祭（本祭）のスケジュール

時間	場所	活動
10：00　～	日宮神社	祇園大祭式　玉串奉奠
12：00　～	日宮神社	祇園大祭関係者集合
12：30　～	日宮神社	巡行開始　北六町の町内に引き回し
15：15　～	水産センター	小休止
15：35　～	水産センター	巡行再開
16：00　～　16：40		幼児、低学年児童による太鼓台の綱引き巡行
17：10　～	水産センター	大休止
18：10　～	水産センター	巡行再開
19：00　～	ローソン前	太鼓台の突き合せ
19：20　～	北陸銀行前	太鼓台の突き合せ
19：40　～		低学年児童解散
20：00　～		太鼓台の突き合せ
21：00　～	日宮神社	本殿で還御幸式　太鼓台の突き合せ
21：15　～	各町町内	各町の太鼓台が自分の町内だけに引き回し
21：45　～		行燈、飾り等の取外し、その後、打ち上げ会

当日は多少のずれをのぞけば、ほぼ上の予定通りに進められた。この日、観光客の多くは太鼓台の突き合せを目当てに来る。20 時に突き合せが始まると、観光客と現地の住民、合わせて 600 人以上が集まった。彼らの中には中高年の人々もいれば、若者や子供もいた。

太鼓台の突き合せがいつ、どのように始まったかは明確でないが、突き合せにより、人々の間で 1 年の間に積もった誤解や不快などを解消するという意味合いもあるらしい。突き合せに参加するかどうかは自由で、その年ごとの各町内の人々と太鼓台関係者の考え次第である。最も人気があるのは還御式の後の突き合せで、単に太鼓台を突き合せるだけでなく、相手方の太鼓台に登って、行燈や（飾りの）松などを取る場面などはたいへんな見所である。この突き合せのために、還御式後の突き合せに参加する町内の人々は、17 時 10 分から始まる大休止の間に、太鼓台の飾りの松を大きな松とつけ替える。突き合せの直前になると、相手の太鼓台に移りやすいようにと、4，5 人の若者が自分の町内の太鼓台に登る。いざ突き合せが始まる、という段になると、下にいる若者が太鼓台を大きく左右に振りながら、「いやさ（か）、いやさ（か）」という掛け声を叫びはじめ、数十メートル離れた距離からたいへんなスピードで走り、その勢いで相手と突き合せる。その後、事前に太鼓

台の上に登っていた若者が相手の太鼓台に飛び、飾り物を取る。この突き合せは、最終的にどちらかが勝ってもう一方が負けるというものではなく、大祭の責任者が終了の合図を出して、終了する。

写真 1.　太鼓台の突き合せる瞬間（左）

写真 2.　老若男女が突き合せの様子を見ようと集まる（右）

本祭の翌日の 7 月 15 日（月）は、祇園大祭の後日祭である。特に神輿や太鼓台を出す日ではなく、主に日宮神社と太鼓台の片づけ作業が行われる。参加するのは神社総代、青年団と祭りの会である。

4.　祭り運営のための工夫について

祭りの運営には、多くの苦労と手間がかかるが、少子高齢化が進む湊町でも、祭りの運営と存続には様々な困難がつきまとう。多くの地区では、青年団を中心とする若い世代の人出が足りず、青年団 OB や祭りの保存会の人々が祭り運営を担っている。ただし、獅子舞などと比べると、練習以外にそれほど時間と負担がかからない祇園祭は若い人が手伝いやすいという性格を持つ。湊町の場合は準備やその他で青年団の OB が手伝っているが、現役の青年団が中心になって祭りを運営している町も少なからずある。

とはいえ、若者が足りないことは事実であり、多くの人がそのための工夫をこらしている。例えば、かつての青年団の年齢は 18 歳から 30 歳くらいだったが、今は事実上年齢制限をもうけていないところがほとんどである（ただし、団長は今でも 25 歳くらいの人を、1 年の任期で選ぶ）。それでも、世帯数の少ない町では青年団員はそれぞれ 6 人いるかいないかの状態で、祭りには助っ人として友達を連れてくる。結果として、祭りの運営では他地域の人の力が欠かせない。

祭りに参加する若者を確保するために、様々な工夫がなされている。例えば、商店街の

H氏によると、小学生以上で祇園祭や獅子舞（唐島祭り）に参加する子供には、日当を支払う。さらに、大学に通うために遠方に住む学生ともなると、祭り当日に氷見に帰省するための交通費や謝金を払うのだという。こうすることで、本人だけでなく、たまに子供の顔を見たいと思っている親にとっても、祭りのことを好意的に受け取ってもらえるというメリットがある。H氏によると、小学生から高校生まで、毎年祭りに参加して日当を受け取ると、祭りの担い手1人当たりかかる金額は10万円をゆうに超える。このお金は獅子舞の祝儀や町費から捻出される。大人たちからすれば、これだけ優遇したからには、「祭りには帰ってくるのが当たり前」という考え方になってほしいところであろう。

それに加えて欠かせないのは、町内の子供や若者に、自分がいないと祭りも獅子舞もやって行けないという考えを、なるべく早い時期からわかってもらうことである。そのためには、例えば「おれが長だった時に、あいつに助けてもらったから、あいつが団長の時は助けてやらないと」というふうに、祭りの中で学生や若者同士の人間関係が醸成されてゆくことが重要であり、そのためには、子供たちの間で「先輩・後輩」などの関係が必要になる。

5. 祇園祭の衰退とそれに対する人々の考え

5-1. 祇園祭の衰退

色々な世代の人に話を聞くことで、長年にわたって、祭りが大きく変化してきたことがわかった。なかでも、北六町のタテモンが出されなくなったことと、氷見大火によって南十一町の曳山が焼失したことは、最大の変化である。しかし、ごく近年の間でも、祭りの雰囲気は随分変わったらしいことがうかがえる。比美町に住む、ある80代の女性は「昔の祭りはもっと賑やかで、人ももっとヤンチャだった。あのケンカを一回見たら、一生忘れられない」と語った。近年では、安全を確保するために、警察によってケンカの規模や回数が制限されているのであるである。

祭り自体の活気が失われるとともに、観光客も年々減っている。この原因は、大きく二つあると考えられる。ひとつめは、先でも言及した少子高齢化の問題である。担い手が高齢になり、若者が参加しなくなれば、祭りの活性化も失われ、規模が縮小する。そうなると、観光客もより大きな規模の祭り、例えば城端曳山祭りや高岡御車山祭り、新湊曳山祭りを見に行くようになるのである。湊町に住む20代男性の話によると、彼の子供の頃には、祭りを見に来る人の数がいまよりずっと多く、人々の肩と肩がぶつかるほどであった。それが、この5、6年ほどの間にすっかり減ってしまったのだという。ふたつ目の原因は、駐車場の少なさである。氷見市街地にある駐車場の大半は、店舗や銀行の敷地なので、外から祭りを見に来た観光客は車を止める場所がないのである。氷見のように、電車やバスの

便が必ずしも良くないところで自家用車を駐車することが難しければ、観光客が減少するのはいわば当然のことである。

かつては山間部の人々も祇園祭を見に来ていたという、比見町に嫁入りしてきた 70 代の女性は、「子供の頃、ほぼ毎年、祇園祭のために 2 時間ほど友達と歩いて（祭りを）見に来た」のだと話した。氷見市全域でそれほど大きな祭りやイベントがなく、祇園祭以外の楽しみといえば、各地区の獅子舞だけであった頃のことであるという。

しかし、現在では祇園祭を見るためにやってくる、氷見市山間部の人々は少なくなっている。これには、自動車の普及も大きく影響している。60 代の男性の話によると、この 10 年ほど祇園祭を見に来なくなったかわりに、高岡や新湊の祭りを見に行くようになったのだという。彼が若い頃、交通が不便だったため、その辺りにまで祭りを見に行くためだけに足を運ぶことは、難しかったのである。

5-2.　少子高齢化が祭りにもたらした影響

祭りを存続させるために最も重要なのは、担い手の存在である。その意味で、少子高齢化が祭りにもたらす影響は、たいへんに大きい。湊町に住む 30 代の男性によると、彼が中学生だった頃には町内に 15 人の同級生がいたというが、現在、湊町に中学生は 1 人しかいない。そこで各町では、それぞれに工夫をこらして担い手を確保するための努力をして、祭りを存続させている。例えば、財政的に余裕のある町内では、外から人を雇って、神輿担ぎと太鼓台を押す役を担当してもらっている。ただし、曳山だけは必ず町内の人々が担当する。少子高齢化という根本的な社会問題を解決することは、町の人々にはできないが、こうした工夫によって祭りの担い手の問題を何とか克服しているのである。

5-3.　祭りと子供

祭りの将来の担い手として、子供ほど重要な存在はないだろう。ある地元の中学生は、「自分たちの祭りだから、しっかりしてほしい。これからもずっとやっていけたらいいな」と語った。また別の湊町の 2 人の小学生は、太鼓台だけを引き廻すのはつまらないが、ケンカは「一番カッコいい」と話す。自分たちも大人になったら、一度やってみたいと思っているのだという。

しかし、すべての子供たちがそのように考えられる環境にあるわけではない。例えば、子供の頃に祭りのために青年団に入ったことのない、地元出身の 30 代の男性は、当時も今も祭りに参加することはないし、祇園祭に関しても詳しくはない。時間がある年には 3 人の子供を連れてくるが、自分の子供を町内の青年団に入らせるつもりもないのだという。その他にも、似たような境遇にあるためか、青年団に入ることを考えたこともない地元の中学生もいた。彼らは、毎年祇園祭を見に来るのだが、あたかも観光客がそうするかのよ

うに祭りを楽しむ。

祭りを身近なものとして経験したことのある子供たちの言葉からは、祭りに対する彼らの愛着がよくわかる。それだけに、祭りを自分たちのものとして感じられない子供たちをうまく祭りにかかわらせることの必要性を感じた。

6. まとめと考察

氷見市の祇園祭は昔から人々に親しまれる大祭であり、今でも氷見市にとって最も重要な文化的な財産だと考えられる。少子高齢化のような深刻な社会問題のもとで、祭りを存続させるのは大きな課題だが、現地の人々はその問題を解決するために努力している。今後は、各町内の間の連携をより強くするなどの工夫も必要となるだろう。また、祭りがもたらす地域の活性化や経済的な好影響を考慮すると、祭りの存続にかかわる問題の解決のために、行政の力が注がれることも必要であろう。

祭りを実施することは、地域コミュニティのつながりを維持するという機能を持つ。300年の歴史を持つ祇園祭は、その形こそ変えつつあるものの、地元の人々にとってそうした機能を持つという事実に変わりはないように思える。普段は富山市に住む、ある30代男性によると、祇園祭にあわせて毎年帰ってくるのは、何も祭りのためだけではない。仕事のために市外や県外に出た幼馴染と会い、旧交を温めるためでもある。これは祭りをすること自体の楽しみとは異なるが、祭りを楽しむためには欠かせない要素である。町内の人々は、常にそうした機能を意識しているわけではない。彼らの語りを聞くと、祭りとはむしろ、彼らの生活に欠かせない習慣であるように聞こえる。祭りがひとつの伝統として維持されるというのは、このことをいうのだろう。少子高齢化による影響を減じようとする各町の保存会による努力も、そのために注がれている。

祭りは日本の地域を代表する文化的シンボルであり、人々の信仰心を表す儀式でもある。儀式を通し、人々は古くから地域の神に守られてきたわけだが、実は人々も祭りを守ってきたのである。現代社会では、科学技術が何より重視され、人々はより効率的、合理的に働くことを追求するため、信仰が薄れるのも、ある意味では当然だろう。必要のないものが時代の流れの中で淘汰されるのは自然なことかもしれないが、祭りは近代化とともに即座に捨てられたのではない。筆者は、人々のライフスタイルの個人主義化や合理化によって存続が厳しくなりつつもしぶとく生き残っているところ、人々が祭りに一定意義を見出していることに、祭りの価値が証明されているように感じる。逆の言い方をすると、人々が祭りの意義を十分に意識すればするほど、祭りは確実に伝承させられていくのに違いない。行政が行う宣伝活動などが効果を持つのも、そのことで氷見の人々が、伝統文化の意義や機能を意識するからだろう。

注

1）玉串に自分の心をのせ、神にささげるという意味である。

参考文献

氷見市立博物館、1989、『特別展　氷見の曳山人形展』、氷見市立博物館

氷見市立博物館、1990、『特別展　氷見の曳山展』、氷見市立博物館

氷見市立博物館、1996、『特別展　氷見の祭りと年中行事』、氷見市立博物館

氷見市史編さん委員会、2003、『氷見市史 5』、氷見市

8.　新保の秋祭りにおける獅子舞――今後への「継承」

南谷　綾香

はじめに

私はかねてから、地域の行事や年中行事に関心があった。調査地が決まってから、氷見の年中行事について調べたところ、氷見は獅子舞がとても盛んな地域であることを知った。私の出身地である石川県羽咋郡にも獅子舞は存在するが、氷見の獅子舞とは囃子に使われる楽器や天狗の舞などの様子が全く異なるようであった。さらに、私の住んでいる町の隣町の獅子舞が氷見から伝わったものであると知って、ますます興味をひかれた。氷見では、現在でも 100 以上の獅子舞が現存し、9 月の秋祭りの時期には毎週のようにどこかで獅子が舞っていることにも、魅力を感じた。私は獅子舞についての知識がほとんどなかったが、獅子舞について調べていくうちに獅子舞がとても興味深いものであると感じるようになった。そこで獅子舞を調査の題材とすることに決め、地域の獅子舞がコミュニティにおいてどのような役割を持つものであるのか、そして獅子舞はこれまでどのように変化し継承されてきているのかを調査テーマとすることにした。今回は新保という地区を調査地として、上記のテーマについて調査した。

1.　調査地概要

1-1.　新保

新保は氷見市中心部から車で国道 415 号線などを通って約 20 分の、石川県との県境近くに位置する地区である。現在新保は氷見市に編入されているが、1953 年（昭和 28 年）までは、論田（ろんでん）・熊無（くまなし）・谷屋（たにや）・中村の 4 つの地区とともに、1889 年（明治 22 年）に編成された熊無村に属していた。かつての生業は農業が中心で、現在も地区には田んぼが広がっており、1991 年（平成 3 年）からは集落営農が行われている。なお、新保の集落営農は氷見市で最初に開始されたものである。

1933 年（昭和 8 年）には新保の戸数は 45 戸、人口は 250 人であった。2013 年（平成 25 年）12 月の時点では、56 戸、人口は 204 人（うち男性が 88 人、女性が 116 人）である。新保の子どもたちは明和小学校に通っており、明和小学校は 1963 年（昭和 38 年）に論田小学校と谷屋小学校が統合されて誕生した小学校である。

図 1.　新保とその周辺の地図

1-2.　神明社

新保の秋祭りで獅子舞が奉納される神社は、神明社である。神明社の宮司は複数の神社の宮司をつとめているため、新保に住んでいるわけではない。そのため、祭りなどの行事があるごとに、祭事をとり行うために神明社に出向いてもらう。神明社の祭神は天照大神、迦具土神（かぐつち）である。現在の場所に鎮座されたのは 1917 年（大正 6 年）であると言われており、それまでは小字（こあざ）後山というところに鎮座されていた（この跡地は現在も社地として残っている）。新保にはかつて神明社とは別に火社があったが、明治の終わりに合祀（ごうし）したとされている。

写真 1.　神明社

写真 2.　獅子舞道具

1-3.　新保の獅子舞

新保の獅子舞は、大正のおわりから昭和初期頃に、氷見市の十二町（じゅうにちょう）あたりから伝わったとされている。一時期途絶えていたが、1977 年（昭和 52 年）に復活し、以後 2013 年（平

成 25 年）まで 36 年間続いている。かつて獅子組は 2 組あったが、青年団員の減少のため、戦後に合併して 1 組となった。また、もともとは春祭りと秋祭りの年 2 回獅子舞を出していたが、現在では、獅子舞をとり行うのは秋祭りのみである。

新保地区の祭礼の日程は数回にわたり変化している。20 年ほど前までは、9 月 19 日に祭礼が行われていたそうである。その後、9 月の秋分の日の前日に変わり、現在では 9 月第 4 週目の土曜日になっている。2013 年（平成 25 年）の祭礼は通常とは異なり、9 月 22 日にとり行われたが、これは獅子舞ミュージアムでその日に予定されていた実演会（後述）に合わせてのことである。

1-4.　新保の獅子舞道具

次に、新保の獅子舞で使われている道具について述べる。新保にはカシラが二頭あるが、写真 4 のカシラは約 50 年前からあるという。太鼓（写真 6）も二台ある。写真 7 は新保で使われているカネであるが、年配の住民はこれを「ウラガネ」と呼んでいた。天狗の採り物[1)]（写真 8、9）は 3 種類あり、写真 8 の左の長い採り物は「ヨソブリ」という演目の最後、右の採り物はそれ以外の演目で使用され、写真 9 の採り物は「ニラミ」という演目の際に使用される。また、採り物の紙でできた房部分は毎年住民が手作りしている。

写真 3.　天狗の面

写真 4.　カシラ

写真 5.　天狗のエボシ

写真 6.　太鼓

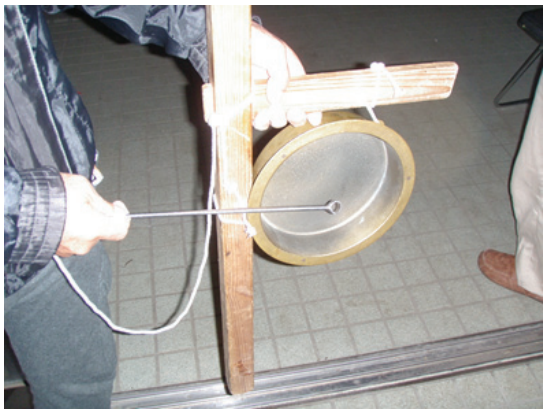


写真 7.　カネ

写真 8.　天狗の採り物

写真 9.　天狗の採り物

写真 10.　提灯

2.　獅子舞と住民

2-1.　調査概要

新保での調査は、おもに 2013 年（平成 25 年）9 月 16 日から 9 月 22 日の間に行った。9 月 16 日から 20 日にかけては、地区内の営農研修会館で獅子舞の練習を見学し、9 月 21 日には前日の準備と練習、9 月 22 日には祭り当日の地区の様子と獅子舞ミュージアムでの実演会を 1 日にわたり見学した。練習や祭礼当日の見学の際には、地区の住民や地区以外から祭礼を見に来ていた氷見市民からの聞き取り調査も行った。さらに、獅子舞文化における観光の側面について知るために、市役所でも聞き取り調査を行った。

2-2.　獅子舞に携わる人びと

男性（青年団および壮年会）

現在の新保の獅子舞は、地区内の青年団と壮年会が協力し、継承している。青年団の人数が少ないため、主体となっているのは壮年会である。いずれも地区の男性によって構成されており、青年団は 20 代まで、青年団の OB にあたる壮年団は 30 代から 50 代までで、現在の全体の人数は 20 名から 30 名である。青年団は、おもに天狗や獅子のカシラやカヤの中などの「まわし方」を担っている。壮年会は、青年団と同様に獅子のカシラやカヤの中に入るほか、練習の指導や当日の衣装の着付けなど、裏方の仕事も担っている。昔は「地区の獅子舞は青年団のみで担っていた」ものだという。しかし、少子化や、進学や就職のために若者が地区の外に出るようになったため、獅子舞の担い手はぐっと少なくなってしまった。壮年会が獅子舞の継続のためにこれほどまで協力する必要があるのは、そのためである。また、壮年会を引退して老人会に入っている住民も、囃子方として太鼓やカネの演奏に加わるなどして積極的に協力しており、今では祭りには欠かせない存在となっている。

女性

獅子舞は本来、男性のみのものとされており、女性の参加は認められていなかった。しかし近年では女性が獅子舞に参加している地域も少なからずみられ、新保もそういった地域のひとつである。新保では囃子方の笛の演奏を、小学校の中学年ごろから中学生までの女子が担っている。2013 年（平成 25 年）の秋祭りには中学生 3 人、小学生 4 人の計 7 人の女の子が参加していた。

青年団や壮年会に所属している男性の妻やその家族、婦人会に所属している女性は、獅子舞には直接かかわることはないが、裏方として、料理や飲み物などの準備をする役割を担っている。出される料理は特に決まってはいないそうだが、今年は注文したオードブルや

弁当に、手作りの温かいうどんや豚汁などが準備されていた。

2-3. 獅子舞の練習

新保では、獅子舞の練習は祭り当日から数えて約 2 週間から 10 日前に始まる。練習は、神明社に隣接している新保営農研修会館で行う。営農研修会館は、新保における公民館であり、地区で何らかの集まりがある際に住民が利用している施設である（写真 11）。日中は多くの住民が仕事などで忙しく、地区の外へ出たり家を空けているため、練習は夜に行われる。19 時 30 分頃に壮年会の会長が営農研修会館の鍵を開け、部屋の明かりと外の照明をつける。その後 20 時頃になると地区の住民が集まりはじめ、練習が開始される。練習は基本的には営農研修会館の屋外で行われている。

練習の準備は、先に研修館に到着した住民からはじめることになっている。獅子舞道具一式は営農研修会館に保管されており、練習に使用する獅子のカシラやカヤ、天狗の道具、カネや太鼓を外に出す。その後、集まった住民が太鼓をたたきだす。太鼓の音は地区の住民へ練習のはじまりを告げる役割があり、太鼓の音が鳴り出すと多くの住民が営農研修会館に集まりだす。

練習はある程度の人数がそろった時点で、集まった住民のみで開始される。まず、獅子と天狗が各演目の動きを確認するために踊り、それに合わせて、カネや太鼓、笛が加わる、といった具合で進む。経験者にとっての練習とは、天狗や獅子の動き、また、太鼓やカネ、笛のはやし方と動きの合わせ方を確認する場であることはもちろんのこと、「新しく獅子舞に参加する人や分からない人に対して教える場」でもあるという。今年、新保の獅子舞は獅子舞ミュージアムでの実演会への出演を予定していたので、実演会で舞う演目の獅子や天狗の動きの確認も丹念に行っていた。

練習は地区の子どもも参加しているため、21 時頃にいったん切り上げる。21 時になると練習に参加した子どもたちに飲み物をくばり、すぐに子どもたちは帰宅する。その後大人たちは営農研修会館の中へ入り、飲み物やおつまみを出して、祭りなどについて話し合いをかねて一休みする。また、練習中や練習後には祭りに使用する道具や角行灯などの準備も行われていた。解散の時間は特に決まってはいないが、次の日に仕事がある住民が多いため、24 時を過ぎるまでにはだいだいの住民が帰宅する。秋祭りと実演会の前日は、21 時を過ぎても動きの確認をしていた。

写真 11.　営農研修会館

2-4.　祭りの準備

祭りの前日には、太鼓台などの組み立てや、ヨメバナ（祭礼の年に婚姻があった家から打たれるハナ）がある家に提灯（ちょうちん）をつけに行くなど、祭りのための準備が行われる。また、2013 年（平成 25 年）は獅子舞道具の一部と注連縄（しめなわ）を新調したため、神明社でそれらのお祓いも行われた。午前 10 時半に宮司が神明社に到着すると、まず新調した獅子舞道具のお祓いが行われ、続いて新調した獅子舞道具一式を祭壇にあげて、これもお祓いが行われた。この一連の儀式には、地区の住民も参加した。また、獅子舞にかかわる男性のうち、この 1 年の間に家に不幸があった者に対する厄除けの儀式も、あわせて行われた。

午後からは、青年団・壮年会をはじめとした地区の住民が、太鼓台の組み立てなどの作業をはじめる。太鼓台の土台は神明社に隣接した倉庫に保管されており、秋祭りの際にそこから出すことになっている。はじめに、太鼓台の中央に高さ約 4mの松をたて、赤い提灯をつける。前方には鳥居を設置し、その間に太鼓を置く。さらに鳥居の両横には白い角行灯を設置する。角行灯には「御神燈」のほかに「火之社」という文字がかかれているが、それらはすべて地区の住民が書いたものである。太鼓台の飾りつけがおわると、ヨメバナのある家に出向き、家の軒下に提灯を設置する。また家の近くに紅白幕をはり、「新保獅子連中」とかかれた角行灯を設置する。準備は夕方頃にはほとんど終了し、その後は通常通りに練習が行われた。

写真 12.　太鼓台

写真 13.　角行灯

2-5.　秋祭り・実演会当日

2013 年（平成 25 年）の秋祭りは 9 月 22 日に行われた。今年は例年と異なり、秋祭りとともに獅子舞ミュージアムでの実演会が午前に行われるため、いつもより早い 8 時半頃には営農研修会館で衣装の着付けなどの準備が始まった。準備ができ次第、車を乗り合わせて獅子舞ミュージアムへ出発したが、その際には私も同行させてもらった。

表 1.　9 月 22 日から 23 日の流れ

22 日	8:30	営農研修会館集合。準備をはじめる 準備ができ次第、獅子舞ミュージアムへ移動
	10:30	実演会開演
	15:00～	神明社に参拝、獅子舞を奉納 休憩（宿）をはさみながら地区をまわる
	19:00 頃	ヨメバナのある家を順番にまわる
23 日	1:30～2:00	神明社へ
	2:30	ヨソブリをして祭りが終了 営農研修会館で休憩後、解散

獅子舞ミュージアムに到着すると、まずは進行の打ち合わせが行われた。実演会場の舞台は地区で舞うよりも広さがなく踊る感覚が異なるため、広さや位置などの確認などがなされたが、その場の雰囲気はリラックスしたもので談笑している住民もいた。獅子舞ミュ

ージアムは中心に舞台があり、通常はまわりの四方のうちひとつだけが観客席となっているのだが、実演会当日はまわりの二方が観客席となっていた。

10 時に開場すると、来場者が入場しはじめた。実演会では、観客席は実演会を担当する地区から来た観覧客や来賓と、一般の観覧客とに分けられていた。10 時半に開演し、実演会が開始された。実演会では、新保の青年団長や自治会長のあいさつがあり、「イリミヤ」、「フタアシ」、「ヒトアシ」、「バンガエシ」、「ナガナガ」、「ヨッサキ」、「ヨソブリ」、そしてアンコールで「ヤッサブリ」の 8 演目が舞われた。演目の途中にはいくつものハナが読み上げられ、地区で実際に舞われているような迫力のある獅子舞の様子をミュージアムでも見ることができた。また、実演会の様子は後日北日本新聞と富山新聞の二紙に掲載されていた。この日訪れた観客は約 200 人で、新保の獅子舞関係者も含めると、約 250 人が獅子舞ミュージアムに集まった。

実演会が午前中のうちに終了すると新保の住民はすぐに地区に戻り、営農研修会館や自宅でお弁当などの昼食をとった。14 時頃になると再び衣装の着付けなどの準備が行われ、15 時になると神明社に向かい、まずは参拝をして獅子舞を奉納した。その後は行程表に合わせて、地区の家を一軒一軒まわった。現在の新保の宿 [2] は営農研修会館であり、そこで数回の休憩をはさみながら祭りが行われた。営農研修会館には地区の女性による手作りの温かいうどんやオードブルなどが準備されていた。

新保での獅子舞の門付けは次の順序で進む。まず、門付けを行う家の敷地内に、獅子舞を演じながら入って行く。次にハナが打たれた場合はハナを読み、もう一度獅子を舞う。一軒から複数のハナが出ることもあり、複数のハナが出た場合はすべてのハナを読み上げ、高額なハナが出た場合は特別な演目が披露される。新保にはさまざまな演目があるが、「ヒトアシ」、「フタアシ」などがよく舞われており、周囲からも盛んに掛け声がかかっていた。さらに自分の家の順番でなくても、さまざまな世代の地区の住民が、青年団や壮年会と一緒に地区内を移動しながら獅子舞を見物している姿が多く見られた。さらに獅子舞ミュージアムでの実演会のためか、地区外から獅子舞を見に来たという人もいた。

外が暗くなると提灯に灯りがともる。19 時頃から獅子舞が盛り上がりを見せる時間帯であり、ヨメバナがある家の順番がまわってくる。今年のヨメバナは全部で 3 軒あり、披露される家のまわりにはさらに多くの人が集まっていた。ある男性によると、かつては「ヨメバナが 11 軒出た年があった」のだという。ヨメバナが出ると特別な演出が行われる。天狗は面をかぶり、花火の中で天狗と獅子が舞うのである。さらに天狗と獅子が家の中から出てきて「ニラミのサンクズシ」を披露する。最後に、新郎を青年団と壮年会の男性が胴上げしてヨメバナの出た家の獅子舞は終了する。

日付が変わり、23 日の午前 1 時頃に獅子舞の一行は神明社に入り、舞の奉納が行われる。神明社は最後に獅子舞が舞う場所であるため、家よりも長い時間獅子舞が披露され、新保

で一番の演目である「ヨソブリ」が舞われた。その後参拝して今年の秋祭りは終了となる。祭り終了後は一度営農研修会館に入り、軽食をとり、解散となった。23 日は 10 時頃から祭りの後片付けが行われた。16 時頃からは慰労会があり、祭りの打ち上げがあった。

写真 14.　着付けの様子

写真 15.　出発の様子

写真 16.　ヨメバナの家の様子

写真 17.　神明社での獅子舞

2-6.　獅子舞ミュージアム

氷見市では獅子舞を観光資源のひとつとして発信するために、2005 年（平成 17 年）に「獅子舞ミュージアム」を開設した。氷見市泉（いずみ）に位置する獅子舞ミュージアムは、氷見で盛んに行われている獅子舞文化に誰もが触れられることを目的とした施設である。館内には、氷見市内で実際に使用されていた獅子頭や天狗の面をはじめとした獅子舞道具一式や、氷見の獅子舞の特徴でもある太鼓台などが展示されている。また、獅子舞ミュージアムでは年に数回、地域の獅子舞の担い手たちによる実演会を行っている。2013 年度は、9 月の時点では新保による実演が行われているのみであるが、氷見市役所職員によると年 5 回ほ

どの開催を目標としており、2012 年度は 3 回の実演会があった。実演会の開催は市のホームページや、番屋街や市内にポスターを貼るなどして PR される。また、口コミなどで市外から訪れる観覧者もいるという。

2-7. 氷見市における獅子舞振興のための事業・および制度

氷見市には街づくり、地域づくりのためのさまざまな事業や制度があるが、その中に「コミュニティ助成事業」という制度がある。コミュニティ助成事業とは宝くじの収益をコミュニティ活動の促進を図るために充当するという制度である。氷見市内の地区では、このような制度を利用し獅子舞道具の新調や修繕をおこなっている。新保も、コミュニティ助成事業を利用して獅子頭や太鼓をはじめとした獅子舞道具の一部を新調した。

3. 住民の語り

練習中や当日に新保の獅子舞に携わる人びとにお話を聞くと、祭りが好きという語りが多く、祭りを楽しみにしていることが伝わってくる。ある 30 代男性は祭りをすると「村が盛り上がる」と語り、住民が見返りがなくても準備をして祭りにかかわっていることに対して「祭りが好きで大切にしたいという思いがあるから」であると語ってくれた。そのなかでも 70 代男性をはじめ多くの住民が「祭りといえば獅子舞」と話してくれた。カシラを担当する 10 代の青年は練習にも早い時間から参加し、「はやく踊りたくてしょうがない」と語っていた。

新保の獅子舞に親しみを持っているのは獅子舞の主な担い手である男性だけではなく、女性もまた獅子舞に好意的であると感じた。ある 70 代女性は、「獅子舞が大好き」と天狗や獅子の様子をとても楽しそうに語る。80 代女性は「村で一番楽しい行事」と語り、新保の獅子舞は「踊りがかってやさしい」とも話してくれた。他にも「太鼓の音を聞くと祭りという感じがする」と語る女性や、「いつも祭りを見ている」（80 代女性）というお話を聞いた。また、普段は地区の外に住んでいるが祭りの時期には獅子舞を見に戻ってくるという女性もいた。男児がいる家庭にとって獅子舞は思い入れのある行事になるようで、ある 60 代の女性は「（家族に）男の子がいると祭りが楽しいし、盛り上がる。祖母も孫が獅子舞に参加している様子を見るのが好きだった」と話してくれた。

新保の人びとの語りを聞くと、「獅子舞が好き」というだけでなく獅子舞は「地域のつながりを深めるいい機会」（80 代男性）であるのだという。練習の様子からも、獅子舞は地域の人びとの親睦を深める場となっている。さらに、練習を見学しているなかでの「みんなで祭りを盛り上げたい」（60 代男性）という語り、そして実際の新保の獅子舞を見ていると、新保ではさまざまな世代の人びとが祭りにかかわっていることからも、獅子舞はつながり

をつくり、深めるとてもよい場であると筆者自身も感じた。また、新保の獅子舞は地区の家一軒一軒をまわって獅子舞を披露しているが、このことに対してある60代女性は「一軒一軒まわしてくれてて、うれしい」と語る。新保の祭りでは多くの住民が獅子舞と一緒に地区を歩いているが、この女性も「自分の家にも獅子舞はくるけれど、ほかの家の獅子舞も見に行く」のだという。さらにさまざまな年齢の人びとが獅子舞にかかわっていることに対して「小さい部落ながらよくまとまっている」と話してくれた。

このように、新保の人びとにとって獅子舞はとても親しみのあるものではあるが、「継承」という面に焦点をあてると考えなければならない問題がある。多くの住民が「若者が少ない」と語り、新保の獅子舞は「世代交代ができていない」（30代男性）のである。しかし獅子舞の継続を願う住民は多く、「なくなってしまうのは寂しい」（80代女性）とか、今まで続いてきたものであるから「残せるものなら残したい」（20代男性）と話す人びとも多かった。

「継承」という側面から眺めると、かつての獅子舞と現在の獅子舞とのあいだで、次のような変化を指摘できる。たとえば、天狗を舞う男性の属性である。以前は「天狗は長男が担当するもの」であった。次男、三男は結婚すると村を出て行ってしまう可能性が高く、せっかく身につけた技術を村で生かすことができなくなりかねなかったため、獅子舞において動きも複雑な天狗という役割は長男が任されていたという。しかし現在では長男、次男はほとんど関係なく天狗やカシラを担当しているそうだ。また、練習の様子も以前とは異なる。60代以上の男性からは「以前のほうが教え方は厳しかった」という語りがあった。筆者が見学している限りでは、練習中に技術面の指導での叱責などはみられなかったが、かつてはそのようなこともあったのかもしれない。また、先述のように、新保では十数年前から囃子方の笛の演奏役として女子（主に小学生と中学生）が参加している。彼女らからは「笛を演奏するのは楽しい」や「高校生になっても笛をやりたい」という声が聞かれ、練習にも積極的に参加する姿があり、大人たちからも「女の子が笛役として祭りに参加すると華がある」という声が聞かれた。このような変化と工夫によって祭りに参加できる人数を増やすことができ、獅子舞の担い手が少なくなっていく状況のなかでも獅子舞を継承することが可能となっているのではないだろうか。

獅子舞の継続に関連した変化という意味では、休憩場所（「宿」）の変更もあげられるかもしれない。祭りでは獅子舞を担う人びとのための休憩場所が必要であるが、かつては青年団長や自治会長などの家を宿として提供していた。その際は宿を担当する家で食事などを準備し、提供しなければならず、宿を担当したことのある住民からは「宿をすると準備が大変だった」という声が聞かれた。宿を担当する住民の負担を減らすという意味合いもあって、営農研修会館を宿として利用するようになったのだろう。

このように、かつてと現在を比較すると獅子舞を続けていくためのさまざまな工夫や変

化があるが、住民がそうまでして獅子舞を続けていく理由は獅子舞が「好き」という一点のみの理由からではない。もちろん獅子舞に対しての愛着はあるが、いままでずっと続いてきたものであるから「愛着だけではなく、やらなきゃいけない」し「好きという思いだけで続けているわけではない」という声も聞かれた。やはり長い間継承されてきた獅子舞であるから、なくしてはいけないという思いもあるのだろう。また、獅子舞がなくなってしまえば、コミュニティのつながりを深める大切な場が失われてしまう。交流の場が失われないようにと、新保の獅子舞の継続を願う住民が多いのかもしれない。

4. まとめ

新保の秋祭りの練習から当日、獅子舞ミュージアムでの実演会を見学し聞き取り調査をしていくなかで、私なりのいくつかの発見があった。ここでは最後に、特に「獅子舞の継承」という切り口から、それらをまとめることにする。

まず、新保における獅子舞の担い手についてである。新保では、本来は獅子舞の担い手であるはずの若者が少ない。そのため、獅子舞を継続していくためには壮年会や壮年会を引退した住民までもがかかわらざるをえず、多くの住民が世代交代ができていないという問題を実感している。ただし、多くの世代の住民がかかわらざるをえない状況そのものが、獅子舞を通して住民同士のつながりを持つ機会をつくっている側面もあるため、世代交代ができていないことは、悪いことばかりではないのではないかと感じた。

とはいえ、世代交代ができていないことは、「継承」という面で考えると解決すべき問題である。この点に関しては、新保ではいくつかの変化や工夫が見られる。たとえば、獅子舞の担い手である。かつては長男にしか許されなかった天狗役が次男以下にも開かれるようになったことや、囃子方への女性の参加が促されるようになったことが、それにあたる。また、練習がかつてと比べて厳しくなくなったことや、「宿」に公民館を使用するようになったという変化も、新保の人びとが獅子舞にかかわる際の敷居を下げているといえる。これらは、獅子舞を継承していくためには、必要な変化である。聞き取り調査を行っていると、新保の住民は囃子方への女性の参加をはじめ、獅子舞が変化していくことに比較的寛容である住民が多いと感じた。伝統的な物事を変化させることには抵抗が起きやすいのかもしれないが、新保の人びとはその寛容さで時代とともに変化していくことを受け入れることができたからこそ、現在まで新保の獅子舞が継続されてきたともいえるのではないだろうか。さらにさまざまな変化や工夫があったからこそ、多くの住民がうれしく思い、誇りに感じている、「一軒一軒の家で獅子舞を披露する」ということを、現在にいたるまで続けてこられたのではないだろうか。

最後に指摘したいのは、次の世代を担うであろう、新保の子どもたちについてである。練習を見学していると、大人と一緒に子どもたちが営農研修会館にやってきている姿が多く見られた。子どもたちは青年団や壮年会の男性が練習している横で、子どもどうしで遊んでいた。いまはまだ、子どもたちは友達と会って遊べるからと、大人たちについてやってきているのかもしれない。だが、たとえそうだとしても、練習場に来ることは、子どもたちにとっては小さな頃から獅子舞に親しむためのかけがえのない場となっているといえるのではないだろうか。何気なく聴いている太鼓や笛の音は、きっと身体にしみつき、獅子舞を身近に感じるひとつの要素になるだろう。彼らには、獅子舞を好きになり、獅子舞の担い手として練習に参加し、新保の人びとによって復活させられた伝統ある獅子舞を担う、次の世代になってほしい。そうすることで、今回の調査で垣間見ることのできた、練習中や祭りでのあたたかい雰囲気や、練習後にさまざまな世代の人びとが和気あいあいと談笑する光景、そして地域住民が協力して祭りを作り上げている姿が、いつまでも見られることを願ってやまない。

謝辞

今回の調査にあたっては、新保の皆様に大変お世話になりました。突然のことでご迷惑をおかけしたにもかかわらず、訪問初日の獅子舞の練習から見学させていただき、そして準備や当日もご一緒させていただけたことを、大変感謝しております。新保の皆様からはたくさんの貴重なお話を聞かせていただきました。お忙しいなかお話を聞かせていただいたり、「あの人ならもっとくわしいのでは」と紹介してくださったりと、たくさんのご協力をいただきました。秋祭りの日には法被を貸してくださり、一緒に祭りに参加できたこと、練習を見学させていただいているとき、私の顔を覚えてくださり、話しかけてくださる方が日増しに多くなっていったことは、とりわけうれしく思い出されます。無事調査を終えることができたのも、新保の皆様のご協力のおかげだと思っております。本当にありがとうございました。

注

1）天狗が獅子に対峙する際に手にする道具

2）祭りの際の休憩場所

参考文献

熊無村史編集委員会、1997 年、『熊無村史』、明和校下自治振興委員会

氷見市立博物館、2012 年、『特別展氷見の獅子舞―舞う獅子・舞わない獅子―』、氷見市立博物館

『北日本新聞』2013 年 9 月 23 日朝刊「新保獅子舞　勇壮に」
『富山新聞』2013 年 9 月 23 日朝刊「勇壮な獅子舞観客魅了」

参考にしたウェブサイト

「氷見市ホームページ」
（http://www.city.himi.toyama.jp/ ; 2014 年 1 月 21 日閲覧）
「Yahoo!地図」
（http://map.yahoo.co.jp/ ; 2014 年 1 月 21 日閲覧）

9.　一刎地区における獅子舞とその継承問題

上野　成穂

はじめに

私が初めて獅子舞という伝統に触れたのは、幼少期のことである。私の出身は富山県高岡市で、毎年春と秋には、町を獅子が練り歩く光景がよく見られた。私は幼い頃、お囃子の音が外から聞こえてくると、いつも祭りの様子を見に行っていた記憶がある。しかし、いつのまにか獅子の出る頻度は減っていき、ついに近隣であの光景を見ることはできなくなってしまった。

これは何も、私の家の近所に限った話ではない。富山県はもともと獅子舞の盛んな県で、それに関連した行政主催のイベントは毎年多く開かれているが、その影で、各地に独自の形で伝わっていた「地域の獅子舞」が、年々途絶えつつある。地域の素朴な獅子舞に親しみのある自分としては、このことが物寂しくあり、同時にこの現状をどうしていくべきかとも考えるようになった。

現在、まさに消滅の危機と継承問題に直面している一刎で獅子舞を調査しようと考えたのは、そのような理由からである。一刎では具体的にどんな問題が起きていて、それに対して人々はどのような考えをもっているのか。そうした個別の事例について調べることを通じて、富山県の「地域の獅子舞」が今後たどっていく将来についても考えてみようと思う。

1.　概要

1-1.　現在の一刎の獅子舞

まず、一刎の獅子舞について解説する前に、集落内の各地域の呼称について説明したい。先に書いた「1-7.　一刎の概要」にある通り、この集落は 7 つの地区に分かれているが、地域の通称として、「上出（上格内）」と「下出（下格内）」という呼びかたも存在する（本章では「上出」、「下出」の呼称で統一する）。「上出」は、そのまま上出地区のことを指すが、「下出」は、それ以外の 6 つの地区すべてを含んだ地域を指す。

一刎地区は、地域内に複数の獅子舞を有しており、上出の高階社に 1 つ、下出の一刎八幡宮に 2 つの、計 3 つの獅子が存在する。一刎は、春祭りと秋祭りに獅子を「マワし」（一刎に限らず氷見周辺では、獅子舞の演舞を行うことや門付けを行うことを「獅子をマワす」と言う）、獅子は上出と下出で毎年交互に出すのが通例であった。上出と下出の祭りは独立

したものとして行われており、表だって地区外の住民が参加することはなかったが、近年では人手不足もあり、下出の獅子舞に上出の住人が参加するなど、集落全体で援助しながら獅子舞を運営している。

上出の獅子は、カヤ（胴幕）に 5 人が入る「大獅子」である。天狗や獅子頭は、氷見で一般的な、朱塗りのものを使う。獅子方以外の構成員には、太鼓役と、本来ならば囃子方がいる。しかし、摺鉦は近年使用されておらず、また、今では笛の継承者がいないため、獅子方と太鼓のみの構成となっている。平成 16 年以来、上出の獅子はマワされていない。

現在、青年団は存在せず、代わりに「獅子舞同好会」が獅子舞を運営している。市からの援助は受けていない。組織は、顧問・会長・副会長・事務局長・その他役人に分かれており、主な仕事は、衣装や道具の確認と、獅子舞の練習の補佐である。また、獅子舞をする際の休憩所を指す「宿」は、宮総代の家が交代で担当していた。

一刎八幡宮には、下出と宮格内から、それぞれ獅子舞が奉納される。宮格内の獅子は、「小獅子（子獅子）」といい、獅子頭は白髪で、大獅子より一回り小さい。人手がじゅうぶんあったときは、子どもなど主に、若い人がマワしていたという。それに対し「大獅子」は、獅子頭の頭髪が黒く、通常のものよりやや大きめに作られている。顎には「ナンバ」という布を噛ませてあり、獅子頭に掛かる負担を減らしている。現在の祭りでは、大獅子のみを出しており、小獅子は特別な催しのときのみマワすことになっている。上出と同様、囃子方はおらず、太鼓役と獅子方のみの構成である。

下出の獅子舞を管理しているのは、「獅子方保存会」である。会長・理事・会計・会員がおり、宮総代が会の運営を司る。そのため保存会長は、宮総代の総代長が兼任しており、祭礼と獅子舞の運営は一体となって行われる。現在の会長は、山田義良氏である。獅子方保存会も、市の援助は受けておらず、ハナなど、地区から出される資金のみで運営している。

下出の「宿」は、現在に至るまで代々奥原家が担っており、今は、奥原トヨ子さん（80 代）が基本的に 1 人で「宿」の管理をしている。明確な記述はないが、奥原さんの話によると、少なくとも明治の頃には、すでに家が「宿」として使われていた（と伝えられている）という。

写真 1.　小獅子（左）と大獅子（右）

写真 2.　一刎獅子舞の天狗

1-2.　以前の獅子舞および祭礼の様子

一刎の獅子舞および祭礼は、比較的最近まで、古くからの慣習的な方式に則って行われてきていた。しかし近年の一刎の祭礼は、次第に簡略化されたものになっている。集落の状況の変化から、これまでのやり方を続けることに無理が生じてきたことが理由である。

今からおよそ 20 年あまり前までは、一刎でも「家マワシ」をしていた。軒数の多い下出では、獅子は、長いときで 2 日以上を掛けて集落の家々を回ったという。地区の住人やその親族に、その年結婚や出産があった場合は、複数のハナが打たれるので、一軒に掛かる時間が長くなった。「宿」での休憩は途中あるものの、一日中踊り続けなければならない獅子方の負担は大きかった。青年団を世話する「宿」も、一つの家が担うため、費用や労力が集中してしまう問題があった。

地区内から新たな総代が出る場合は、さらに盛大な祭礼が行われた。その年は、普段神社に奉納されている神輿が表に出て、獅子とともに家を回った。新しい総代の家には、歴代の総代が集まり、御膳が振る舞われる。その家では、家マワシの最後の演目として、「獅子殺し」が行われる。「獅子殺し」が行われる家は、集落でも誉れが高いとされ、その様子を見に、近隣住民も多く集まる。彼らにも食事がもてなされ、新総代の家は、その年数十万円かそれ以上の費用が掛かったという。

下出の神輿は、多額の費用を掛けて平成 3 年に新調され、その年に新しい総代が出た。しかし、神輿は非常に重く、若い世代が少ない現状では、神輿を担いで集落内をまわるのが困難である。また、下出の宮総代はすでに 27 人ほどおり、人数が増えるほど、新総代の負う費用も年々高くなる。これらの理由から、平成 3 年を最後に、総代の選出は行われて

いない。

2.　一刎の獅子舞の現状

2-1.　秋祭りの参与観察

今年の秋祭りは、例年通り 9 月の第 4 土曜日にあたる 28 日に行われた。上出は午後 2 時から、下出は午後 4 時から祭りが開始される予定となっており、私は下出の祭りを参与観察した。今回、上出の祭りを観察することはできなかったが、内容は、拝殿での祭典のみであったという。当日の祭りの様子は、以下のとおりであった。

前日までの準備

獅子舞は、本来であれば 1 週間前から練習するものだったそうだが、現在は参加者同士の予定が合わないことも多く、2，3 日前に、確認程度の練習をするだけだという。祭り前日の夜には、保存会の人々が奥原氏宅に保管されている衣装や道具を出して並べ、不備がないか確認する。

太鼓台に飾る松は、当日になってから切り出し、昼には装飾をし終えて台を境内に持っていく。本来太鼓台は、獅子舞とともに宮へ進行していくものであり、4 年ほど前までは、手の空いている男性たちが、公民館前から太鼓台を曳いていた。だが、今は参加者の高齢化のため、あらかじめ台は境内に置くことになり、宮入りの際は、太鼓を軽トラックに載せて叩くようになった。

今回は、参加人数が少ないことから、祭りの 2，3 日前には、獅子舞を中止する話も出ていたというが、保存会理事の森氏の判断もあり、決行することになったそうである。

獅子舞の奉納（当日・15 時 40 分～）

獅子方連中は、はじめに「宿」である奥原氏の家の玄関先で、一通りの演目を舞う。これを「お礼回り」という。

秋祭りの開始は、一刎八幡宮の鳥居の前から獅子舞が出ることで知らされる。獅子が宮入りすることを、一刎では「宮上がり」と呼んでいる。

通常は 16 時に祭りが始まることになっているが、今年は 20 分ほど早めに開始された。その理由として、今年は獅子舞の参加者が少なく、祭りが簡略化されたことが挙げられる。15 人前後集まれば役割分担がしやすいそうだが、今回は 10 人ほどしか集まらなかった。各人の都合が重なったことに加えて、7 月の三十三年式年大祭（写真 3）で、一度盛大に獅子舞をやったことも、人数不足の間接的な原因ではないかと推測される。

写真 3.　三十三年式年大祭の様子

祭礼（16 時 00 分～）

境内でいくつかの演目が舞われると、獅子舞は一旦終わり、社の中では祈祷をはじめとする祭礼が行われる。獅子方連中は、祈祷が終わるまで拝殿の外で待機する。

お囃子の音を聞いた住民が、次々と参拝に来る。住民の中には、参詣を終えて、そのまま拝殿に入り、祈祷を聞いている人が 20 人ほどいた。また、拝殿には入らず、境内で世間話をしながら、獅子舞が出るのを待っている人もいた。その多くは中高年の女性で、人数は 15 人ほどであった。

寄席回し（16 時 30 分～）

祈祷が終わると、境内で獅子舞の「寄席マワシ」が始まる（写真 4)。神輿が出ないので、神主はこの時点で退席している。

祭りが土曜日ということもあってか、割合、境内には子どもが多く見受けられた。中には、「天狗を演じている同級生を見たい」という理由で、一刎の外から来ている子どももいた。天狗役の半数以上は高校生以下で、今年からは小学 1 年生の子どもが 1 人、新たに天狗役に加わっている。

獅子舞は、人員を交代しながら舞われた。中には元青年団による、即席の天狗役や「カヤ一足」もいた。目録は 3 度ほど読み上げられたが、いずれも個人の家ではなく、保存会等の団体が打ったハナであった。関係者によると、いずれの演目もやや簡略化したもので、寄席マワシは 15 分程度で終了した。

獅子が舞っている間、周囲から掛け声はほとんど聞かれなかった。しかし、小学生が天狗やカヤ一足として登場すると、場が盛り上がっているように思えた。

写真 4.　寄席マワシ

お礼回り（17 時 00 分～）

獅子方連中が「宿」に戻ってくると、再度「お礼回り」が行われた（写真 5）。例年「お礼回り」は、祭りの開始前と終了後の 2 度行われている。内容は、1 度目と同様のものである。

名目上は「お礼回り」と呼んでいるが、実際は、天狗役の子どもたちが主役となって、各演目の披露および練習の場となっているようである。各演目は、本来 1 人か 2 人の天狗が中心となって舞うのだが、このときは、待機中の天狗役の子どもたちも並び、全員で振り付けの確認をしていた。高校生以上の獅子方連中だけでなく、子ども同士でも、振り付けを教え合う様子が見られた。

写真 5.　お礼回り

打ち上げ（18 時 00 分～）

「宿」では、宴会の準備が始まり、獅子舞の打ち上げが行われる。これを一刎では「ハナビラキ」と呼ぶ。参加するのは、小学生も含む獅子方連中と保存会のみで、身内であっても、獅子舞に出ていない場合は、基本的にハナビラキにも参加しない。今年は十数人がハナビラキに集まった。

このとき改めて確認をとったところ、カヤ一足には 42 歳～58 歳までの男性が参加していたことが分かった。いずれも一刎在住で、今回、祭りに合わせて帰省した参加者はいないという。

42 の歳男性からは、「参加者の顔ぶれがいつも同じで、せっかくハナビラキをしても新鮮味がない」という語りを聞くことができた。同席していた参加者がそれに同意する様子も見られたことから、他の参加者も、おおむね同じ思いを抱いているようである。人数が多いときは、「宿」の外で二次会をするなど、盛大な宴会が行われていたとのことである。

ハナビラキは 22 時ごろに終了し、全員で片付けをした後、各自解散となった。

2-2. 現在の祭礼における問題

秋祭りの参与観察から分かってきた問題点は、集落の過疎化と少子高齢化による人手不足である。

一刎は、市街地から離れていることもあり、年々町へ移り住む人が増えている。平成 17 年には一刎小学校が廃校になり、過疎化に拍車が掛かっている。今年も、小学生の子どもをもつ一家が一組、町へ出ていくことが決まったそうだ。ある 70 代女性は、「近年は空き家が目に見えて増えた」と語った。上出に住む別の 70 代女性も同様に、「最近町に引っ越す人が多く、空き家も多くなった。でもこんな住みにくい土地に、新たに人が越して来ることはまずないと思うから、人は減っていくばかりだろう」と話していた。土地の住みにくさについては、次のような語りもある。80 代女性は、「行きたいときにすぐスーパーに行けないのは不便」語っており、また、80 代男性からは「町に居る家族がときどき家に様子を見に来てくれるが、地理的に来づらいと言っていた」という語りもあった。これらの語りにもあるように、集落が山間部にあることは、人の足を遠のかせる一つの原因になっているのだろう。

また、集落内の住民自体の高齢化も、着実に進んでいる。八幡宮の長い階段は、太鼓台を押して上がるには負担が大きい。若い人は、優先的に獅子方にまわされており、太鼓台を曳くところまでは手が回らないのが現状だ。上出の祭りでは、高階神社へ行くために舗装されていない山道を通らなければいけないことから、参拝や神社の管理すら困難になってきている。

少子高齢化問題は、伝統継承にも影響を及ぼしている。現在、一刎の獅子舞には囃子方が存在しない。数年前までは、笛を吹くのが得意な数名の住民が、祭りになると自ら囃子方として参加していたというが、その人々は既に亡くなったという。生前に他の住人に継承されてはいなかったそうで、一刎獅子舞のお囃子を知っている住民がいなくなったことにより、現在は獅子方と太鼓役のみの構成となっている。宮格内では4，5年前に、一刎在住の女性たちが、新たに笛の先生からお囃子を学ぶという試みも行われたが、なかなか習慣としては定着していない。

2-3. 集落内の住民の意識

このようにして集落の人口が減ると、祭りも規模を縮小して挙行せざるをえない。そのことが、住人のモチベーションを低下させている要因になっているように思われる。しかし、なかには獅子舞の存続を危ぶみ、どうにかして続けていきたいと思っている住人もいるようだ。

一刎の獅子舞の最盛期を支えていたのは、今の60～70代の元青年団であり、獅子舞の継承に特に熱心なのも、この世代の住民である。彼らの語りの中で多く聞かれたのは、「また昔のように盛大な獅子舞をしたい」という言葉だった。上出に住む、ともに70代の高口さん夫妻は、「上出ではもう10年ほど獅子を出していないけど、もう一度くらいは出したい」と言っていた。一刎区長である山外氏も、「獅子舞の家マワシがまた実現するよう、いろいろな案を考えている」といい、獅子舞の復興について前向きに考えている。また、「宿」や氏子総代として、獅子舞に直接携わってきた人からも、同様の語りを聞いている。代々「宿」を務めている奥原さん親子と、保存会理事の森さんは、「いつかは大きな祭りを開催したい。そのためにも、今は細々とでもいいから、（祭りや獅子舞が途絶えないように）続けていかなければいけない」と語っていた。このように、住人の中には、獅子舞に愛着をもつ人々が多くいることが分かった。特に、全盛期を経験していたり、それをよく聞かされていたりする人は、「もう一度でもいいから、その頃のような光景を見たい」という思いが強いようだ。

それとは別に、「地域の伝統は受け継がなければならない」という義務感で祭りを続けている人も、少なくはない。70代の男性からは、「（下出の）獅子方保存会の場合、ずっと続いているものだし、やめるにやめられないのではないか」という語りも聞いている。さらに、前述の奥原さん親子と森さんからは、祭りや獅子舞の関係者に関して、「意図的に獅子舞を断絶させるのにもためらいがあり、結局は惰性でやらざるを得ないのだと思う」といった語りもあった。ハナビラキの最中には、参加者がこれと同様の旨を語っていた。

獅子舞の継承問題を解決するためには、そこにいかなる意義を見出せるかが今後の焦点になるのではないだろうか。思うに、人々は獅子舞を継承していく意義を探しあぐねてい

るように感じる。伝統の継承は、明確な目的や方針がないと、ともすれば惰性になりやすい。一刎の獅子舞が以前の活気を取り戻すには、定められた方針のもとに住民が一丸となって協力することが必要だ。とはいえ、それは容易に実行できるものではない。

これまでにも、一刎住人たちのあいだでさまざまな案が出ている。前述したように、区長の山外氏はいくつかの提案をしており、「上出と下出という地区の境を越えて、一刎全体で獅子舞の家マワシを復興させたい。一刎は件数が多いし広いから、すべての家を回るのは難しいが、数件分のハナをまとめて一か所で打つようにすれば、今の一刎でも家マワシはできるんじゃないか」と語っている。また、70 代男性は、「『上出も、下出と一緒に祭りをしたほうがいいのでは』という意見もあるけれど、（上出の）総代たちのなかでは、『現状のまま続けたい』という声のほうが強い」という。

一刎の特徴について、60 代女性の語りに「他の地域に比べると、昔からの慣習を律儀に守る傾向が強い」とある。それは獅子舞にも当てはまり、近年まで総代の選出や、御膳の用意など、古くからある方式に則った祭礼が行われていた。それゆえ、これまでの習慣を覆すことに抵抗がある人も多く、大きな方針転換を伴う案件は、なかなか実現には至らないのが現状である。

3.　新保地区の例から見る獅子舞継承の解決策

3-1.　新保地区との比較

本章では、同じ氷見市の獅子舞のなかでも、獅子舞の継承に成功した事例を短く紹介することで、一刎の問題点をより分かりやすくあぶりだすことをめざす。

近年では、地域の獅子舞も、行政を通して表舞台に出る事例が増えている。今年の 9 月には、新保獅子連中が、獅子舞ミュージアムで公演を行った。新保は、獅子舞の継承が一時断絶していたが、近年その復興を実現した地域である。私は、一刎の獅子舞の現状と比較するため、新保でも参与観察を行った。新保の獅子舞については、南谷が第８章で詳細に記述しているが、ここでは、新保の獅子舞を通じて感じたことを、私なりの観点から考察したいと思う。

新保では、当年は公演があったため、通常より早くに練習に取り掛かっていた。練習場所は地区の公民館で、祭り当日の「宿」も兼ねている。毎晩 8 時になると、太鼓の音を聞きつけ、20 人前後が練習に集まる。それ以外に見物しにくる住民も多くおり、広い年齢の人々が公民館に集まっていた。見物に来ていた 30 代女性は、「今年は獅子舞ミュージアムに出るので、いつもより練習は頑張っているけど、気合を入れるというよりは楽しもうという気持ちでやっている」と言っており、囃子方の女子小学生からも同様に、「楽しい」という語りが聞かれた。今回の出演については、「出演の準備にもお金が掛かる」、「面倒だ

と思っている住人もいる」などの語りもあり、必ずしも肯定的な意見ばかりではなかったようだが、獅子方や囃子方の参加者の多くは獅子舞に愛着があるように見え、彼らが主導して、公演に向けて意気を揚げているという印象を受けた。

公演本番は、新保の秋祭りと同日の9月22日に行われた。公民館では、地区の女性たちが、一日中交代で食事の世話をしており、休憩の際には昼食や夕飯が振る舞われた。食事の内容は、市販の弁当や、比較的簡単に作れる汁ものが中心である。近年はこのような段取りになっているが、昔は区長や青年団・壮年団の自治会長の家を「宿」とし、その家の親族総出で食事をもてなしていた。それでは「宿」役の負担が大きいということで、現在のやり方に転換したところ、今では祭りの運営費が数十万円単位の黒字になったという。

獅子舞の宮入りは15時からで、その後、家回りが行われる（新保では「イリミヤ」のことを「宮入り」と、「家マワシ」のことを「家回り」と言う）。回る家の順と時間はリスト化され、特に嫁バナがある家の前には多くの住民が集まり、場を盛り上げていた。家回りは、休憩を挟みながらも真夜中まで続き、翌日午前3時近くになって、ようやく祭りは終了した。帰省して祭りを見に来ていた20歳と21歳の女子学生によると、「自分たちが囃子方をしていた頃は、お囃子は10時ごろで切り上げていて、こんなに長くやっていなかった（今年は小学生の囃子方も最後まで参加した）。今年はいつもより熱心にやっている」ということであった。

以上が新保における獅子舞の様子だが、私がこの観察から感じたのは、「獅子舞ミュージアムでの公演」という一つのイベントを設定することで、獅子舞に対する住民の気持ちを高めることができていたのではないかということである。これは参加への強制力が伴うという側面もあるが、明確な目標が人々のモチベーションを高めるという効果も指摘できるだろう。

しかし、新保と一刎では、根本的に獅子舞の運営方針が異なっており、単純に、新保で実践していることを、そのまま一刎にも適用させることは難しい。さらに、新保に住む40代男性の、「（新保は）小さい集落だからこそ家回りができるし、まだ子どもがいるから少人数でも続いているのだろう」という語りに示されているとおり、両者は地域性に違いがある。

概要（第2節）で記述したように、一刎の獅子方保存会は、氷見市の援助は受けない方針をとっている。会長の山田氏ら関係者から、その理由を聞くことができた。まず、行政の援助を受けると、今年の新保がそうであったように、獅子舞ミュージアムをはじめとした、公演の依頼が入る。このような公演は、行政が関わっているため、市長などが来観するほか、新聞社やテレビ局などが取材しに来ることもある。そうなると、獅子舞を演じる団体側は、一定の体裁を整えて出演することが必要になってくる。実際、新保の場合は、道具を一新したり長めの練習期間を設けたりして、例年より準備に手間を掛けていた。だ

が一刎の場合は、主に人手の面で、それが困難な状況にある。特に働き盛りの 20 代～40 代の住民の大半が町に出ているため、練習のために一定期間戻ってきてもらうことすら難しいのが現状だ。さらに、新保はある程度、子どもの人数を確保できたのに対し、一刎では子どもの数も充分とは言えない。

また、別の面での指摘もある。保存会関係者らによると、「獅子舞ミュージアムに出る獅子舞は、確かに華があって格好良い。でも、振り付けなどが画面映えするものにアレンジされていて、本来集落でまわす獅子舞とは少し違う」というのである。一刎の住民にとって、馴染みのない「興行用」の獅子舞を演じることには、少なからず抵抗があるようだ。

一刎で、最近獅子舞が出たイベントと言えば、7 月に開催された、三十三年式年大祭が挙げられる。このときは、今働きに出ている一刎出身者や、その親族が帰郷し、100 人以上が祭りに参加した。天狗役として参加した 20 代の男性は、「今は若い人がいないから、獅子舞を続けるのも大変だと思う。今回は大祭で、たくさんの人が帰郷しているが、普段はこんな人数は集まらない」と言っていた。

上出に住む 70 代の夫婦は、「昔は、地域で祭りをやるときは、仕事や学校も休んで駆けつけたものだが、今は（土日開催に変更されたとはいえ）そういうわけにもいかないから、なかなか帰ってくる人もいない。今でも祭りが盛んならば、こちらから『人が足りないから帰ってきてほしい』と頼むこともできるだろうが、こんな廃れた現状では頼むのも申し訳ない」と、普段の祭りについて語った。

町から外れた地方の集落において、地域の祭礼および獅子舞を続けていくには、その地域に今住んでいる人間だけではなく、働きに出ている若い年代の人の手助けが必要なのは言うまでもない。住人の語りを聞いて分かったのは、その若い人が帰省するには、それなりの動機が要るということであった。今後の課題の一つは、その動機を、地域側が定期的に供給していけるかどうかではないだろうか。

3-2. 子どもの存在

現在、一刎の獅子舞は、いわば停滞した状態だ。しかしながら、どんな地域でも伝統文化の継承に困難が付きまとうのは常であり、それは今回比較した新保地区も例外ではなかった。しかし新保の場合は、集落の規模が小さく、家回りの負担が少ないことや、若い年代の参加者の割合が比較的多いことなど、獅子舞に適した状況が揃っていたからこそ、打開策が上手く軌道に乗ったと言えよう。だが、一刎の獅子舞にもまったく希望がないわけではない。

それが、子どもの存在である。二つの地域に共通して言えるのは、子どもが地域の獅子舞を下支えしていることだ。過疎化が進む昨今の地域では、子どもは貴重な、伝統の後継者となっている。一刎の場合、子どもは、「獅子舞の構成員として地域を支える」という意

味合いはもちろんのこと、地域住民の精神的な支えにもなっているように思う。秋祭りのお礼回りの際、奥原さんは、「子どもを見るのが毎年の祭りの楽しみ」と語っていた。また、小学生の子をもつ 30 代女性は、「一刎では子どもは貴重だから、せっかくなので参加させている」という。

周囲の期待の目はプレッシャーになるのではないかと思いきや、当の子どもたちは、獅子舞には進んで参加しているようである。小学生たちは、獅子舞を演じることについて「楽しい」と語っており、祭り当日も、積極的に獅子に入り、代わるがわる演目をこなしていた。まだ小学校に上がっておらず、獅子舞に参加できない子どもも、天狗役の兄弟に混じって、振り付けの練習をしている場面が見られた。

写真 6.　子どもたちが練習する様子

未成年の参加者の中でも、天狗役の男子高校生（18 歳）は、子どもたちのまとめ役として、毎回特に積極的に参加しているという。当人も「獅子舞が好きだから参加している」と言うが、その原点として、奥原さんは「小さいころから、お父さんに付いて練習なども見に来ていた。だから思い入れも深いのではないか」とのことであった。

その奥原さん親子も、「宿」となっている自宅で行われる総代の会合を、幼い頃から見ていたようである。「（総代たちは）獅子舞のこと一つにも、すごくもめていた覚えがある。それだけ熱が入っていた」と当時を振り返ったうえで、「（私たちは）小さなころから身近なところに獅子舞があって、熱心な大人をたくさん見てきた。そんな環境にいたからこそ、余計に獅子舞に愛着が湧く」と語っている。

このような語りが得られたことを踏まえると、身をもって獅子舞を体験している、今の一刎の子どもは、将来的に獅子舞に愛着をもつのではないかと、私は思っている。一刎の若い世代の人々が、膠着状態にある一刎の獅子舞の将来を打開していくこと願いたい。

おわりに

一刎の獅子舞に限らず、地域の伝統の継承問題は、今後も無くなることはないだろう。過疎化や伝統的慣習の衰退は、誰にも止めようがないことであり、継承者自身が時代に歩み寄っていかなければ、伝統を長く存続させていくことはできない。

本章で取り上げた「地域の獅子舞」は、その地域の中で継承していくものという色合いが強く、なかなか方針転換しづらいという課題がある。地域住民自身が何らかの打開策を考え、実行していくことが理想的であろうが、文中で繰り返し述べたように、その実現は容易なことでない。一方で、本章では、断絶した獅子舞を新たに復興させる新保地区の事例も紹介した。復興に成功する地域に共通する条件や取り組みの方法を具体的にここで挙げることはできないが、いずれにせよ、獅子舞に対して愛着をもつ人間が必要不可欠であることは確かだろう。私は、地域住民が獅子舞に愛着をもっている限り、伝統継承への道が閉ざされることはないと信じたい。

一刎で調査をして分かったのは、この地域にも、獅子舞を存続させたいと思っている住民が多くいるということである。「もう一度獅子舞をやりたい」という上出の人々や、「これからも続けていきたい」という下出の住民の語りにもあるように、彼らの獅子舞への思いは共通している。また、これから一刎の伝統を継承していく子どもたちも、獅子舞に参加することを楽しんでいることを考えると、一刎の獅子舞の存続は、決して不可能ではないはずである。

謝辞

この報告書を書くにあたって実施した、文化人類学的なフィールド調査では、多くの方々にご協力頂きました。一刎に縁も所縁もない私が突然家にお邪魔するなどして、はじめはさぞ不審に思われたでしょうが、それにもかかわらず、快くお話を聞かせてくださった皆様には、本当に感謝しております。獅子舞に関して何度も調査に協力してくださった山田義良さん、森清人さん、ならびに獅子舞関係者の皆様、宿に関する貴重なお話を聞かせてくださったばかりか、取材の手配までしてくださった奥原さん、お忙しい中、快く取材を引き受けてくださった山外さんご夫妻、そして獅子舞に対する思いをたくさん聞かせてくださった高口さんご夫妻、その他調査協力してくださった一刎住民の皆様に、お礼を申し上げます。

10.　祭礼の運営と継承――一刎八幡宮奉拝三十三年式年大祭の事例より

横江　彩香

はじめに

私の出身地である富山市婦中町の農村では、かつて獅子舞を行う春祭りが行われていたが、少子化や運営側の高齢化が原因で、1996 年を最後にその伝統は途絶えてしまった。その影響もあって、私は祭り、特に集客を目的としない、地域の伝統的な祭りの継承や運営に興味があった。初めて一刎を訪れた際、この村にどのような祭りがあるのかを調べてみたところ、ちょうど今年（2013 年）の 7 月 21 日に、「一刎八幡宮奉拝三十三年式年大祭」という祭りが開催されると知った。これは 33 年に 1 度しか行われない大祭で、例年行われている春祭りや秋祭りなどとは異なるものである。本章では、大祭の運営を準備段階から記述することで、過疎化や 33 年に 1 度しか実施されないという希少性の影響を明らかにすることを試みる。そのうえで、この大祭を継続していくために必要なこととはなにかについても考察を行う。

調査では、大祭の運営を担う宮総代を中心に、一刎のすべての住人を対象に聞き取り調査を行った。また大祭の当日には、大祭の様子を観察すると同時に、大祭の中の催しの一つである稚児参りの参加者たちに聞き取り調査を行った。

1.　一刎八幡宮および一刎八幡宮奉拝三十三年式年大祭の概要

一刎八幡宮（写真 1）は「宮格内」、「番場出」、「浦出」、「谷内出」、「奥出」、「中田浦」の住人が氏子となっている。以下、この 6 つの地区 [1] のことを「氏子圏内」と呼ぶ。（唯一ここに含まれていない「上出」の住人は、一刎内にあるもう一つの神社、高階社の氏子である。）宮司を務めるのは、氷見市市街地にある日宮神社で宮司を務める吉川氏である。一刎で例年行われる祭りには、正月元旦の歳旦祭、3 月の祈年祭、4 月の春祭り、6 月の除蝗祭、7 月の祇園祭、9 月の秋祭り、11 月の新嘗祭、などがある。八幡宮の管理や祭りの運営は宮総代と宮司が中心となって行われている。宮総代は、各地区の総代株と呼ばれる総代となる資格を持った者の中から選任された代表者と、総代長の 7 人によって構成されている。宮総代の任期は各地区で異なっており、2 年前後で交代することになっているが、総代長は例外で、具体的な任期は定められていない。

2003 年には、宮総代が中心となって、一刎八幡宮や一刎の様々な事柄に関する歴史を詳細に記した『一刎八幡宮史』を発行した（一刎八幡宮史編集委員会 2003）。この書籍を発行

する発起人となった当時の宮総代長の藤井氏によると、この書籍を発行した狙いは、「今後、一刎を離れて外部に出ていく住人達にも一刎の歴史や文化を忘れずにいてもらうため」だという。

奉拝三十三年式年大祭は、33 年に 1 度開催される祭りである。『一刎八幡宮史』によると、その周期が 33 年である理由は、「「三」は芽出度(めでた)い数、それを重ねて「三十三年」毎にとは、永遠に芽出度くしていく願(ねがい)」、ということである。

奉拝三十三年式年大祭において、形式上もっとも重視されるのは、本殿（写真 2）を開放し、この日以外は見ることのできない御神体を拝む「御開帳」である。また大祭の間は、稚児に上がった子供たちが衣装を着て行列をつくり、八幡宮に参拝する稚児参り、楽人神楽によって披露される巫女舞、一刎の獅子方保存会によって披露される獅子舞など様々な神事が催される。

写真 1.　一刎八幡宮

写真 2.　扉が閉じられた本殿

2.　祭りの準備および運営について

2-1.　宮総代による準備

宮総代が大祭の準備のために集まりはじめたのは、昨年（2012 年）の 12 月であった。5 月の時点で宮総代のひとりに話を聞いたところ、「これからの準備も、話し合いで一つずつ決めごとを決めていくことが中心となる」とのことだった。

今回、式次第に関する様々な事柄について話し合う必要があったのは、33 年前の資料が不足していたため、前例に則った祭りの運営をすることが困難な状況になってしまっていたことが原因である。残されていた資料は、日宮神社に保管されていた大祭の式次第と祝詞、また 33 年前の大祭の際に一刎の住人によって撮影されていた数枚の写真（写真 3）のみで、あとは現在の宮総代を中心に前回（33 年前）の大祭を経験した世代の人びとの記憶だけであった。33 年前という遠い過去の記憶であるため、それも話し合いが難航した原因

となったようだ。

大祭の直前の 7 月になると、拝殿の中での道具の配置や詳しい流れなどについて、宮司の助言を受けながら準備が進められた。また、大祭に必要な道具は宮司が中心となって用意し、大祭 1 週間前の 7 月 13 日には、神事で使われる道具が宮総代長の自宅に運び込まれていた。

写真 3.　33 年前に撮影された写真

2-2.　稚児参りの準備

今回の大祭における稚児参りの対象年齢は、一般的な稚児参りよりも幅広く、0 歳から小学生までとして募集された。宮総代の間では稚児に上がる子供が最低でも 20 人は必要であると考えられていたが、一刎には小学生以下の子供が数人しかいないため、稚児参りを実施するために十分な人数を集めるためには、どうしても一刎の外に住んでいる子供を呼び寄せる必要があった。稚児の募集方法としては、一刎内に数か所設置されている掲示板への広告の掲示（図 1）や地元のケーブルテレビでの呼びかけ、家族や親戚に適齢の子供がいる一刎住人への呼びかけなどが主なものだった。これらの効果もあってか、最終的には兄弟で参加する家族を含めて、27 の家族が稚児参りに参加することとなった。そのうち一刎在住の家族は 2 家族で、そのほかは一刎外部からの参加となった。

稚児参りのためには、稚児の食事や着付けをする「稚児の宿」を用意する必要がある。当初は公民館が宿の候補として挙げられていたが、公民館から八幡宮までは距離があり、7 月の炎天下の中で重い衣装を着た子供を歩かせるのは難しいのではないかという意見が上がった。そこで、宮総代のなかで、八幡宮からの距離が近い場所に住む山田氏の家を稚児の宿とすることとなった。稚児を出す家からは、稚児 1 人につき 1 万円の負担をしてもらうことになっており、稚児と稚児の家族の分の弁当代、貸衣装代、着付け代などにあてられる。

稚児の着付けや化粧は、宮総代が自ら施すのは難しいという判断から、仏具店や縫衣店の店員に依頼することになった。稚児の家族あてに事前に配布されたお知らせには、家族

が安心して子供を稚児に上げられるよう、「着付け、お化粧はすべてベテランスタッフがお世話いたします」と記載されていた。また、稚児は衣装のほかに「幸運の鈴」という鈴を持って歩くことになっており、稚児参り終了後には記念品として持ち帰ることができることになっていた。

図 1.　稚児の募集を呼びかける広告

2-3.　巫女舞および獅子舞の準備

楽人神楽による巫女舞の準備の中心は、外部からの人集めであった。今回は、大祭でしか見ることのできない「浦安の舞」が舞われるとのことだった。33 年前には一刎在住の 2 名の女子中学生が巫女舞を舞ったそうだが、現在の一刎には適齢の女子が十分いないため、石川県の白山比咩神社の本職の巫女 2 名に依頼し、本衣装である十などの楽器を使って神楽を演奏してもらう楽人は、富山県内の神主 4 名に依頼した。これらの人集めはすべて宮司が中心となって行っており、巫女や楽人の人選については、宮総代は深くはかかわっていない様子であった。巫女と楽人はそれぞれ異なる神社に依頼しているため、音合わせをする時間は大祭の当日のみの極めて短いものとなった。万一音合わせがうまくいかなかった場合には、生演奏ではなく CD による音源を利用して巫女舞を披露することを宮司が宮総代に提案していた。

獅子舞の準備に関しては、宮総代ではなく獅子方保存会が中心となって進めていた。一刎八幡宮の氏子圏内には、獅子方保存会が所持する大獅子と宮格内が独自に所持する小獅子が存在する。普段の春祭りや秋祭りではこの双方が同時に披露されることはないのだが、今回の大祭では、この 2 つの獅子が同時に舞うこととなった。獅子舞の練習は、例年の祭

りと同様に「獅子の宿」と呼ばれる役割を果たす家の前庭で行われており、毎日 17 時ごろから練習が開始されていた。大祭の前日である 7 月 20 日には、練習のほかに、獅子頭とカヤを縫い付ける作業や、御祝儀であるハナの目録や太鼓台の用意なども行われていた。

3. 前日および当日の様子

3-1. 祭りの進行

一刎八幡宮奉拝三十三年式年大祭の前日から当日にかけてのスケジュールは、表 1 にまとめたとおりである。

表 1. 大祭のスケジュール

日	時間	
7/20（土）	19:00	前夜祭（厄神祭）
	20:00	獅子舞の練習
7/21（日）	11:30	稚児の受付開始
	15:00	稚児参り
	15:15	楽人神楽による巫女舞
	15:45	御開帳
	16:15	獅子舞

大祭前日の 7 月 20 日は日中から大祭に向けた準備が進められた。八幡宮ではトイレの設置などの設備が整えられ、稚児の家族と宮総代の休憩所となる稚児の宿では、およそ 90 人が同時に休憩をとれるようにと、3 部屋の和室をつなげて広い 1 部屋とするために部屋を仕切る襖を取り去っていた。また、簡易的な受付の設置や座布団の用意なども前日の昼過ぎには終えられていた。

そして 19 時ごろから八幡宮で「厄神祭（やくじんさい）」と呼ばれる前夜祭が始まった（写真 4）。宮司によって一刎八幡宮の縁起が読み上げられるなどの祈祷が行われ、終了後には氏子の女性たちによって参加者に赤飯が振る舞われた。前夜祭が終了すると獅子の宿に獅子方が集まり、獅子舞の最終練習が行われた。

写真 4.　前夜祭中の拝殿

大祭当日の 7 月 21 日は、早朝から宮総代が八幡宮に集まり、拝殿から神輿（写真 5）を運び出す作業をしていた。大祭の運営には、宮総代や宮司以外にも宮総代の奥さんたちもかかわっており、男性は主に車で八幡宮を訪れる人のための交通整備、女性は主に稚児の宿の手伝いを務めていた。11 時半ごろから稚児の宿となる家での稚児の受付が開始された。稚児の家族には 1 人 1 つずつ弁当が手渡されており、集まった人びとの多くはそれらを食べたり座敷でくつろいだりしながら、稚児の着付けが始まるのを待っていた。実家や祖父母の家が稚児の宿の近くにある家族は、受付を済ませた後にいったん家に戻って、着付けが始まるまでの時間をゆっくりと過ごしていた。稚児の着付けが始まると、写真撮影を依頼された一刎出身の男性が、稚児の家族の写真を、着付けが完了した順に撮影していた。稚児の宿では、子供たちが幸運の鈴を持って楽しそうに遊ぶ音や、きれいに着付けや化粧を施されてうれしそうにしている女の子や、子供たちを見ながら歓談する大人たちの声などが重なって賑やかで和やかな空気が流れていた（写真 6 および写真 7）。

写真 5.　拝殿前に設置された神輿

写真 6.　稚児の宿の様子

写真 7.　稚児参り前の稚児の様子

15 時になると獅子方の待機場所である宿から大獅子と小獅子の 2 頭の獅子と宮司や楽人たちが稚児の宿に到着し、稚児参りが開始された（写真 8 および写真 9）。まず獅子方によって稚児の宿の前で数分間獅子舞が演じられると、その後爆竹の音が鳴り、それを合図に行列が歩き出した。2 頭の獅子を先頭に八幡宮へ向けて歩き出し、その後ろに宮司、楽人、稚児の家族と続いた。稚児たちは特に整列をするようなことはなく、稚児の家族と見物人が入り乱れて楽人に続き八幡宮へ向けて歩いていた。獅子方は獅子舞のための太鼓の音に合わせて舞い、楽人は神楽を演奏していたため、行列の場では様々な音が聞こえていた。

行列が八幡宮の階段を登りきると、宮司、楽人、宮総代、稚児の家族が拝殿の中へと入り、祈祷がはじめられた。祈祷や宮総代による玉串奉奠（ほうてん）が済まされると、楽人の生演奏と歌に合わせて、2 人の巫女が巫女舞を披露した（写真 10）。見物人や参拝に訪れていた一刎の住人達は拝殿の縁側で祈祷や巫女舞の様子を見る人もいれば、拝殿の外で近隣住人や親戚と語り合いながら祈祷が終わるのを待っている様子の人もいて、思い思いの時間を過ごしていた。稚児の子供たちは祈祷の間、疲れてしまって眠りそうになっている子や、暑いのか衣装を脱ごうとしている子もいたが、ほとんどが両親と一緒におとなしく祈祷を聞いている様子だった（写真 11）。

写真 8.　稚児参りの様子 1

写真 9.　稚児参りの様子 2

写真 10.　巫女舞の様子　　写真 11.　祈祷の間の拝殿の様子

祈祷と巫女舞が終わると、本殿の御開帳が始まった。人びとは御神体を一目拝もうと、拝殿の脇から本殿にかけての行列をつくった（写真 12）。本殿は階段を数段上がった小高い場所にあり、本殿の中には御神体をはじめとする数点の宝物が収められている。その間、宮総代達は拝殿の脇で、参拝を終えて本殿のある場所から傾斜を下ってきた参拝者達にお神酒を振る舞った。

写真 12.　本殿への行列

御神体の参拝は 30 分ほどで終了した。ほとんど全員が参拝を終えたころに、獅子方保存会による獅子舞が開始された（写真 13 および写真 14）。獅子舞の見物人には、獅子方の家族や近隣住人、稚児参りの衣装から着替えを済ませた稚児の家族など多くの人がいた。この演舞も、大獅子と小獅子の 2 頭が並んで舞うというものだった。一刎の住人、一刎に縁のある人や団体が打ったハナの数だけ演舞が行われたが、獅子方の中にはその数を把握していない人も多いように見えた。演舞をはじめる前に毎回ハナの目録が読み上げられ、ハ

ナの金額や内容によって演目が変更された。そのため、誰がいくらのハナを打ったのかが一目でわかるようになっている。高額のハナを打つことで、人びとは一刎の獅子舞や今回の大祭への思い入れの強さを表現しているようにも感じられた。獅子舞には、現在は一刎に住んでいない元住人の男性たちも時々加わっていた。獅子舞の演舞は日が暮れる直前まで続けられ、大祭は終了した。

写真 13.　獅子舞の様子 1

写真 14.　獅子舞の様子 2

3-2.　大祭の参加者の語り

大祭の当日、訪れていた人びとに話を聞いた。まずは稚児の宿で、稚児の保護者達に、子供を稚児に上げようと思ったきっかけや理由を尋ねた。きっかけとして多かったのは、「一刎の住人に勧められた」というものだった。「（稚児の）祖母が一刎出身で、稚児に上がらないかと声をかけてもらった」と語る人もいれば、「仕事の関係でよく一刎を訪れており、親しくしている一刎住人に子供を稚児に上げないかと誘われた」と語る人もいた。事前の調査で、今回の稚児参りに参加するには一刎と何らかの縁がある人ばかり、という情報を得ていたが、その縁の形にも様々なものがあることがわかった。

また、別の理由として多く聞かれたのが「子供の成長の記念にしたいから」というものだった。一般的に稚児の対象年齢とされるのは小学校低学年の児童までで、その年齢を超えると稚児に上がることはとても難しくなる。そのため、たとえ子供が嫌がったとしても、成長してから後悔することがないようにと、この年齢の間に稚児に上げておきたいと考えている親が多かったようだ。「上の子（今回稚児に上がる子供の姉や兄）は稚児に上がったことがあったけど、下の子（今回稚児の上がる子供）はまだだったから」という答えも多く、兄弟間で不平等のないように子育てをしたい、という両親の思いが感じられた。

稚児参り終了後、祈祷や獅子舞の合間に参加者たちに大祭を訪れた目的などを尋ねたところ、「親戚が稚児に上がるから、晴れ姿を見に来た」とか、「家族が獅子舞に出るから見に来た」といった声が多く聞かれた。一方で、「御神体を拝みたい」という声も聞かれたが、その数はあまり多くなかった。宮総代などの大祭の運営に携わらない参加者たちにとって

は、家族や親戚が深くかかわる稚児参りや獅子舞などのほうが、大祭に参加する目的として重要な要素と考えられているようであった。

4.　大祭の将来性

例年行われる祭りと違って、奉拝三十三年式年大祭は 33 年に 1 度しか行われないため、八幡宮のすべての祭りの運営を担っている宮総代でも、どのように運営すべきかわからない点が多い。そのため今回の大祭の運営において、宮総代は 33 年前の資料や記憶を参考にしたが、それでも簡単だったわけではない。その苦労を踏まえて、今回の大祭では、祭りの流れや人びとの様子を詳しく記録しようとする動きが見受けられた。宮司である吉田氏もその 1 人で、大祭の 1 週間前には、「今回の大祭の流れを記録してデータ化（＝文字化）して、33 年後にも残るようにしようと思っている」と語っていた。今年の大祭での苦労を踏まえ、将来の大祭の運営がよりスムーズなものになることを願ってのことである。また、大祭中多くの人びとによって撮影されていた写真を集めるなどすれば、過去を懐かしむための記録としての役割だけでなく、将来の大祭の運営の助けとなる役割を果たすとも考えられている。

その一方で、33 年後の大祭の運営は難しいのではないかという意見も多く聞かれた。その理由として挙げられるのが氏子の高齢化と集落の過疎化である。一刎は氷見市市街地から離れた位置にある集落であり、通勤、通学、日用品の買い物などの際には険しい坂道を登り降りする必要がある。移動には車が必要不可欠だが、スクールバスでの送迎がない中学生や高校生は自力での通学が困難である。そういった点を不便に感じている若い世代が次々に一刎を離れ、氷見市市街地へ移り住んでいるのが現状である。大祭から 2 か月が経ったころに宮総代の方々に話を聞くと、「33 年後には限界集落になっているかもしれないし、もしかしたら集落自体がなくなっているかもしれない」とか、「たとえ 33 年後に大祭を実行できたとしても今年ほどの規模のものにするのは不可能だろう」という声が聞かれた。

それでも、今年の大祭に訪れたという氏子の方々に、「33 年後も大祭は続いてほしいと思うか」と尋ねると、「一刎が長年続けてきたことだから続いてほしい」、「なくなってしまうと寂しい」、「先祖をまつるための祭りだから、たとえ形式だけになったとしても続いてほしい」とのことだった。一刎が過疎化していくことは仕方のないことと考える住民が多いなかでも、一刎の伝統は消えてほしくないと願っている住民が多いことがうかがえた。

5.　まとめと考察

一刎八幡宮奉拝三十三年式年大祭には、2 つの大きな特徴がある。その一つは 33 年に 1

度しか開催されないこと、そしてもう一つは過疎化の進む農村で開催されることである。今回の調査では、これらの特徴が、大祭の運営や継承にどのような影響を与えるのかを中心に調査してきた。

大祭の準備については、33 年前から残されている資料が少ないことが大きな影響を与えているという声がよく聞かれた。春祭りや秋祭りなどのほぼ毎年行われるような祭りであれば、資料などなくとも前年の経験をもとに、例年通りの運営方法を前提に準備を進めればよいが、前回の開催から 33 年もの月日が経ってしまっている今回の大祭では、大祭の運営にまつわる具体的な事柄のすべてを話し合いによって決定しなければならない。今回は大祭のなかで、稚児参り、巫女舞、獅子舞といった催しが行われたが、これらを行うか否か、またこの 3 つ以外にも何か催し物をするか否かといったことも宮総代たちの間で意見を出し合って決定していく必要があった。そのため、大祭が開催される前年の 12 月から、延べ 8 か月の時間をかけて、宮総代は話し合いを繰り返してきた。

また、前回の大祭に則った運営の仕方ができなかった原因は、資料不足だけではない。前回の大祭の開催から経過した 33 年という時間の間に、一刎の状況が大きく変わったことも大きな影響として考えられる。33 年前に比べ、一刎の人口は大きく減少しており、稚児参りや巫女舞などの催しを一刎の住人だけでは行うことができず、外部への依頼が必要となった。このように、33 年前には可能だったことも、現在ではできなくなってしまっている。今回の大祭は、一刎八幡宮の氏子だけでなく、外部の人びとに助けられながら開催することができたものだったといえるだろう。

大祭の当日は、想像していた以上に参拝客が集まったという印象があった。宮総代が保管していた 33 年前の写真の様子と比べると参拝者は大きく減少しているが、現在の一刎の人口を考えれば、多くの参拝者が集まったということができる。また、私の予想では、こういった大祭には信心深い高齢者が多く参拝に訪れるものだと思っていたのだが、実際には、現在は一刎から離れて暮らしている若い世代の人びとの参拝も多く見受けられた。その要因として考えられるのが、稚児参りと獅子舞の実施である。稚児参りには 27 の家族が参加しているため、子供の晴れ姿を見るために集まる親族の数はその 2 倍にも 3 倍にもなる。獅子舞も同様で、獅子方の家族や親戚、そのほかにも一刎の獅子舞を楽しみにしている人たちが、大祭を訪れ、獅子舞を楽しんでいた。そういった点から、今回の大祭は、運営する宮総代だけでなく、稚児参りや獅子舞に参加する、一刎に縁のある多くの人びとによって盛り上げられたものだったと感じられた。

一方で、稚児参りや獅子舞を目的としている人の数に比べて、大祭の本来の趣旨である御開帳のために八幡宮を訪れた人の数は少なかった。これは、若い世代が過去に比べて信仰心を持たなくなったということに加え、一刎の過疎化と高齢化が進行したことが原因となっていると考えられる。大祭の前後に一刎八幡宮の氏子圏内で、氏子を対象に調査を行

ったところ、「大祭には行かない」と語る人のなかには足腰が弱っていて長距離の歩行が困難だったり、病気で体が弱っていたりする高齢者や、「行きたいけど大祭の前に喪中に入ってしまって行けなかった」と語っていた人が多かった。こういったことから、たとえ信仰心があったとしても、高齢化にともなう身体的な事情から、八幡宮を訪れることができなかった人も多かったことがうかがえた。そんななか、私が意外に感じたのは、子供を稚児に上げたいと思っていたのは稚児の親であったということである。私が想像していたのは、稚児の両親は子供を稚児に上げることに消極的で、稚児の祖父母に勧められてやむなく稚児参りに参加するといったものだったが、実際には、子供の成長の記念にしようと積極的に稚児参りに参加していた。これは、いわゆる「信仰に裏づけられた行為」とはいいがたいかもしれないが、子供を神事に参加させることを何かしら良いこととしてとらえているという意味では、信仰と無関係ともいえない。

33 年後の大祭の開催は、現在の一刎の過疎化と高齢化の状況をかんがみると、とても難しいものであると考えられる。33 年後にたとえ実行できたとしても、今回のように、稚児参りや獅子舞も一緒に実施するような大祭は不可能だろう。しかし、『一刎八幡宮史』の奉拝三十三年式年大祭に関する記述の中には「一刎の御先祖のお姿を、三十三年の将来にも立派に拝めるかどうか。今、日本の直面する世界の革命の嵐は厳しい」という記述があることから、前回の大祭が開催された 1980 年にも不安を抱えていたことが想像できる。33 年前の大祭の運営に関する詳しい資料がほとんど残されていなかったのは、今回の大祭が行われるという確信が持てなかったことも原因なのかもしれない。さらにいえば、当時よりもずっと過疎化や高齢化が進みつつあるいま、さらに 33 年後のことを楽観視するのは、誰にとっても難しいことだろう。しかし私は、未来のことはまだ誰にもわからないのだ、とあえて言いたい。というのも、33 年後の開催を不可能なものと決めつけずに、確実に祭りの運営にかかわる情報を将来に伝承していくことこそが、33 年後の大祭を可能なものに近づける唯一の手段だと思うからである。

今回の調査を通して、私には、一刎がいかに伝統を重んじる地域であるかをじかに感じることができた。一刎では、本章で紹介した宮総代の方々が行っている祭りの運営や八幡宮の維持のための活動、一刎八幡宮史の発行だけでなく、一刎に伝わる伝説を書き記した看板を一刎の各所に立てるなど、一刎の歴史や伝統を後世に残すための様々な工夫がされている。こうした一刎の伝統を残そうとする努力がこれからも継続されていけば、たとえ一刎の人口が減少したとしても、33 年後までに一刎に残った人びとや、一刎の外へ出ても一刎との縁を感じながら生活する人びとたちによって、大祭は小規模であったとしても継続されていくのではないだろうか。

注

1）一刎内では宮格内や上出などの集落に相当する地区区分は「垣内(かきうち)」と呼ばれているが、ここでは一貫して「地区」と呼ぶこととする。

参考文献

一刎八幡宮史編集委員会、2003 年、『一刎八幡宮史』、一刎八幡宮氏子総代

11.　氷見市の伝統的婚礼儀礼の変化と衰退――一刎地区を調査地として

伊藤　綾奈

はじめに

私の知り合いには、最近結婚したという人が何人かいる。彼らに話を聞くと、その全員が、ウエディングドレスを着て、チャペルで式を挙げたのだという。またテレビＣＭやドラマを見ていても、ウエディングドレスを着て、チャペルで挙式、ホテルで披露宴というのがほとんどである。だが、日本人の多くは、ほんの一昔前まで、白無垢や振袖を着て、自宅で結婚式を挙げていた。例えば、1960 年代に結婚した現在 70 代の私の祖母によると、当時は結婚式といえば、振袖を着て、自宅で式を挙げるのが一般的だったという。私は、そういった日本の伝統的な婚礼儀礼は、すでに日本各地で完全に廃れてしまったのだろうか、という疑問を持っていた。他方で私は、氷見の伝統的な婚礼儀礼の中のひとつ、「縁の水」の存在を、同じ文化人類学研究室に所属していた先輩の卒業論文を通じて知ることとなった。本章では、「縁の水」を軸として、氷見市のなかでも一刎地区における婚姻儀礼の変化について、主に聞き取り調査を踏まえた記述と考察を行う。

1.　明治・大正・昭和 30 年代頃までの嫁取り

本節では、かつての婚姻儀礼とその準備、すなわち「嫁取り」の概要を、『氷見の婚礼装束展―打掛けを中心として―』（氷見市立博物館、1993 年、pp.31-36）からまとめる。

氷見では、婚礼のことを「嫁取り」と言った。嫁取りは、「嫁迎え」、「縁の水」、「内仏詣り」、「盃事」、「披露宴」、「草鞋酒（わらじざけ）」の順で執り行われた。いずれの儀式も、現在のように結婚式場で行われるのではなく、ほとんどが婿方の家で執り行われていた。嫁取りには、一年のなかでも適当とされる時期があった。田植えから稲刈りまでが行われる春から秋、いわゆる農繁期は避けられ、農作業が忙しくない農閑期の 12 月から 1 月にかけて行われるのが普通であった。

戦前の頃まで、日中に儀式を行う「昼嫁取り」を行ったのはよほどの大家のみで、一般的な世帯では「晩嫁取り」、すなわち夕方に嫁迎えを行い、夜から翌朝にかけて儀式を行うというスタイルが普通であった。嫁取り当日、婿方の家に向かう前の花嫁は、まず生家の仏壇を拝し、両親に別れの挨拶をする。遠方や大家に嫁ぐ場合は人力車を頼むこともあったが、村内や近くの在所へ嫁ぐ場合は、たいてい弓張提灯を下げて歩いていった。花嫁本人と仲人人（なかどにん）のほかは、親代わりとして伯父や伯母が「親代（おやしろ）[1]」となり、家によっては道具箱

を担ぐ「道具人足衆」3，4 人から 7，8 人と、花嫁の身の回りの世話をする「腰元」らが同行した。現在では想像しにくいことだが、花嫁の両親がそろって嫁取りに出席することは珍しく、同行するのはせいぜい母親だけであった。花嫁の両親がそろって、嫁取りの一行に加わるようになるのは、戦後になってからである。

婿方の家に着くと、まず道具[2]の受け渡しがある。その後、「縁の水」あるいは「合わせ水」という儀式を行う。これは、花嫁の生家の水と嫁ぎ先の水をひとつに合わせ、花嫁が飲み干すもので、花嫁が生家から竹筒や銚子に入れて持参した井戸水と婿方の井戸水を、花嫁の持つ盃に同時に注ぎ入れ、花嫁がこれを飲み干した後、盃を嫁ぎ先の玄関先の石にぶつけられて割る、という儀式である。盃が割れると、一同口々に「めでたい、めでたい」といい、割れない場合は「足で踏んででも割るもんじゃ」などと言って、嫁方の親代が踏みつけるなどした。割れる方が縁起が良いということなので、婿方では割れやすいように、なるべく薄手の盃を用意したという。花嫁の盃に水を注ぐのは、嫁方では親代の女性か仲人人の女性で、婿方では舅の姉妹などが行い、盃は普通、嫁方の親代が割った。

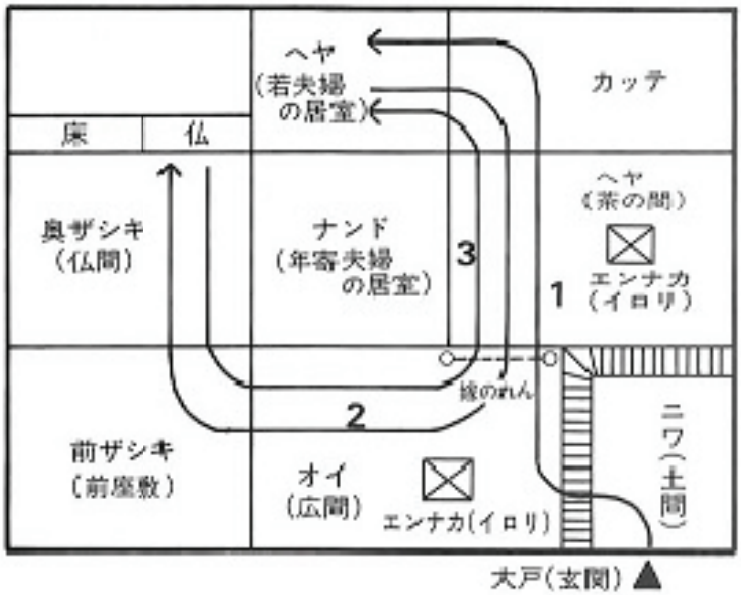


図 1.　家の間取り図および花嫁が家にあがってからの婚姻儀礼を行う上での経路
(『氷見の婚礼装束展―打掛けを中心として―』より抜粋)

「縁の水」の後、花嫁は親代らとともに「オイ」と呼ばれる広間で婿方の人たちに挨拶をする。そしてお手引き役の女の子 2 人に導かれ、嫁のれん[3]をくぐって、嫁取りの後に若夫婦の寝室となる「へヤ」に入る（図 1 の経路 1)。そこで、「嫁迎え」の際に着用していた、丸帯を締めた赤や黒などの色物の振袖から、白色の振袖や本上着に着替えた。ここで少し休んだ後、花嫁と女性の親代らは、姑の案内で再びお手引きの女児に導かれ、嫁のれ

んをくぐる。オイを通って仏間で仏壇を拝し、花嫁は嫁ぎ先の先祖に入家の挨拶を行った（経路 2)。これを「内仏詣(ないぶつまい)り」という。あらかじめ、仏壇の前に座る婿の父親のガイモモ[4] の音を合図に、花嫁らは仏壇を拝し、次のガイモモの音でもう一度、嫁のれんをくぐり、ヘヤに戻るものとされていた（経路 3)。

花嫁たちがヘヤに戻ると、次にそこで「盃事」行われた。嫁と婿の両親、あるいは嫁と婿の父親が盃を酌み交わし、親子の縁を結ぶ。いわゆる「オヤコサカズキ（親子盃)」である。この後、家によっては「オチツキの膳」を出した。この膳には白い丸餅ふたつを入れた汁椀と、2 匹を腹合わせにして水引で縛った干鰯や黒豆などが並べられた。夫婦仲がよくなるようにという祝意を表すため、背中合わせにして水引で縛られた干鰯を花嫁ら自身に腹合わせにさせるというところもあったようだ。

花嫁が婚家に入るのが、夕方から夜にかけての場合が多かったため、「披露宴」の祝宴が始まるのは夜も更けてからであり、宴は大抵が翌朝まで続けられた。婿方の親戚衆が給仕を務め、嫁方一同にできるだけたくさんの酒をふるまった。宴の終わりにあたって、朱の輪島塗りの一番大きな盃で、嫁方の男性の親代をはじめ、人足衆に酒をふるまう。人足衆に大盃が行き渡ったところで、婿方が謡曲「高砂」の千秋楽に合わせ、座敷から「カッテ」と呼ばれる台所へ大盃を引くと、祝宴は終了する。

祝宴の後、嫁方への土産などを担いで帰る人足衆に、冷酒が湯呑み茶碗でふるまわれた。この酒を「草鞋酒」、あるいは「道中酒」と言う。彼らが酒を呑み干した後、玄関先の石に投げ捨てて割ってしまうものされていた。これはこうした役では二度とこの家の敷居を跨がないという気持ちの表れで、たんすや長持等を担いできた垂木の棒も、土産を入れる道具長持の分を残してこの場で二つに折られてしまった。宴の終わりに持ち出される大盃にしろ、嫁方一同にできるだけたくさんの酒を飲んでもらうのが一番の接待だとする、婿方の気持ちの表れでもあった。

2. 儀式の変遷

今回の調査では、一刎地区在住または出身の男女合計 41 人に対して、挙式に関する聞き取り調査を行った。以下の表 1 は「結婚式を行いましたか。（挙式をしたならば）どこで行いましたか」という質問に対する回答を、挙式した年代に分けて集計し、まとめたものである。なお、1980 年代が表 2 の 1980 年代の聞き取り人数と比べて 1 人少ないのは聞き忘れによるものである。

70 年代までに結婚式を挙げたと答えた人は、全員が家で結婚式を挙げたと答えている。80 年代には結婚式場やホテルでの挙式が一気に増加し、それ以降は 7 割以上程度（19 組中 13 組）の人が家以外で結婚式を挙げたと答えている。この結果から、結婚式を挙げる場所

が家から結婚式場やホテルに変わっていったのは80年代あたりであるということがわかった。

表 1.　挙式の有無、場所の変遷

結婚式を行った年	1941～1950	1951～1960	1961～1970	1971～1980	1981～1990	1991～2000	2001～2012
家で挙式した人数	1	5	8	6	1	2	1
式場で挙式した人数	0	0	0	0	3	4	6
挙式していない人数	0	0	2	0	0	0	2
計	1	5	10	6	4	6	9

次に、一刎地区在住または出身の男女計 42 人に対して、縁の水に関しての聞き取り調査を行った（なお、この 41 人のうちいずれの男女も婚姻関係にはない）。以下の表 2 は「縁の水を執り行ったことがありますか。」という質問に対しての回答を、結婚式が行われた年代別に集計し、まとめたものである。70 代までは全員、(22 組中 22 組)、80 年代、縁の水を 8 割の人々（27 組中 25 組）が執り行っているが、90 年には 5 割、2000 年代には 2 割程度の人々のみ執り行ったという結果であった。ここから、縁の水の存続にとって 90 年代あたりが大きな転換期であったということがうかがえる。また割合に減っているにしても、縁の水は 2000 年代続けられており、現在も存続するものである。

表 2.　縁の水を執り行った人数の変遷

結婚式を行った年代	1941～1950	1951～1960	1961～1970	1971～1980	1981～1990	1991～2000	2001～2012
縁の水をした人数	1	4	10	6	4	3	2
縁の水をしていない人数	0	1	0	0	1	3	7
計	1	5	10	6	5	6	9

また、表 1 と表 2 を比較すると、結婚式を執り行う場所が、家からホテルや式場といった家以外の場所に変わっていったことが縁の水の衰退に一歩先立っているということがわかる。

3.　結婚式についての語り

前節で結婚式の様子の変遷をごく簡単に表で示したが、本節では、今回の聞き取り調査で聞くことのできた一刎の方々の語りから、かつての結婚式の様子をまとめる。それにより、儀式の変遷や通婚圏の拡大について振り返ってみたい。

1960 年代あたりまでは、一刎地区内や隣の村からの嫁取りがほとんどであった。当時は、一刎の住人が「町」と呼ぶ氷見市街地よりも、石川県からの嫁取りの方が多かったという。現在は隣の県になっているが、かつては人やモノの行き来が「町」よりも頻繁だったようだ。1958 年に結婚式を挙げた男性も、「氷見市街地へ続く道路が舗装される前まで、同じく舗装されていないながらも、石川県へ続く道の方が下り坂であったため、歩きやすかった。だから嫁を迎える際にも町から迎えるよりも、石川県から迎えることのほうが多かった気がする」と語った。

また、聞き取り調査を行っていくうちに、親族の紹介や見合いで結婚したということがわかってきた。1964 年に結婚式をした女性は「昔は恋愛結婚ではなく、身分が自分の家より上か同じくらいの身分の人で、親の決めた相手のところへ嫁に行っていた」と話してくれた。親の決めた相手であったため、相手の顔や名前も知らず、嫁ぐことも多かったようだ。1963 年に親族の紹介で結婚した女性は「顔も知らないどころか名前も知らなかった。式が行われる日の間近に家で初めての顔合わせがあったが、恥ずかしくて名前も聞けなかった。初めて名前を聞いたのは結婚式の最中だった」と話している。私は、相手を知らずに結婚したにも関わらず現在まで仲睦まじく結婚生活を営んできたこのご夫婦のお話を聞いて、驚きかつ尊敬の念を覚えた。一方で、親の決めた結婚ということに対して「昔は馬鹿やったから、親の言うままに結婚してしまった」と、あまりよい感情を抱いていないという人がいることもわかった。これは、1963 年頃に 19 歳で嫁入りした女性の話である。この奥さんは、現在のご主人とは、家が近く昔からの顔なじみであった。挙式は行われず、タンスなどの生活必需品となる嫁入り道具のみを持って嫁入りしたというほどで、決して裕福な家同士の結婚ではなかったと思われるが、現在は 3 人の娘とその孫にも恵まれ、家族の話を楽しそうにしてくれた。親の言いなりに結婚したことに対しての後悔はあるかもしれないが、ご主人と結婚されたことに対しての後悔はないように見えた。

また、当時に結婚式を挙げた人は、全員が全員、伝統に沿って第 2 節で述べたような婚姻儀礼を執り行ったわけではなく、経済的な理由によって、儀式に多少の差があったようである。裕福な家では、披露宴を 2 日間に分けて執り行うといったこともあった。例えば、1969 年に結婚式を挙げた女性は「1 日目は親しい人や親族を招いて、2 日目には会社の人を招いて披露宴を執り行った」という。反対に、それほど裕福とはいえない家では、披露

宴は行われず、普段着で嫁入りするといったことも少なくなかった。1952 年に結婚したという女性は「畑に行くような普段着で、こっそりこっそり嫁入りした。質素な式だった」と話してくれた。ただし、1969 年に、23 歳のときに嫁入りした別の女性は、「家が貧しくても、どんな家でも縁の水はたいていやった」と話してくれた。家が貧しかったため、挙式は行われず、引き出物もなかったが、そんな中でも縁の水だけは執り行われた。それが嫁入りの儀式だったという。

1970 年代に入ると、嫁取りの範囲も広がったようだ。県内の高岡市から嫁入りした人や、遠くでは宮城県から嫁入りしたという人もいた。しかし、70 年代はまだまだ、近隣からの嫁取りが多かった。私が聞き取り調査を行った範囲では、1980 年代以降では、一刎や近隣の村の人同士で結婚したという人はおらず、全員が富山市や氷見市、高岡市などから、嫁取りまたは嫁入りをしている。

表 1 からもわかるように、70 年代には、聞き取り対象を行った方の全員が家での挙式を行っている。70 年代までは、比較的に伝統に沿った形式で結婚式が行われることが多かったようだ。1977 年に親同士が決めた見合いで結婚したあるご夫婦は、結婚式の前日に顔合わせを行い、家で式を挙げた。妻は、結婚式前夜の 22 時頃、顔合わせのため仲人人に連れられて花婿となる男性を訪問したのだが、ちょうど風呂屋に行っており、自宅にはいなかった。妻は「びっくりだった」と当時のことを語った。夫は、その後 23 時頃、風呂屋から帰ってきて、無事にお互いの伴侶となる相手との顔合わせを終えた。夫の方も、帰宅した際には「女がおる！」と思って驚いたのだそうだ。通常であれば、顔合わせを行う日には、仲人人があらかじめ「今日あの家には、嫁になる子が挨拶に来るんやぞ」と近所の人々に話すため、当日にはその家の周りに多くの人が集まってきたものだというが、この話を聞くと、肝心の当人たちには知らされていない場合もあったようだ。

80 年代からは、家以外の場所での結婚式が増加している。ただし、現在のように、金沢市や名古屋市といった中規模都市のホテルや海外で挙式するというわけではなく、氷見市内の結婚式場やホテル、会館で執り行われるということがほとんどであった。ちなみに、縁の水はこの頃も多くの結婚式で行われている。1987 年に結婚式を挙げた男性の母親は「家で仏壇詣り、縁の水をやった後で式場へ行って、披露宴をした」と語っている。私の聞き取り調査結果を見ても、1980 年代に結婚した 8 人のうち、縁の水を執り行っていないと回答したのは 1 人だけであった（表 2 を参照）。80 年代に縁の水を執り行わなかった人の中には「縁の水はしなかったが、実家から出てくるときに空の杯を割った」という人もいた（表 2 の縁の水をしていない人数に含む）。このように、似たような儀式は行っていたことがわかった。また 1987 年に結婚式を挙げた男性の母親は「息子のときは、結婚式は借金をしてでもした」と語っており、現在の結婚式に対する意識との違いが垣間見えた。

1990 年代からは北海道や愛知県、岐阜県など嫁取りの場所も様々であり、結婚した後、

一刎地区を離れたという人も多い。1990 年代以降、現在にいたるまでのあいだに結婚式を挙げた人のほとんどが、結婚式を家以外の場所で執り行っており、「家で結婚式を挙げるほうが珍しいのではないか」という声も聞かれた。私自身も、この年代の結婚式といえば確実にホテルか結婚式場で挙式だろうと予想していた。それだけに、2001 年に挙式した女性が自宅で結婚式を行ったと回答した際には、非常に驚いた。

表 1 および 2 からもわかるように、結婚式を家の外で行うようになった後も、しばらくは縁の水は広く行われていた。1991 年に結婚した女性によると、「生家から水を持って行き、式場で縁の水を執り行った」のだという。現在では縁の水を行うのは稀なケースではあるが、2006 年に結婚式を挙げた女性で、家で内仏詣りと縁の水を執り行った後、神社で式を挙げたという方もいた。

縁の水を執り行った人は少数派に転じるのは、1990 年以降のことである。しかし、一刎では、人々が縁の水のことをまったく知らないというわけではないらしい。例えば、2000 年代に結婚式を挙げた人に話を聞くと、「縁の水ってなんですか」と聞き返されることが多々あったが、こちらが説明すると「それなら知っている」と回答する人がほとんどであった。2005 年に結婚した男性も「縁の水という言葉は聞いたことがない」と語ったが、詳しく話を聞いてみると、玄関先で杯を割るという儀式を行っていたことがわかった。

しかし、「全くわからないし、聞いたこともない」と回答する人も何人かいる。チャペルを完備し、結婚式を執り行っているという氷見市内のホテルの従業員に話を聞いたが、「縁の水」という言葉も、それがどんな儀礼なのかも知らないといった様子であった。この事実から、結婚式場で縁の水を行うということは、氷見市内でもめったにないことが推測される。現在では、縁の水を自発的に行うということは稀である。

通婚圏の変化

以上の聞き取り調査の報告でも記述してきたとおり、時代が下るにつれて、一刎住人の通婚圏は拡大してきた。表 3 は、一刎地区在住または出身の男女計 34 人に対して「どこから嫁入り（婿入り）しましたか」という質問に対しての回答を集計し、まとめたものである。

表 3.　婚姻圏の変遷

結婚式を挙げた年代	1941～1950	1951～1960	1961～1970	1971～1980	1981～1990	1991～2000	2001～2012
一刎	0	2	4	0	0	0	0
隣村	1	2	3	2	0	0	0

氷見市	0	0	1	0	1	0	1
その他富山県内	0	1	1	1	3	4	2
富山県外	0	0	0	1	0	1	3
計	1	5	9	4	4	5	6

ここから、1970 年代頃から一刎周辺での結婚は減少し、氷見市や富山県内の他市からの嫁取りが増えていることがわかる。1980 年代頃から氷見市外からの嫁取りが、1990 年代頃からは富山県外からの嫁取りが目立つようになってきた。2000 年代に結婚した夫婦の半数（6 組中 3 組）が県外からの嫁取りであった。岐阜県や愛知県といった比較的近くから嫁いできたという例もあったが、北海道から嫁いできたという例も聞かれた。ここからも、嫁取りの範囲は年々広がっていったことがわかる。

4. まとめと考察

以上の記述を踏まえて、最後に、「縁の水」が衰退した背景についてまとめる。聞き取り調査の結果から、縁の水が行われなくなりはじめた 1990 年代に先立ち、結婚式が西洋化したことがわかる（表 1 および表 2 を参照）。私たちの生活様式はすみずみまで西洋の影響を受けているが、それに合わせて、冠婚葬祭の折に、近隣の人々や親族を招いて伝統的な儀式を執り行えるだけの広い家も少なくなった。結婚式を執り行う場所が家からホテルや結婚式場に変化してきたことが、縁の水の衰退背景のひとつであることは間違いないだろう。

また、近代化による通婚圏の拡大も、縁の水衰退の背景のひとつということができる。第 3 節で述べたように、一刎では 1990 年代頃から嫁取りの範囲が拡大しているが、富山県外から嫁いできた人のほとんどは、氷見市の「縁の水」の風習を知らない。1958 年に隣の村から嫁を迎えたある男性は、妻も両親も縁の水のことは知っていたにも関わらず、縁の水は執り行わなかったのだという。この夫婦は「古臭いことはやらんでええ」と考えたのだそうだ。「挙式を執り行わなくても縁の水はたいてい行った」という時代にも、縁の水を古臭い、面倒くさいと考える人がいたのである。だとすると、縁の水を行う人が減少しつづけ、知っている人すら少なくなってきた近年、富山県外から嫁いできた人の中に、縁の水を古臭い儀式、面倒くさい儀式と考える人がいてもおかしくはないだろう。

最後に指摘できるのは、結婚という概念自体の変化が結婚式に対する人々の意識を変えていったということである。これは、結婚式を行わなかった人々の語りからうかがえるものである。表 2 からわかるように、結婚式を挙げなかったと答えたのは 41 組中 4 組で、その内訳は 1960 年代に 2 組と 2000 年代に 2 組である。前者の、1960 年代に結婚した夫婦

は、いずれも経済的な理由により婚礼儀礼を執り行うことができなかった。一刎地区の住人の語りから 1960 年代の段階では、結婚式はできるのであれば、「必ずするもの」、「みんなに披露するもの」と考えられていたと推測することができる。また結婚式を挙げなかったと答えてくれた人はいずれも、普段着で「こっそりと」嫁入りしたと話してくれた。つまり、いかなる理由であれ結婚式を挙げられない人は、そのことに対してある種の引け目を感じていたのだと考えられる。それに対して、2000 年代に結婚した 2 組の夫婦が結婚式を挙げなかった理由は、それぞれ「両者とも再婚であったため、派手なことは控えたかった」というものと、「将来に向けてお金を貯めておきたかったから」というものであった。ここには、「個人の自由」で結婚式を挙げなかったというニュアンスがある。かつてとは異なり、今日では結婚式を挙げなかった人も、近隣や親戚の人びとに対して引け目を感じることもない、ということかもしれない。

この変化の理由は、1970 年代あたりまでは、結婚とは「イエ」同士を結びつけるものとして考えられていたためではないだろうか。かつては、結婚相手を決めるのも「イエ」なら、儀式の盛大さを決めるのも「家」の格（とでも言いうるもの）に直結していた。一方で現在では、結婚とは「個人と個人」のものであり、当事者が結婚式を挙げるかどうか決断すればよいものとなった。同時に、結婚式は「行わなければならない儀式」から「花嫁にとっての晴れ舞台」となったのである。縁の水の衰退も、この変化に関連しているように思える。新郎と新婦が持ち寄る水が「家の水」であるなら、それを混ぜ合わせる儀式は「両家の合体」の象徴に、それを飲み干す儀式は「イエと個人の合体」の象徴にほかならないだろう。

他方で、縁の水とは、結婚が「イエ」によって縛られ、管理されていた時代の中での、数少ない「花嫁のため」の儀礼であったという解釈も成り立つように思える。「嫁取り」の儀式の中で、花嫁自身が嫁入りの儀式での中で「これからこのイエの一員となる」ということを約束し、婿方のイエとの融合を表しながらも花嫁の家と嫁ぎ先の家をつなぐような儀礼はこれだけなのではないかと、私には思える。現在のように、結婚相手も、結婚式のスタイルも、衣装や招待客も自分たちで選べるのとは異なり、かつての結婚はすべてが「イエ」によって決められていた。結婚相手がどんな人物であるかさえ知らない当事者自身が「この人と結婚する」という実感や、決意をすることは難しい。そんな中で、この儀礼は花嫁に「結婚」というものに対する実感や、心の中での踏ん切りをつける場を与えてくれる儀礼ではないだろうか。また、花嫁にとって「家が変わる」ということは、重大なことであり、育ててくれた両親と別れることを意味する。そんな花嫁にとって、生家の水を自分で注ぎ、嫁ぎ先の家の水と合わせ、飲み干すという儀礼には、一種の安心感を抱かせるという役割もあったのではないだろうか。

縁の水が単なる形式ではなく、以上のような伝統的価値観を含んだものだとすれば、現

在の衰退も当然の帰結といえるだろう。そんな中、1991 年に結婚式を挙げたという女性は結婚式場に生家の水と杯を持参し、式場で縁の水を執り行ったという。実際のところ、彼女のように結婚式の形に合わせて、伝統的儀式も形を変えて行うという人もいないわけではないのである。私もこの調査を進めるうちに、縁の水がなくなるのは寂しい、10 年先、20 年先にも残ってほしい、私自身も自分が結婚式を挙げるときには執り行ってみたいと思い始めた。外から来た人間がそう思うのだから、地元の人びとがこの儀礼がなくなることを寂しいと感じたり、この儀礼を結婚式でやってみたいと思ったりすることも、また当然なのかもしれない。彼女のように現代でも縁の水を執り行うような人を増やし、縁の水を未来に残すためには、少しでも多くの若者に「縁の水」を知ってもらう必要がある。この報告書が少しでも、縁の水を未来に残そうと思う人を 1 人でも増やす手助けとなることを願わずにはいられない。

注

1）母親だけが嫁取りに同行する場合、本家の当主や主だった親戚の男衆を 1 人、親代に頼んだ。

2）古くは、嫁入り道具一式が嫁取り当日に持参される例は少なく、特にたんすと長持は、嫁取り後の初めての里帰りである「初チョーハイ戻り」の折か、あるいは初子が誕生する頃までに届けられることが多かった。

3）嫁取りに際して、嫁の実家から嫁ぎ先へ持参される嫁入り道具のひとつ。

4）罄子（きんす）または、磬子（けいす）と呼ばれる仏具のひとつ。

参考文献

氷見市立博物館、1993 年、『氷見の婚礼装束展―打掛けを中心として―』、氷見市立博物館
清水真由美、2001、『氷見の婚礼習俗に関する研究―氷見市中谷区の事例を中心に―』富山大学人文学部卒業論文

12.　氷見市街地における子どもの遊びの変遷

山口　佑介

はじめに

私が子どもの頃は、自分の家の周囲に子どもが遊べるような遊具や公園のような施設はなく、親にも「子どもだけで遠くまで行ってはいけない」と言われていた。そのため、近所の友達の家に行ったり、ゲームをしたりするくらいしか遊びはなかった。そのことについて、私の祖父母はあまり好意的ではなかったようで、私が幼い頃には、「自分たちが子どもの頃は、よく外で遊んだものだ」と何度も話していた。そのたびに私は子ども心ながら、遊べる場所もないし遊ぶものもないのに、どうすればよいのかと思っていた。

事前調査の段階で、私は氷見市の市街地に位置する「いきいき元気館」という学童施設を訪れ、そこで遊ぶ子どもたちと交流を持った。そのなかで私は、娯楽施設があまり見られない氷見市の市街地において、子どもたちが普段どのように、どのような場所で遊んでいるのだろうかと思った。私は、氷見市の市街地において、子どもたちの遊びやその変化について知りたいと思い、調査テーマとすることに決めた。

1.　調査概要

今回の調査では、氷見市在住の児童に対しては前述のいきいき元気館を含む 3 つの児童館を訪ね、観察調査を行った。それより上の年代の人々に対しては、比美町商店街付近でフィールドワークを行い、子ども時代の遊びや行動範囲について聞き取り調査をした。具体的には、小学校低学年から 80 代以上までの 84 人（男性 46 人、女性 38 人）である（表 1）。なお、女子中学生と 20 代男性の意見が得られなかったことをここでことわっておく。また、調査期間は 2013 年 4 月から 9 月であり、特に 9 月 14 日から 20 日までの調査合宿にて集中的におこなった。

表 1.　聞きとりに応じてくれた人の人数

年代／性別	男性	女性	合計（人）
小学校低学年	16	12	28
小学校高学年	6	1	7
中学生	5	0	5
高校生	1	1	2
20 代	0	1	1
30 代	2	4	6
40 代	2	3	5
50 代	1	2	3
60 代	4	6	10
70 代	8	7	15
80 代以上	1	1	2
計	46	38	84

2.　調査対象となった各施設について

2-1.　比美乃江小学校

本調査で対象とした児童は、氷見市立比美乃江小学校区の子どもたちである。現在の比美乃江小学校は、平成 18 年に稲積小学校、一刎小学校、余川小学校、上余川小学校、東小学校、加納小学校の 6 つの小学校が統合してできた小学校で、児童数は氷見市内の小学校のなかで 2 番目に多い 547 人である。そのため校区は広く、市街地だけでなく山村部から通学している児童もいる。比美乃江小学校区には、「いきいき元気館」、「稲積学童」、「鹿野っ子広場」の 3 か所の学童保育施設がある。市街地にあるいきいき元気館以外の 2 か所にはスクールバスが出ており、小学校低学年の児童は放課後になるとスクールバスで学童保育に移動する。

2-2.　比美乃江小学校区の学童保育施設

比美乃江小学校にある 3 か所の学童保育のうち、主に調査を行ったのは、氷見市中央町にあり、市街地に最も近い学童保育である「いきいき元気館」である。1、2 階に保健センター機能を、3 階に大・小会議室やホールを備えた「元気館」（平成 14 年 2 月開館）と、「ボランティア総合センター」や「地域子育てセンター」等が入っている「いきいき館」（平成 15 年 4 月に旧東小学校の体育館を改修して開館）で構成されている。館長の坂田さんによ

ると、いきいき元気館はそもそも市民に広く使われる健康増進施設として設立された。学童保育としては、平成 15 年に別の場所にあったものが移転し、そこからネット遊具などが設置され現在の形になったそうだ。本調査ではいきいき館の 2 階にある児童館に足を運び、児童や職員の方々に聞き取り調査を行った。いきいき館の休館日は年末年始のみであり、平日の放課後だけでなく、土日や夏休みも多くの児童で賑わっている。設備は児童書や漫画の本棚、机、パソコン、オルガン、遊具としてフラフープや卓球台、ボールなどがあり、運動が好きな児童とも室内で遊ぶのが好きな児童のどちらにも対応できるようになっている。外に小さいグラウンドがあるが、そこで遊んでいる児童はあまり見られず、運動する場合は 1 階の多目的広場で遊んでいる場合が多い。また多目的広場は 2 階まで吹き抜けになっており、定置網を模したネット遊具が設置されている。

平日の児童数は 60 人ほどだが、休日になると小学校高学年や中学生、親子連れも利用し、とても賑わっている。

図 1.　比美乃江小学校と学童保育の位置

他の 2 つの学童保育施設についても簡単に記しておく。まず「稲積学童」は、稲積地区及び余川谷地区の学童保育である。廃校になった稲積小学校を利用しているが、学童保育として利用されているのは教室 2 部屋と、体育館のみである。校庭もあるのだが、少年野球の練習に使用されているため、体を動かして遊ぶ場合、外ではなく体育館で遊ぶ。児童数は 40 名ほどである。

もうひとつの「鹿野っ子広場」は、旧鞍川保育園を利用して作られた加納地区の児童館で、平成 22 年にスタートした。教室と体育館から成り、建物自体は 3 つの学童保育のなか

で最も小さい。しかし、施設の前には神社や空き地があり、体を動かして遊ぶ子どもも多く見られた。児童数は 30 人ほどである。入り組んだ脇道にあるため、場所は少しわかりにくい位置にある。2 か所とも、いきいき元気館と比べると施設の規模や設備は小さい。

3. 世代ごとの遊びの違い

3-1. 小学校低学年の遊び

小学校低学年の児童については、前述した 3 つの児童館を訪れ、遊びの様子を観察した。いきいき元気館では多目的広場やネット遊具で遊ぶ子どもが多数を占めた。前述のとおり多目的広場は吹き抜けになっており、子どもたちはネット遊具を伝って 1、2 階を移動し、縦横無尽に動き回っていた。また子どもたちは男女分け隔てなく遊んでいた。ドッジボールや鬼ごっこなど、大人数で遊ぶ場合はもちろん、男子児童と女子児童が二人で絵を描いたり、オルガンを仲良く一緒に弾いたりしている光景も見られた。

稲積学童では、体を動かして遊ぶ子どもが多く見られた。子どもたちは体育館でサッカーやかけっこ、バドミントンをしていた。バドミントンはトーナメントを組んで試合が行われていた。遊びの内容はいきいき元気館の児童とあまり違わないが、同じ内容の遊びをしているのに、男女別で遊んでいる様子が見られた。また、旧稲積小学校の校庭は少年野球の練習場となっているため、「学童の子どもたちは校庭では遊ばない」のだという。

鹿野っ子広場でも外で遊ぶ子どもが多く、神社の遊具や近くの空き地で遊んでいる様子が見られた。子どもたち男女一緒に遊んでいる光景は見られたが、友人グループができ上がっており、「別のグループの子たちとは全然遊ばない」と語った子どもがいた。すべり台によじのぼっている子どもたちもいれば、木の枝を拾って集めている女の子たちもいて、確かに別々で遊んでいる印象があった。

どの児童館でも、学年にわかれて遊んでいる様子は見られなかった。また、放課後にすぐスクールバスが出るため、校区が異なる友人とは遊ぶことはない。

3-2. 小学校高学年の遊び

休日のいきいき元気館には、普段学童保育を利用しない小学校高学年の児童もやってくるので、調査では彼らに対しても聞き取りを行った。小学校 6 年の男子は「平日はハンドボール部の練習があって忙しい。休みの日は元気館に集まってゲームしたりネットで遊んだりする」と語ってくれた。比美乃江小学校では 4 年生からクラブ活動が始まるため、放課後に遊ぶことは少なくなると考えられる。また彼は、「友達の家には迷惑になるからあまり行かない。ここ（いきいき元気館）だったら遅くまで遊んでいられる」とも語った。ところで、小学校高学年ともなると、自転車で広い範囲を移動する子どもも出てくるらしく、

いきいき元気館でも加納地区から自転車で来ている子どもが見られた。

3-3.　中高生の遊び

学童保育を利用しているのは主に小学生だが、今回の調査では登下校中の中学生や高校生数名にも話を聞くことができた。ある男子中学生は「学校のグラウンドでサッカー部の練習をしている」と、別の高校生女子も「部活の練習が忙しい」と話してくれたように、中高生の多くは部活動で時間をとられていることが多いことがうかがえた。部活の帰りにコンビニエンスストアでカードゲームを購入している数人の中学生男子が見られたり、女子高生が「暇なときは友達の家でゲームする」と語ってくれたりと、室内で遊ぶ傾向が多く見られた。

3-4.　大人はどのように遊んでいたのか

ここまでで、現在の子どもの遊びの様子、特に学童保育というごく近年に生まれた環境での子どもたちの遊びについて記述してきたが、次に、氷見市街地における過去の遊びについても、聞き取り調査からまとめておこう。

今回の聞き取り調査に協力していただいた方のなかでも、最高齢者に属する 80 代の男性は、商店街や学校のグラウンドでドッヂボールや鬼ごっこ、かくれんぼをして遊んだり、海で釣りをしたりしたと語ってくれた。女性の遊びとしては「お宮さんでかくれんぼや鬼ごっこをしたり、お手玉や毬でも遊んだ」と話してくれたおばあさんがいた。

50 代から 70 代男性の間でも、海で遊んだという声が多く見られた。「海で花火やかんしゃく玉を打ち上げた」(70 代男性)、「テトラポットに登って釣りをした」(50 代男性) など、現代では危険だと思われるような遊びが多く見られた。ある 60 代の男性が「今の子どもみたいに遊び道具がなかったし、危険なこととか悪いことしかできなかった」と笑いながら話してくれた。また、竹をバットや釣り竿にしたり、瓦倒しや釘刺し、カッチン玉（ビー玉)、缶けりをしたりと、あたりに落ちていたものを拾って遊んでいたという。女性からも海で遊んだという声は聞けたが、貝を拾って食べたり普通に泳いだりと男性ほど危険なことをしているようには感じられなかった。また、女性からは湊川で遊んだという声もよく聞かれ、手拭いを使って川でメダカを獲ったという 60 代の女性がいた。また、50 代の男女から「はなてんか」という遊びの話を聞くことができた。この遊びについては後述するが、他の年代からは全く話題に上がらなかった。

40 代より若い世代からは、海で遊んだという話があまり聞かれなくなった。神社で野球やかくれんぼをしたという 40 代男性や、湊川で遊んだという 40 代女性もいたが、いずれも海には子どもだけでは行ったことはないとのことだった。

30 代になるとゲーム機やボードゲームで遊んだという声が多くなる。「ファミコン（ファ

ミリーコンピューター)」を一日中していたとか、家で遊ぶときはオセロをしていたという話が聞けた。男性からは野球をしたり秘密基地を作ったりと外で遊んだという話もあったが、女性はそのような遊びをしていなかったようである。

20 代からは遊び場としていきいき元気館があげられるようになり、ネット遊具で遊んだとか、卓球をしていたという話が聞けた。

4. 聞き取り調査で収集した新旧の遊びの説明

本節では、調査で聞くことのできた遊びについて、図を交えて解説する。

はなてんか（ながてんか）

50 代の男女から教えてもらった遊びで、男性は「はなてんか」、女性は「ながてんか」と呼んでいたが、内容的に同じものだと思われる。10 人くらいでする遊びで、まず地面に花の形を書き、花の内側にいるチームと外側を走り回るチームにわかれる。花の外側の人が１人ずつ花の周りを一周する。内側の人たちが外側を走る人を突き飛ばしたり捕まえたりできれば内側の人たちの勝ちとなり、一周できれば外側の人の勝ちとなる（図 2)。

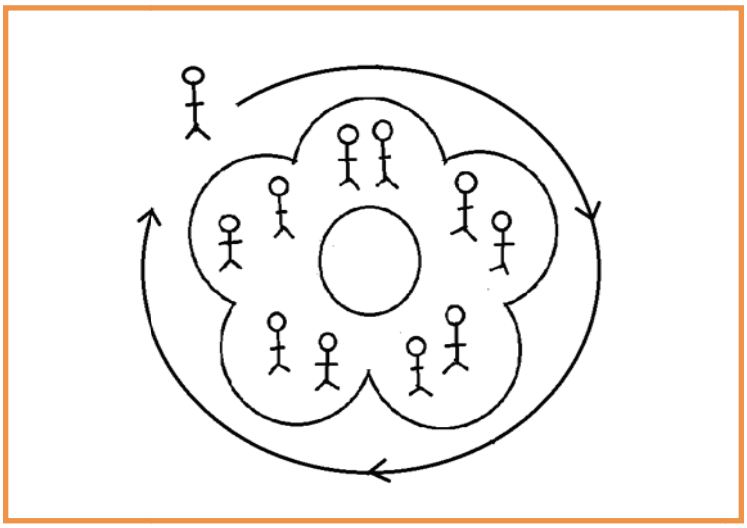


図 2.　はなてんか（ながてんか）

陣地取り

60 代の男性から話してもらった、2~5 人でする遊びである。まず地面に四角い枠を描き、角から親指を支点に中指で円を描いて、それらを各人の陣地にする。次に、平べったい石を拾ってきて、各々の陣地に置き、順番を決める。それが終わったら、最初の人から自陣

に置いた石を指ではじき、その軌跡に線を引く。さらに続けて、二度石をはじいて線を引くのだが、その時に最初の自分の陣地に石が戻らなくてはならない。戻れなかった場合には線は取り消されるがうまく戻ると陣地が広がる、最終的に一番陣地が広い人の勝ちとなる（図 3）。

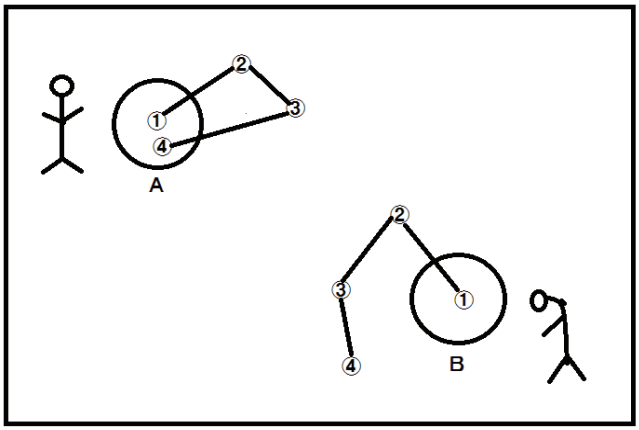


図 3.　陣地取り

釘刺し

60～70 代の男女に話を聞いた、2~5 人でする遊び。まず地面に三角形を描く。順番を決めたら、初めに描いた図の中に釘を刺し、そしてそれを囲うように刺していく。刺さったところから、次に刺さったところへ直線を引く。失敗して刺さらなかったら交代する。次の人は線が重ならないように、また相手の行き先を邪魔するように狙って刺す。相手の行く手を塞ぎ、ギブアップさせれば勝ちとなる（図 4）。

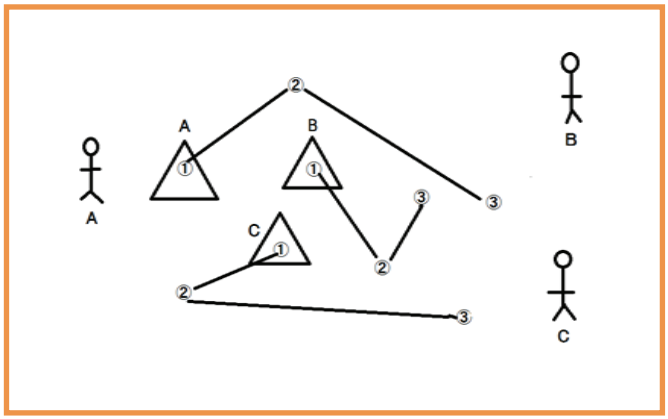


図 4.　釘刺し

瓦倒し

70 代の男性に話を聞いた、10 人くらいでする遊び。ふたつのチームに別れ、片方のチームが門番側、もう片方のチームが攻撃側になる。地面に大きな四角形を描き、それをいくつかの階層に分け、門番を 1 人ずつ配置し、一番奥の門番の後ろ側にいくつか瓦を立てておく。攻撃側は 1 人ずつ四角形の中に攻め込み、門番に捕まらないようにして奥にたどり着き瓦を倒す。瓦が全部倒せたら攻撃側の勝ちとなり、ひとつでも残れば門番側の勝ちとなる（図 5）。

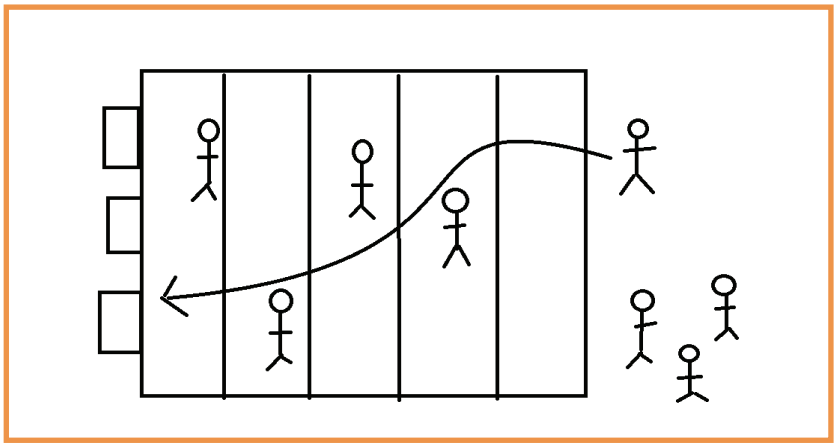


図 5.　瓦倒し

ハンター

この遊びは、小学校高学年から話を聞いたものである。10 人くらいで行う、鬼役がリーダー役を探し当てる遊びで、最初に鬼を決めて、次に（鬼にはわからないように）リーダーを指名する人を決める。指名する人は他の人にわからないようにリーダーを決め、これが終わったら全員が円形に並ぶ。輪に混ざったリーダーが鬼以外の人にウィンクすると、それに気づいた相手はその場で倒れなくてはいけない。誰がウィンクしたかを探し当てることができれば、鬼の勝ちとなり、決められた人数をウィンクして倒すことができればリーダーの勝ちとなる。

5.　世代ごとの遊び場の違い

5-1.　子どもたちの遊び場

ここまで、各世代の遊びの内容について見てきたが、この節では、世代ごとの遊び場について述べる。

まずは、小学校低学年の遊び場である。小さな子どもに遊んでいる場所を言葉で説明し

てもらうことは困難だったため、今回の調査では「メンタルマップ」を書いてもらうという手法を用いた。メンタルマップとは、地形図や縮尺に基づいて描かれる正確な地図とは異なり、個人の目から見た主観的な地図のことを指す（中村+岡本、1993）。一般的な地図と比べると、メンタルマップには、地図の描き手が土地や空間をどのように認識しているかが、直接的にあらわれるという特徴がある。今回は、児童に普段の遊び場とその周辺についてメンタルマップを描いてもらい、分析を行った。ちなみに、この調査はいきいき元気館の児童のみを対象とし、稲積学童、鹿野っ子広場では行っていない。

地図を描いてもらうにあたっては、自宅と学校、いきいき元気館の 3 か所にくわえて、その他にもよく遊ぶ場所があればそれも含めるように説明した。図 7 は子どもに描いてもらった地図のうちの 1 枚である。幼い子どもの描いたものとなると、地図というより絵に近いものが多かった。また、あまった紙に落書きをしている子もいた。地図を分析すると、自宅、学校、いきいき元気館以外の遊び場としては、近所の友達の家を描いた児童が多く見られた。小さい子どもだけで遠くに遊びに行くことは難しいのか、学校のグラウンドやいきいき元気館、近くの友達の家などが小学校低学年の遊び場となっていることがわかった。

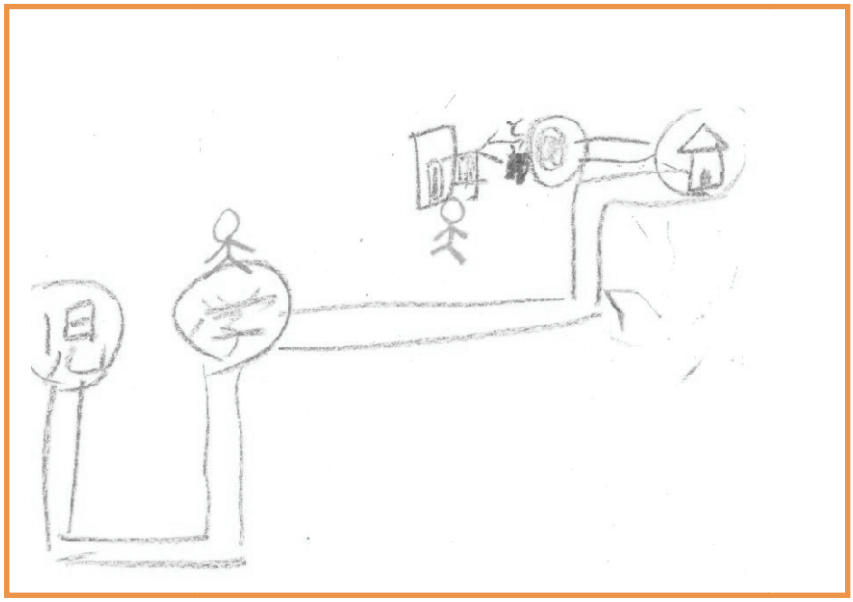


図 7.　小学校低学年の手描き地図

小学校高学年や中高生の遊び場については、直接話を聞いた。この年代になると、自転車を使って広範囲で遊ぶ子どもが増えるのではないかと筆者は予想していたが、意外にも、それほど遠くにまで行って遊ぶことがないらしいことがわかった。というのも、小学校高

学年や中学生にもなると、放課後は部活動に時間を費やすため、遠出してまで遊びに行くことがあまりないからである。例えば、中学 2 年生の男子は、自転車でそれほど遠くまでは行ったことはなく、室内で遊ぶことが多いと語っていた。

5-2. 大人はどこで遊んでいたのか

筆者が中高年の方にインタビューをしていると、「静かな町なのに外から子どもの声が聞こえてこない」と嘆く声があった。この語りについて、小学生から高校生までを対象にした調査結果が、子どもたちの多くが屋内で遊ぶようになったことを物語っており、その語りを裏づけている。では、現在の大人たちは子どもの頃どこで遊んでいたのだろうか。そして、氷見市における遊び場はどのように変わっていったのだろうか。ここからは、今の大人は昔どこで遊んでいたのかを、遊びの内容と同様に高齢者から順に説明する。

80 代では、商店街や海、朝日山公園、光善寺が遊び場として挙げられた。朝日山公園は市街地から 500m ほど離れた公園である。70 代から 50 代までの遊び場もおおむね 80 代のものと一致するが唯一の違いは、商店街で遊んだという声が聞かれなくなったということである。

このことについて、興味深い語りが得られた。80 代女性が語ってくれたところによると、「子どもの時に氷見の大火があって商店街一帯が燃えてしまった。その復興と一緒に道路が整備されて遊べなくなった」のだという。氷見の大火とは、昭和 13 年 9 月 6 日に下伊勢町から出火した火災である。この火災はタバコの不始末から失火し、前日の台風によるフェーン現象のために火は大きく広がってしまった。火はまたたく間に氷見市中心部を焼き尽くし、1500 戸以上を焼失させた。図 8 は大火の被害状況を地図に示したものであるが、現在の商店街の辺りはほぼ全焼していることがわかる。この大火の復興にともない、商店街の道路も舗装されている。その復興プランが図 9 の地図である。図 8 の地図と比較すると、道路の本数が増え直線的に整備されている。この 80 代女性の話を加味すると、70 代より若い年代の人々から商店街で遊んだという話があまり聞かれなかったということには、氷見大火による商店街の消失と復旧作業によって、当時の子どもたちの遊び場が狭められたのではないかと考えられる。

40 代以降は、海で遊んだという声が少なくなり、代わりに家の近所や学校のグラウンドで遊んだという声が多くなった。50 代男性の話によると、「漁港の方で工事が続いて、海で遊べなくなった」らしい。また、40 代男性が、「危険だから子どもだけで海に行ってはいけない」と親からよく言われていたとも話していた。当時氷見市では、昭和 30 年から河川からの土砂流入の対策のために堤防が築かれたのをきっかけに、氷見漁港の整備が行われていた。さらに国などの数次にわたる漁港整備計画を受け、平成 16 年に現在の氷見新漁港が完成した。男性達の語りの背景には、この工事の存在があったものと考えられる。

30 代以降になると、外よりも室内で遊んだという声が増える。現在の 30 代の人々が子どもだった昭和 55 年頃、「ファミリーコンピューター」を代表とする家庭用ゲーム機が登場し、日本全国で大流行した。このように、ゲームが普及したため室内で遊ぶ傾向が強くなったと考えられる。

20 代以下の年代からは、いきいき元気館で遊んだという声をよく聞くことができた。小学校低学年が学童保育で元気よく遊んでいることに加え、休日に小学校高学年の児童や親子連れが訪れていることからも、いきいき元気館が、氷見市の若い人たちや子どもたちにとって、重要な遊び場所になっていることが言えるだろう。

図 8.　氷見の大火による被害地域

（『氷見市史 2』p.437 より）

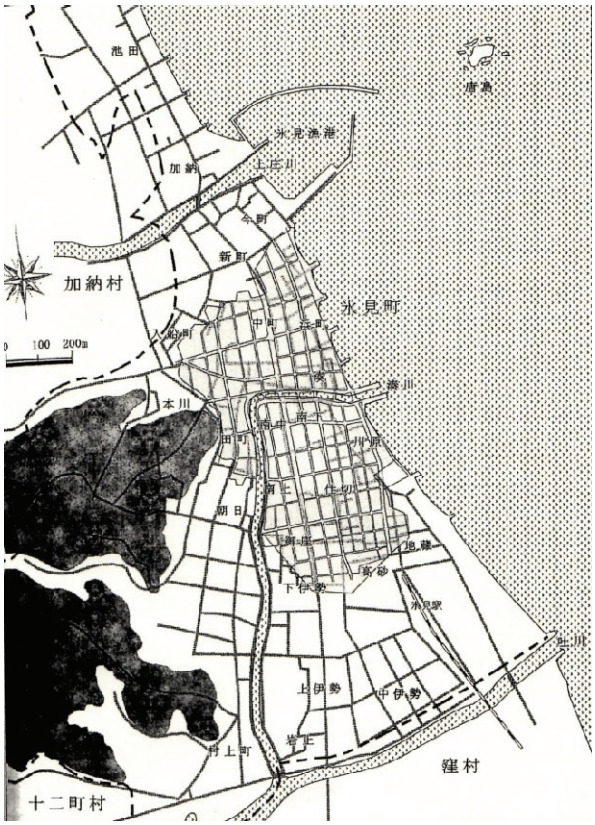


図 9.　復興プラン図

（『氷見市史 2』p.444 より）

おわりに

今回の調査では様々な年代の方と話をすることになり、珍しい経験ができたと思う。また、子どもの頃を懐かしそうに語ってくれる方との話をしていると、筆者まで嬉しくなった。また、調査を通して氷見市の子どもの遊びの変化には、災害や漁業の発達、児童館の

設立など様々な要因があったことがわかった。しかし、調査当初は、遊びの変化の要因には自動車やゲーム機の普及といった全国的なものが多いと予想していたので、実際には氷見市特有の理由も多く見られたことに驚いた。

「はじめに」で書いたように、筆者の祖父母は自分たちが子どもの頃と比べて、現代の子どもが外で遊ばないことを不満げに思っていた。今回の調査で話を聞いた氷見市の高齢者も同じことを感じていたようだ。しかし、今回の調査を通して子どもが外で遊ばなくなったことは、時代の変化として仕方のないことだと思った。また、50 代〜70 代の人が遊んでいた、「はなてんか（ながてんか）」や「釘刺し」のような昔の遊びが、今では行われていないことも同様であろう。

しかし「限られた行動範囲や能力で楽しみを見つける」という子どもの本質は、時代を経ても変化していないのではないだろうか。確かに、高齢者が子どもだった頃と比較すると現代の子どもは行動範囲が狭くなっているのは事実である。だが、児童館で様々な遊具を使って縦横無尽に遊び回る子どもたちを見ていると、筆者にはそのように感じられた。

謝辞

今回の調査を行うにあたっては、多くの方々のお世話になった。特に聞き取りに応じてくださった氷見市民の皆様、ご自身もお話しをしてくださり、敷地内で子どもたちへの聞き取りを許可してくれたいきいき元気館、稲積学童、鹿野っ子広場の職員の方々、そして一緒に遊びながらお話しを聞かせてくれたり地図を描いてくれたりした子どもたちに、ここで謝意をあらわしたい。本当にありがとうございました。

参考資料

中村豊・岡本耕平、1993 年、『地理学選書　メンタルマップ入門』、古今書院
氷見市史編さん委員会、2006 年、『氷見市史 2　通史編二　近・現代』、氷見市
氷見市史編さん委員会、2004 年、『氷見市史 8　資料編六　絵図・地図』、氷見市
氷見市市立博物館、出版年不明、『氷見のあゆみ』、氷見市立博物館

13.　子どもの遊びの変化――氷見市一刎を調査地として

伊藤　愛由美

はじめに

私が今回調査した一刎は、氷見市市街地から離れた山村である。街なかで子ども時代を過ごした私にとって、一刎のような自然に囲まれた場所は新鮮であった。この小さな村を訪れた際に、街から離れているこの雄大な自然に囲まれた土地では、子どもが自分たちで考えだした遊びが多く存在するのではないかと思った。また、この土地に昔から伝わる伝統的な遊びが存在しているのならば、それも知りたいと思った。そして私は、この土地に独特の遊びについて調査することにした。

私が今回実施したのは、主に中年から高齢者の方に対する聞き取り調査である。各家を訪問し、一刎出身の方に子どものころどのような遊びをしていたか、どこで遊んでいたかについて話してもらった。また、村の中で偶然出会った散歩中の方や、畑で作業中の方にも協力していただき、同様の質問をした。話を聞くことができたのは、60 代以上が 18 人、50 代以下が 14 人である。本章では以上のデータをいかして、時代の移り変わりにともなって子どもの遊びがどのように変化したのかについても述べる。

以下ではまず、高齢者（60 歳以上）の遊び（第 2 節）、中高年とそれより下の世代の遊び（第 3 節）、現在の子どもの遊び（第 4 節）についてそれぞれ記述を行う。調査では、60 歳以上の高齢者 18 人（うち男性 11 人、女性 7 人）、中高年以下の大人の 7 人（うち男性 5 人、女性 2 人）から話を聞いた。また、各家を訪問することで小学生からも話を聞くことができた。

1.　高齢者の遊び

ビー玉遊び

ビー玉遊びは、まず木の幹に印をつけ、その印の高さからビー玉を落として転がす。次に別の人が同じ位置からビー玉を転がし、どれだけ遠くまで転がせるかを競った。前の人が転がした位置よりも遠くへいったら、相手のビー玉が自分のものになった。これは 70 代の男性が話してくれた遊びである。

池遊び

一刎には石仏（いしぼとけ）池という池があり、この池でかつては泳いだり釣りをしたりしたそうだ。

池で遊んだと聞いたのは、70 代、40 代、20 代の男性からが主であるが、女の子も遊んでいたようである。ある 70 代男性によると、当時は、女性はブルマを履き、一緒に池で泳いで遊んだらしい。夏の暑い時期に泳いだのは、とても気持ち良かったとも話してくれた。10 代よりも下の世代からは池で遊んだという話は聞かなかった。

写真 1.　一刎地区の地図（地区内にある案内看板を筆者が撮影）

虫（およびその他の小動物）捕り

聞き取り調査では、数多くの虫やその他の小動物を捕る遊びについても聞くことができた。70 代の男性はオニヤンマやカブトムシを捕ったと教えてくれた。また、虫捕りというと男の子が好むイメージを持っていたが、60 代の女性も川でサワガニやメダカ・おたまじゃくしを捕ったと話してくれた。今はその川の周りは草だらけになってしまっており、近づくことは困難だそうだ。

クギとり（クギたおし）

クギとりとは、地面に立てたクギに手持ちのクギを投げて当てる、という遊びである。まず地面に円を描き、その円のなかに何本かクギを刺して立てる。そのクギに向かって自分の持っているクギを投げて、刺さっていたクギを倒したら、そのクギを自分のものにできる。しかし、相手のクギを倒し、かつ自分の投げたクギが地面に刺さらないと相手のク

ギをもらえないというルールも 70 代の男性から聞いた。ルールは一つではなく、人や年代によって多少変わるようだ。クギとりは地面を使うため、雪が降らない季節にする遊びである。クギとりをしていたのは男性だけのようで、話してくださったのは、主に 70 代と 80 代以上の人であった。

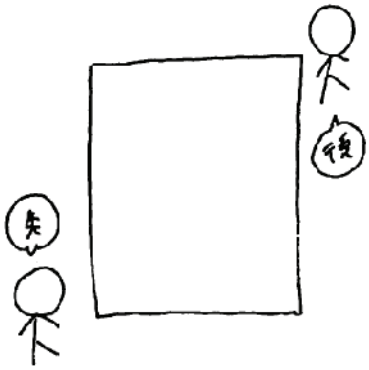
パーカー

パーカーとはいわゆる「めんこ」のことである。これも雪が降らない季節にする遊びで、80 代から 70 代の男性がしていた遊びである。

地面とり

地面とりとは、地面に描いた「陣地」を、お互いにとりあう遊びである。まず地面に大きく四角を描き、じゃんけんで順番を決める。四角の対角線上に位置して、勝った人から、親指を支点にして残りの四本指で半円を描いて陣地を取っていく。その後は、自分の陣地を支点に同じ要領で、自分の陣地を広げていく。最後に一番多く自分の陣地を取った人が勝ちである。また、終わり方は確実に決まっているわけではないらしい。授業の合間の休憩中という短い時間で遊んでいたため、休憩が終わるとともにゲームも終わっていたそうだ。「陣地のとりあい」というからには、いかにも男の子の遊びのようだが、意外にも、この遊びの想い出を語ってくれたのは 70 代の女性であった。

①

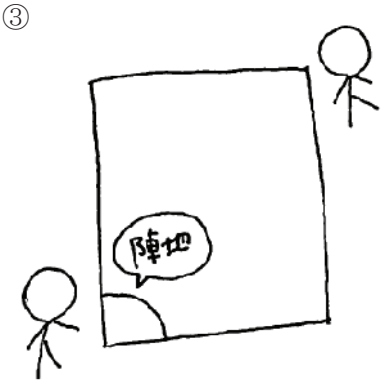


四角を描き先攻後攻を決め、
対角線上に位置する

②

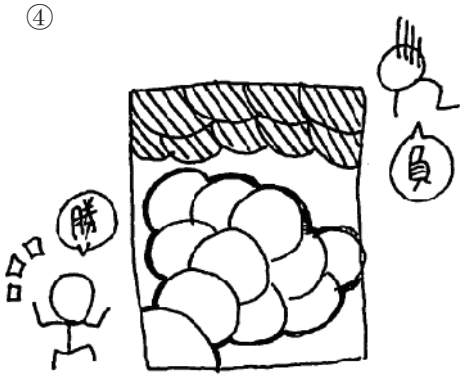
親指を支点にして残りの四本指で
半円を描く

③



②の方法で陣地を取り進めていく

④



陣地を多く取った方の勝ち

図 1.　地面とりの遊び方

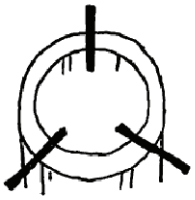
竹スキー・竹ソリ

山間の村だけあって、一刎ではスキーやソリで遊んだという人が多かった。いずれも、竹を使った手作りのものを使用していた。スキー板は、竹を三本に割り、割った竹の先端を火にあぶって曲げて作ったそうだ。曲げた部分が元に戻らないように、針金で固定したらしい。滑った場所は田んぼの土手や道路の坂で、そこに積もった雪を踏みしめてから滑った。これは、雪がよく降り、積もるという特徴がないとできない。また、これも田んぼや坂道が多いという一刎の特徴を活かしていると言えるだろう。ソリもスキーと同様に、三本に割った竹の先端を火であぶり、それを木箱の下に二本固定して作った。この木箱のなかに座り滑ったそうだ。

竹スキーと竹ソリをして遊んだという話は男性ばかりで、女性では 60 代の 1 人からしか聞かなかったが、その女性は、竹スキーは父親に作ってもらったらしい。男の子は自分で作ったり、親と一緒に作ったりする人が多かったようである。80 代の女性にスキーやソリで遊んだかどうかを聞いたところ、「女の子は慎ましく振る舞うべきだと言われる時代だったため、あまり外では遊ばなかった」と話してくれた。80 代の男性は、冬はスキーで学校から家に帰ったこともあると楽しそうに話してくれた。

また、高齢者でなく、若い世代では 40 代の男性のなかでも、竹スキーや竹ソリで遊んだことがある方が 3 人いた。

①



竹を三本に割る

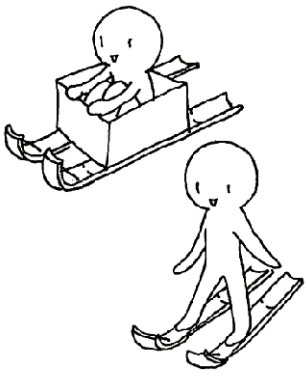
②

割った竹の先端を火であぶる

③

火であぶって曲げる

④



スキー板にしたり、木箱を固定してソリにして遊んだ

図 2.　竹スキー・竹ソリの作り方

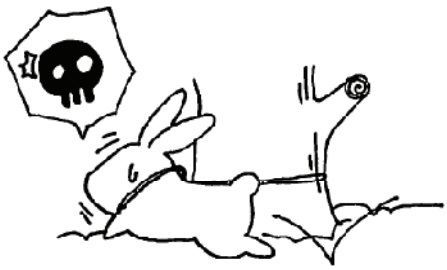
野うさぎ捕り

一刎では、野うさぎを捕まえることがあった。捕まえたのは冬のあいだで、雪にうさぎの足跡がついている場所の木の近くにワナを仕掛けた。ワナは、針金で作った輪っかで、これを木の下の方に固定する。輪っかをうさぎの頭が通る程度にしておくと、走ってきたうさぎが輪っかに頭を突っ込み、体の方がひっかかって通り抜けなくなるのである。捕まえたうさぎは皮をはいで食べたそうだ。これは、70 歳の男性から聞いた遊びである。この男性は、子どものころ食糧が無かったとも話してくれたが、それは一刎が海から離れていることや町から離れていることが関係しているのではないか。道路が舗装される前であったことを考慮に入れると、食糧を求めて街へ出るというのはさぞかし大変だっただろう。その結果、動物を捕まえて食べることがあったのではないかと思う。遊びとはいうものの食糧確保の仕事の一環ともとれるように思えた。

①

針金で作った輪っかを、
木の下の方に固定する

②

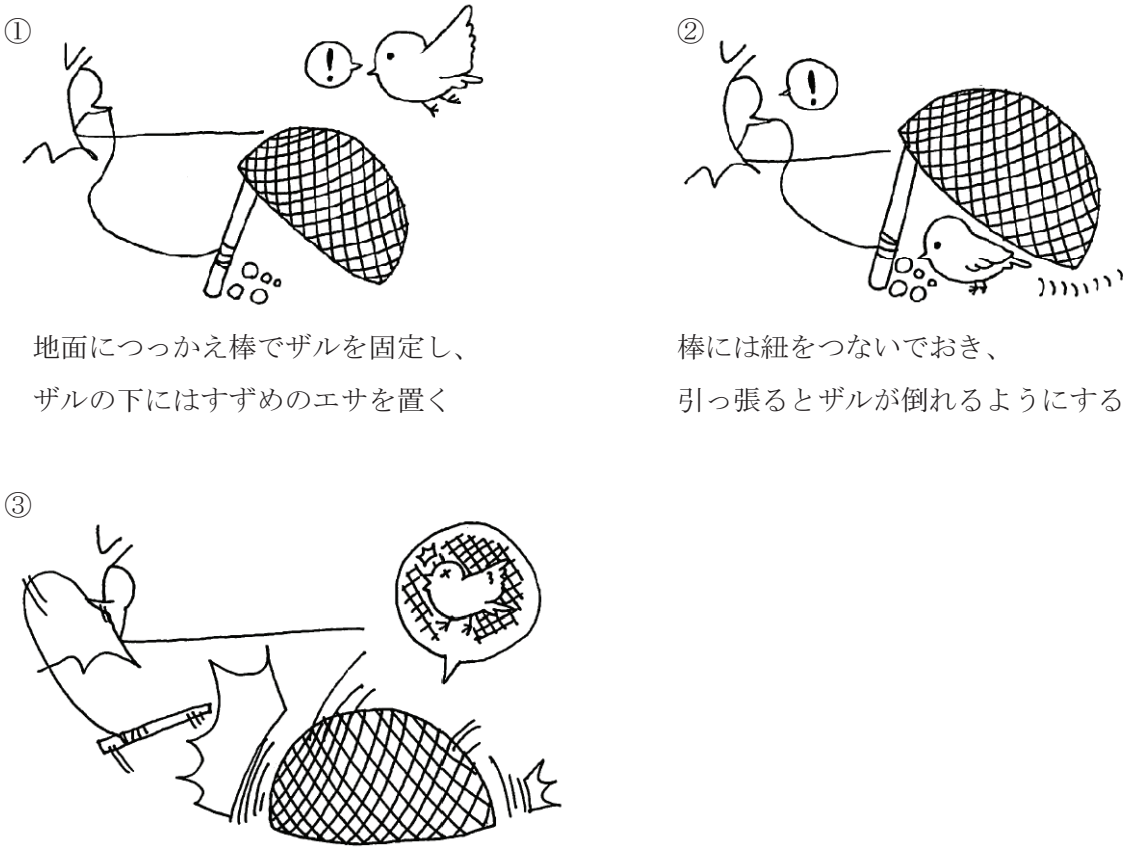


走ってきたうさぎが頭を輪っかに突っ込み、抜けなくなる

図 3.　うさぎの捕まえ方

すずめ捕り

一例では、すずめもワナをかけて捕った。地面につっかえ棒でザルを固定し、ザルの下にはすずめのエサを置く。棒には紐をつないでおき、引っ張るとザルが倒れるようにする。すずめがエサを求めてカゴの下に入ったら、隠れていた人が紐を引っ張りザルの中にすずめを閉じ込めた。エサの少ない冬の方がワナにすずめがかかりやすいため、すずめ捕りはもっぱら冬の遊びであった。捕まえたすずめは、皮をはいで食べたそうだ。正直なところ、私はすずめを食べるなどとは想像もしていなかったため、この話を聞いて内心とても驚いた。これは、70 歳の男性から聞いた遊びである。



地面につっかえ棒でザルを固定し、
ザルの下にはすずめのエサを置く

棒には紐をつないでおき、
引っ張るとザルが倒れるようにする

すずめがカゴの下に入ったら、紐を引っ張る

図 4.　すずめの捕まえ方

うずまき

冬の日に、まず雪を踏みしめてうずまきの道をつくる。うずまきの両端をスタート地点として、2 人がうずまきの上を走る。両者が出会ったところでじゃんけんをして、負けたら元の位置（自分のスタート地点）に戻るという遊びである。先に相手のスタート位置にたどり着いた方が勝ちである。

他にも、「うずまき」と似た遊びがあった。ルールは、地面に八の字を書いてその上で追いかけっこをする。八の字は、冬の雪の積もった日に、雪を踏みしめて道をつくったよう

だ。60 代の女性に教えてもらった遊びだが、特に名前はないそうだ。

子守り・家の手伝い

「子どものころ、どのような遊びをしていたか？」と聞いたところ、80 代と 70 代の女性 1 人ずつから、「遊ぶ暇なんてなかった。兄弟の子守りをしていた」という答えが返ってきた。70 代の人は、向かい隣の家と一緒に子守りをしていたらしい。70 代の女性が子どもだったときは、6 人兄弟や 7 人兄弟が当たり前だったらしく、休日も子守りをしていたそうだ。また 70 代以上の人からは、「学校から帰ってくるとすぐに家の手伝いをしていた」、「畑仕事を手伝っていた」というような話を男女合わせて 5 人から聞いた。高齢者の人が子どものころは習い事や部活動が無く、遊ぶ時間が長いと思っていたため、これらの回答は意外であった。ただし、話してくれた様子から、仕方なく子守りや手伝いをしていたというような感じではなく、子守りや家の手伝いをするのは当たり前のことだと感じているような印象を受けた。

2. 中高年以下の世代の遊び

次に、中高年以下の世代の遊びについてである。聞き取り調査では、40 代が 2 人（うち男性 1 人、女性 1 人）、30 代男性が 1 人、20 代が 3 人（うち男性 2 人、女性 1 人）、10 代は男性 1 人から話を聞いた。現在の高齢者が子どもだったころと比べると、同じところと変化したところがある。

たとえば、高齢者世代の人びとが泳いで遊んだ池では、釣りをしたという人が多かった。40 代の男性が子どものころは、石仏池にはコイやフナがいたようだ。この男性は、釣りはしなかったそうだが、他の男の子たちはしていたらしい。20 代の男性が子どものころはブラックバスが釣れたそうだ。ボートに乗って、釣りをしていたらしい。40 代の男性からも 20 代の男性からも、釣りをしたという話だけで、泳いだという話は聞かなかった。私が子どものころは、池や川で遊ぶことは危険だとみなされ、学校や親に禁止されることが多かったため、私と同世代の人が水遊びをしていたのは意外であった。

また、虫や小動物を捕るという遊びでは、高齢者世代のころと同じく、40 代の男性はクワガタ・カブトムシ（オス）・ヤモリ・カエルを捕まえたという。クヌギの木に蜜がついており、クワガタやカブトムシがいたそうだ。比較的若い世代では、30 代の男性はアブを捕まえて、刺されないようにするため口ばしをちぎってアブの体に糸を巻きつけて、アブを飛ばせて遊んだという。ただし、野うさぎ狩りやすずめ捕りをしたという声は、この世代からは聞かれなくなった。

この世代になってはじめて出てくる遊びに、「野球」がある。この頃になってはじめて道

具がそろうなどしたのだろう。ただし、人数が少ないなどの理由から、独自のルールで遊んでいたようである。40 代の男性によると、当時は一刎小学校のグラウンドで野球をしていたのだが、グラウンドの北側にはロープのある山があり、その山の上段に当たるとホームランだったそうだ。審判がいないため、アウトかセーフでよくもめたとも話してくれた。20 代の男性が子どもの時も野球をしたそうだ。その頃は、子どもがさらに少なかったため、ピッチャーとバッターのみでしていたらしい。野球をした場所は、一刎小学校のグラウンドだそうだ。2006 年 3 月に一刎小学校は閉校し、現在、グラウンドはパターゴルフ場として、一刎に住む高齢者の交流の場となっている。

3. 現在の子どもの遊び

今回の調査では、各家庭の子どもがどのように遊んでいるかについても話を聞いた。3 世帯の計 6 人（うち男性 5 人、女性 1 人）の小学生から話を聞いた。それによると、現在でも子どもの外遊びはある程度健在であることがわかった。たとえば、小学 1 年生と幼稚園の年少の男の子の兄弟によると、基本的に外で遊ぶことが多いようだ。外で遊び、家に帰ってくるときには草や木の枝をよく拾ってくると、この兄弟の母親から聞くことができた。また、小学生の男の子たちによると、冬は家の中で過ごすよりも、外に出て雪遊びをすることが多いそうだ。雪合戦をしたり、雪が積もっているときには落とし穴を作って友達を落としたりして遊んでいるらしい。現在、小学 5 年生の男の子は、3 年生の時まではかまくらを作っていたが、最近は雪が少なくなったため、作らなくなったとも話してくれた。

とはいえ、全体的にみると、かつての遊びの多くはすでにすたれてしまったようである。かつての遊びに取って代わったものとして、真っ先に指摘できるのは、「テレビゲーム」の存在である。実際のところ、一刎における子どもの遊びとしてテレビゲームが普及しはじめたのは、かなり以前にまでさかのぼる。特に 1983 年に発表された任天堂の「ファミリーコンピュータ」以来のゲーム機の家庭への普及の影響は、一刎でも大きかったようである。今回の調査では、40 代より下の世代で、テレビゲームで遊んだという声が聞かれた。40 代の女性は、近所に住む同世代の子どもがいなかったため、あまり外には出ず家でテレビゲームをしていたそうだ。他にも、20 代の男性 2 人が、子どもの頃にテレビゲームをしていたと話していた。テレビゲームの普及にともなって、子どもが外へ出て遊ぶ機会が減ったのは、間違いないであろう。また、言うまでもなく、その影響は現在も続いており、今回話を聞いた小学生 7 人の中でも 5 人の男女が、普段から「Wii U」や「3DS」などのゲーム機で遊んでいると話してくれた。このうちのある男の子は、同級生が一刎には女の子 1 人しかいないため、あまり友達とは遊ばないそうだ。

子どもの外遊びに取って代わったものとして次にあげられるのは、学校における部活動

の普及である。たとえば、現在小学生の男の子に、普段どのような遊びをしているかを尋ねたところ、「放課後や週末もハンドボールの練習があるからあまり遊ばない」という答えが返ってきた。また、20 代の男性も「小学校 1 年生のときから部活のような感じで土日も卓球の練習があったため忙しかった」と話してくれた。以上の調査結果は、二様に解釈できるように思う。ひとつは、部活動などで実施される「スポーツ」が遊びに取って代わった、ということである。もうひとつは、高齢者の人の子ども時代に比べると、部活動を中心とする学校活動のために、子どもの遊ぶ時間が減っているらしいということである。ちなみに、一刎小学校が 2006 年に閉校してからは、一刎に住む小学生は市街地にある比美乃江小学校へスクールバスで通っている。このように、かつてよりも長い通学時間がかかることも、子どもたちが自由に使える時間を圧迫しているのではないだろうか。

4. まとめと考察――なぜかつての遊びが見られなくなったのか

調査を進めるうちに徐々にわかってきたのは、かつて高齢者が子どものころしていた遊びを、現在の子どもたちはしていないということである。現在の子どもたちが部活動で忙しいことや、テレビゲームで遊ぶことについてはすでにふれたが、以下では、それとは別の、さらに背後にある理由を考察する。

かつての遊びの衰退の理由として真っ先にあげられるのが、一刎における少子化である。集落の中で一緒に遊ぶ子どもがいなければ、伝統的な遊びをするわけにはいかない。高齢者の方が子どものころにしていた遊びを見てみると、複数人がそろわなければ遊びとして成立しないものや、みんなでするからこそ、楽しいであろう遊びが多く見られる。

少子化の影響はかなり早くからあったようである。たとえば、40 代の女性は「近所に住む子どもがいなかったから、家でテレビゲームをしていた」と、40 代の男性は「子どもが少なかったから野球はバッターとピッチャーのみでしていた」と話している。また、20 代以下の人の聞き取り調査からわかったのは、彼らの多くが、ゲームや漫画・テレビアニメのカード集め、パズルなどの、いわゆる「1 人遊び」をしていることである。ある小学生の男の子は「一刎に同級生は 1 人しかいないためあまり友達とは遊ばない」などという話も聞いた。子どもたちの話を聞いていると、彼らも率先して 1 人遊びをしているわけではなく、どちらかというと一緒に遊ぶ子どもがいないため仕方なしに 1 人で遊んでいるというような印象を受けた。

子どもたちが外遊びをしなくなった別の理由として考えられるのは、大人たちが子どもの外遊びを「危険」と考えるようになったらしいことである。たとえば、60 代の女性は小学生の孫は外に出たがるが、外に出るのは危険だから、外で遊ぶのはまだ早いと言い聞かせている」と話していた。こうした考え方が広まった原因として考えられるのは、一刎に

おける自動車の普及である。一刎のように市街地から離れた山村での生活に、車は不可欠である。村を走る車の数が増えるにつれて、それまで遊び場所であった家の前の道路が「危険な場所」になっていったのではないだろうか。

家の外が「危険な場所」になっていくのと並行してか、子どもたちの遊びも徐々に危険なものから遠ざかっているように思える。たとえば、高齢者が子どものころは男女ともに石仏池で泳いで遊んでいたにもかかわらず、中高年より下の世代からは釣りだけになった、という変化はすでに指摘したとおりである。現在の小学生になると、池で遊ぶこと自体しないようだ。また、30 代よりも下の世代からは、竹スキーや竹ソリをしたという話は聞かれなかった。この変化は、少々の危険をかえりみずに、全身で水や雪を感じる遊びが少なくなってきている、ということのように感じた。家の前の道路での遊びや池遊びが危険とみなされる、現在の子どもたちの遊びの幅は、確実に狭まってきているだろう。

おわりに

調査を進めていくと、一刎でも遊び方が変化してきていること、また伝統的な遊びが衰退していることが分かった。このまま、一刎の伝統的な遊びや、自然を肌で感じながらめいっぱい体を動かす遊びは無くなってしまうのだろうか。あらゆることが危険視される風潮や少子化を考えると、子どもたちが外に出る機会はますます減り、家の中での「１人遊び」が増えていくだろう。これはある意味では仕方のないことなのかもしれない。しかし、子どものころに学年関係なく大人数で遊びまわったことは、私の中でもとてもよい思い出として残っている。また、今となっては、友人との遊びは人との接し方やルールを学ぶよい機会であったとも思う。地域の子ども同士で遊ぶ機会を持つことが出来ずに、「１人遊び」が増えていくのは、少し寂しい気持ちになった。

伝統的な遊びは世代を超えたコミュニケーションの機会を生むという利点がある。たとえば、両親が共働きであった私は、祖母と過ごす時間が長かった。その中で、学校や地域の友達とはあまりしなかった、「あやとり」や「折り紙」のような遊びを教わった。あやとりを教わった翌日には、早速学校に持っていき、友達と一緒にあやとりをしたものだ。自分の子ども時代を振り返ると、外で同年代の子供たちと一緒に走り回って遊ぶのも好きだったが、祖母とこたつに入ってゆったりした時間を過ごすのもとても楽しかった。一刎では、小学生くらいの子どもが祖父母と一緒に暮らしている家庭がいくつかあったが、彼らはおじいちゃんやおばあちゃんとも遊んでいるのだろうか。少なくとも、今回の調査でそうした話は聞けなかった。ゲームで時間をつぶして過ごすのもいいが、一刎の子どもたちには、ぜひおじいちゃんやおばあちゃんとも遊んでほしいと思う。そうすれば、きっと新たな遊びや楽しさの発見があるだろう。そして、本章で紹介した遊びや、まだ私の知らな

い一例の伝統的な遊びが、一つでも多く次の世代に伝わっていってほしいと思う。

（イラスト：村田葉月）

地域社会の文化人類学的調査23
人と地域が織りなす文化―富山県氷見市の調査記録―

発行日：2014年3月20日
編　集：野澤豊一・藤本　武
発　行：富山大学人文学部文化人類学研究室
〒930-8555 富山市五福3190
Tel.：　076-445-6185
E-mail：anthro@hmt.u-toyama.ac.jp
印　刷：㈱なかたに印刷
〒939-2741 富山市婦中町中名1554-23